秋田県文化財調査報告書第255集

県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

――中の沢遺跡――

１９９５・３

秋田県教育委員会

1　ＳＫ08土坑　完掘状況（北→）

2　ＳＫ13　完掘状況（西→）

県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

中の沢遺跡

1995・3

秋田県教育委員会

序

本県には、先人の遺産である埋蔵文化財が数多く残されています。この埋蔵文化財を保護し、後世に伝えてゆくことは、私たちの務めであります。

このたび、県営ほ場整備事業（琴丘地区）に伴い、本教育委員会は、工事に先立って中の沢遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代の土器埋設炉や土坑などを検出し、当時の生活の一端を明らかにすることができました。

本報告書は、これらの調査成果をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護のために広く活用され、同時に郷土の歴史資料として役立てば幸いです。

最後になりましたが、本調査の実施並びに本報告書の刊行に当たり御援助・御協力をいただきました秋田県農政部農地整備課、秋田県山本農林事務所、琴丘町教育委員会、鹿渡土地改良区をはじめ関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成７年３月

秋田県教育委員会

教育長　橋　本　顕　信

例　言

1．本報告書は、県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の１冊目の報告書である。

2．本報告書は平成６年度に調査した秋田県山本郡琴丘町に所在する中の沢遺跡（略号：３ＮＮＳ）の調査結果を収めたものである。

3．本書の執筆は、柴田 陽一郎が行い、利部 修、長澤 和則の協力を得た。

4．発掘調査および遺物整理にあたって、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、五十音順）

　栗山知士　木村将来　八木光則

凡　例

1．各遺構に付している略記号は以下のとおりである。

　ＳＫ（土坑）　ＳＫＦ（フラスコ状土坑 ）　ＳＮ（焼土遺構）

　ＳＲ（土器埋設遺構）　ＳＤ（溝跡）　ＳＸ（その他の遺構）

2．遺構の番号は検出順に通し番号とした。整理段階で欠番となったものもある。

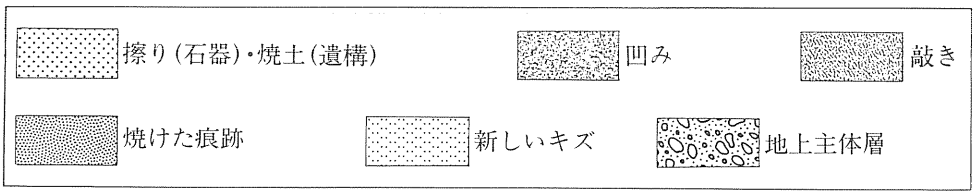
3．土層断面図の土色や、土器の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

4．挿図中の遺物実測図と拓本は土器と石器に分け、それぞれ通し番号とした。石器類の番号にはＳを付した。図版（写真）中の遺物もそれにしたがった。

5．石器観察表中の単位は、長さ、幅、厚さがcm、重さがｇである。

6．観察表中の法量の推定値は（　）で表示した。

7．挿図中のスクリーン・トーン、シンボルマークは以下のように使い分けた。これ以外のスクリーン・トーン、シンボルマークは各図中に凡例を示した。



目　　次

巻首図版
例言・凡例
目　次
第１章　はじめに
　第１節　発掘調査に至るまで …… 1
　第２節　調査の組織と構成 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境
　第１節　遺跡の位置と周辺の地形 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の概要
　第１節　遺跡の概観 …… 7
　第２節　調査方法 …… 7
　第３節　調査経過 …… 9
第４章　調査の記録
　第１節　基本層序 …… 10
　第２節　検出遺構と遺物 …… 10
　　（１）土坑 …… 10
　　（２）フラスコ状土坑 …… 21
　　（３）焼土遺構 …… 21
　　（４）土器埋設遺構 …… 24
　　（５）溝跡 …… 27
　　（６）その他の遺構 …… 28
第３節　遺構外の出土遺物 …… 39
第５章　放射性炭素年代測定とその樹種 …… 56
第６章　まとめ …… 58
図　版　１～22
あとがき
報告書抄録

挿図目次

第１図　中の沢遺跡と周辺遺跡地図 …… 2
第２図　工事計画と周辺地形図 …… 6
第３図　調査範囲と周辺地形図 …… 8
第４図　グリッド杭設定図 …… 9
第５図　遺構配置図 …… 11～12
第６図　基本層序図 …… 13
第７図　土坑（１） …… 14
第８図　土坑（２） …… 17
第９図　土坑（３） …… 18
第10図　フラスコ状土坑・焼土遺構（１） …… 25
第11図　焼土遺構（２）・土器埋設炉・溝跡（１） …… 26
第12図　溝跡（２） …… 29
第13図　溝跡（３） …… 30
第14図　その他の遺構（１） …… 31
第15図　その他の遺構（２） …… 32
第16図　遺構内出土土器（１） …… 33
第17図　遺構内出土土器（２） …… 34
第18図　遺構内出土石器（１） …… 35
第19図　遺構内出土石器（２） …… 36
第20図　遺構内出土石器（３） …… 37
第21図　遺構内出土石器（４） …… 38
第22図　遺構外出土土器（１） …… 41
第23図　遺構外出土土器（２） …… 42
第24図　遺構外出土石器（１） …… 45
第25図　遺構外出土石器（２） …… 46
第26図　遺構外出土石器（３） …… 47
第27図　遺構外出土石器（４） …… 48
第28図　遺構外出土石器（５） …… 49
第29図　遺構外出土石器（６） …… 50
第30図　遺構外出土石器（７） …… 51
第31図　遺構外出土石器（８） …… 52
第32図　遺構外出土石器（９） …… 53
第33図　遺構外出土石器（10） …… 54

表　目　次

第１表　中の沢遺跡と周辺遺跡一覧 …… 4
第２表　中の沢遺跡出土材の放射性炭素年代測定結果とその樹種 …… 56

図 版 目 次

図版１　１　中の沢遺跡遠景　（東→）
　　２　遺跡近景　（北→）
図版２　１　調査状況　（南東→）
　　２　ＳＤ05　調査状況
　　３　ＳＫ08　焼土・炭検出状況　（北→南）
図版３　１　ＳＫ08　焼土・炭検出状況　（北→南）
　　２　ＳＫ08　土層断面　ＳＰ．Ｃ～Ｄ（西→東）
　　３　ＳＫ08　完掘　（南→北）
図版４　１　ＳＫ10　全景　（北東→南西）
　　２　ＳＫ11　完掘　（南東→北西）
　　３　ＳＫ13　土層断面　（西→東）
図版５　１　ＳＫ13　煙出し（？）断面　（西→東）
　　２　ＳＫ13　完掘　（西→東）
　　３　ＳＫ14　土層断面　（東→西）
図版６　１　ＳＫ14　完掘　（西→東）
　　２　ＳＫ24　土層断面　（北東→南西）
　　３　ＳＫ24　完掘　（東→西）
図版７　１　ＳＫ25　完掘　（北東→南西）
　　２　ＳＫ26　土層断面（東→西）
　　３　ＳＫＦ06　土層断面（東→西）
図版８　１　ＳＫＦ06　完掘（北→南）
　　２　ＳＲ27　確認断面　（北東→南西）
　　３　ＳＲ27　最終状況
図版９　１　ＳＤ03　土層断面　ＳＰ．Ａ～Ｂ（北→南）
　　２　ＳＤ03　遺物出土状況　（ＲＰ１，ＲＱ２～３）　（東→西）
　　３　ＳＤ03　完掘　（南→北）
図版10　１　ＳＤ03　完掘　（北→南）
　　２　ＳＸ09　土層断面　（東→西）
　　３　ＳＸ09　完掘（東→）
図版11　１　ＳＸ15　完掘　（東→西）
　　２　ＳＸ21　完掘　（南→北）
　　３　ＳＸ15・16・21　完掘　（東→西）
図版12　１　遺構内土器１－１　１～13
　　２　遺構内土器１－２　14～22
　　３　遺構内土器１－３　23
図版13　１　遺構内土器２－１　26～40
　　２　遺構内土器２－２　41～55
　　３　遺構内土器２－３　56
図版14　１　遺構内土器２－４　57
　　２　遺構内石器１　Ｓ１～Ｓ９
　　３　遺構内石器２　Ｓ10～Ｓ16
図版15　１　遺構内石器３　Ｓ17、Ｓ18
　　２　遺構内石器４　Ｓ19、Ｓ20
　　３　遺構内石器５　S21
図版16　１　遺構外土器１－１　58～66　68～74
　　２　遺構外土器２－２　75～89
　　３　遺構外土器３　90～99
図版17　１　遺構外石器１　Ｓ22～Ｓ30
　　２　遺構外石器２　Ｓ31～Ｓ35
　　３　遺構外石器３　Ｓ36～Ｓ40
図版18　１　遺構外石器４　Ｓ41～Ｓ49
　　２　遺構外石器５　Ｓ50～Ｓ58
　　３　遺構外石器６　Ｓ59～Ｓ67
図版19　１　遺構外石器７　Ｓ68～Ｓ72
　　２　遺構外石器８－１　Ｓ73～Ｓ76
　　３　遺構外石器８－２・９　Ｓ77～Ｓ79
図版20　１　遺構外石器９・10　Ｓ80～Ｓ83
　　２　遺構外石器10　Ｓ84
図版21　中の沢遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真
図版22　中の沢遺跡出土材の樹種顕微鏡写真

第１章　はじめに

第１節 発掘調査に至るまで

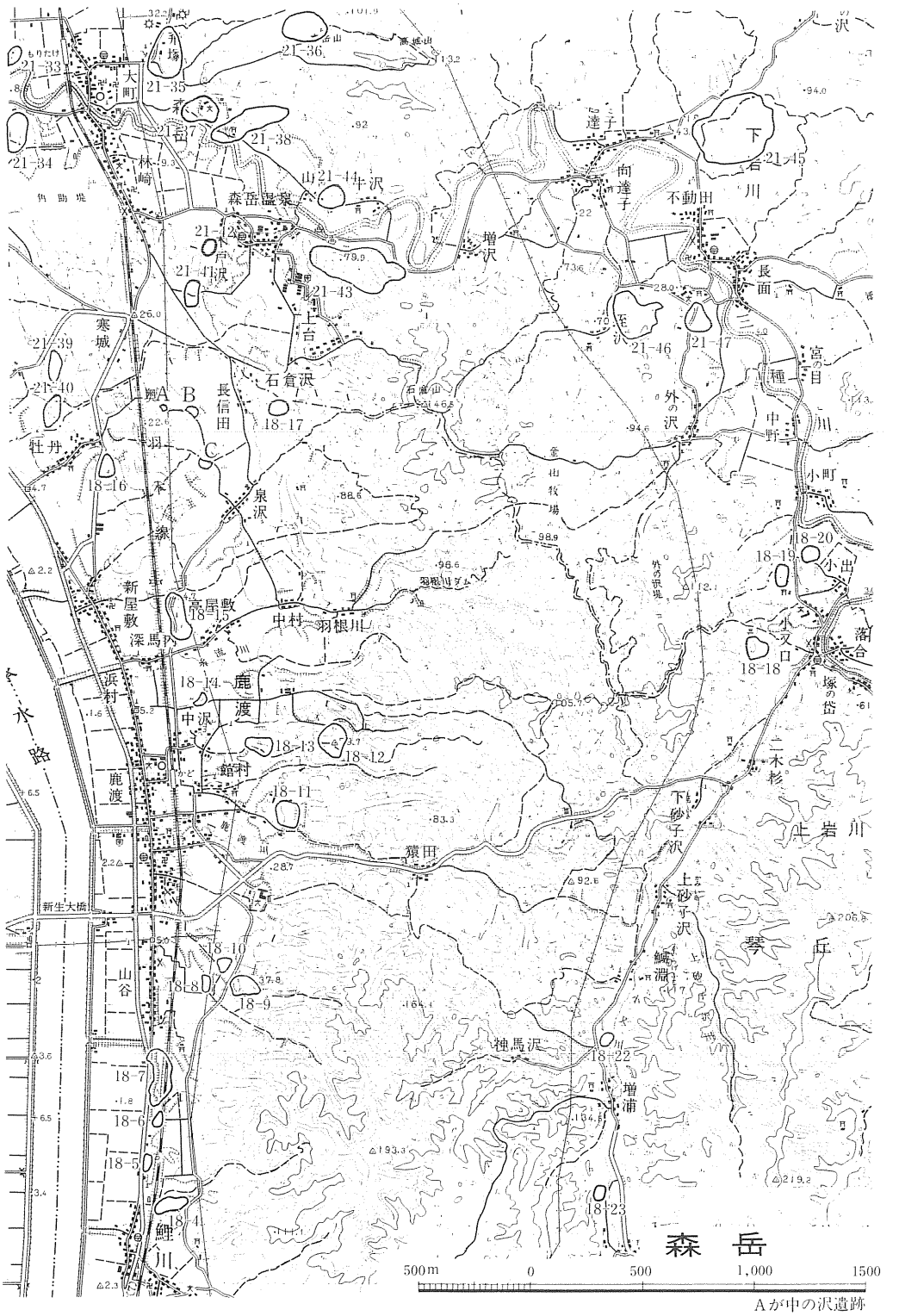
琴丘地区の県営ほ場整備事業は、水田の規模を拡大して１ヘクタール毎の区画に整備し、農業経営の効率化をはかる目的で策定され、その工事は平成４年から実施されている。

本ほ場整備事業の計画地区内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、秋田県教育委員会は、平成４年に計画地区内の遺跡分布調査を行い、計画地区内に係る家の下遺跡の存在を確認した。この結果を受けて、翌平成５年の秋には範囲確認調査を実施し、事業計画範囲内における遺跡の広がりが明らかになり、翌平成６年に本調査を実施したのである。

中の沢遺跡については、工事実施区域として確認されていなかったことから、遺跡分布調査および範囲確認調査の対象からはずされていた。しかし、家の下遺跡の本調査と併行して行われていたほ場整備工事（伐根作業）中に、土器や石器が見つかり、その工事区域内の試掘をしたところ、遺物とともに溝跡や焼土などの遺構が検出され、遺跡の範囲が確認された。この遺跡の保存について、秋田県教育委員会は原因者と協議の結果、遺跡の本調査は記録保存の措置をとることで合意し、平成６年に急遽、本調査を実施することになったものである。

第２節　調査の組織と構成

所　在　地	秋田県山本郡琴丘町鹿渡字中の沢48・63外
調査期間	平成６年７月11日～平成６年８月８日
調査面積	3,300㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	利部　修　（秋田県埋蔵文化財センター調査課学芸主事）
	柴田　陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター調査課文化財主査）
	長澤　和則　（秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員）
総務担当者	藤肥　良清　（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
	佐藤　広文　（秋田県埋蔵文化財センター総務課主任）
	須田　輝樹　（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調査協力機関	秋田県山本農林事務所　琴丘町教育委員会　鹿渡土地改良区



Aが中の沢遺跡

第１図　中の沢遺跡と周辺遺跡位置図

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と周辺の地形

１．地理的位置（第１図）

遺跡はおおよそ北緯40°４′20″、東経140°５′８″の位置にある。本遺跡はＪＲ奥羽本線鹿渡駅から北方約3.2ｋｍ、八郎潟の残存湖である東部承水路から北東方向約2.0㎞の距離にある。

２．地形概要（第１～３図）

能代・山本地方は秋田県の北西部に位置し、出羽丘陵地の北寄りの部分にあたる。当地方は東に奥羽脊梁山地より分岐する太平山山地に連なる七座山山地・房住山山地、北には白神山山地が占め、西は日本海に面している。この周辺の地形は、大きく、山地・丘陵・段丘・低地・砂丘および干拓地に分けられ、この段丘・低地・砂丘に能代平野が広がっている。

能代平野では中央部を米代川が西流し、この川の北では白神山地から、南西流する河川が日本海に注ぎ、南では三種川との間に、丘陵地より流下した小河川が南北に分かれ、それぞれ米代川と三種川に注ぐ。さらに、三種川の南では丘陵地より流下した小河川が西流して八郎潟に注いでおり、三種川の西側丘陵地に沿って低い段丘が発達している。

能代平野は本州の日本海沿岸でもっとも段丘地形の発達のよい地域の一つである。段丘堆積物の層相や段丘面の高度分布などから、米代川より北では河成面が優勢なのに対して、南では海成面が卓越し、地盤運動が北上がり南下がりに進行したことが推定されている。なお、これらの段丘堆積物は最上部１～２ｍが、通常、黄褐色～赤褐色の粘土か砂混じり粘土のような細粒物質である。三種川～新屋敷の地域では５段の海成面が隣接しており、本遺跡は上位から３段目の森岳Ⅱ面と呼ばれる海成段丘上に立地していて、その標高は19～20ｍである。今回の調査区はこの段丘面の北東部に位置し、調査区の北～東側は１段低い水田および沼沢や堤となっている。

第２節　歴史的環境

琴丘町に所在する遺跡は、琴丘町史によれば、23箇所で、このうち、中の沢遺跡（Ａ）のように縄文時代に属する遺跡が19箇所、館跡が４箇所である。発掘調査が実施されているのは、縄文時代に属する宝竜前遺跡と高石野遺跡の２箇所である。また、1994（平成６）年には、秋田県教育委員会が県営ほ場整備関係で、中の沢遺跡のほかに家の下遺跡（Ｂ）・泉沢中台遺跡

第１表　　中の沢遺跡と周辺遺跡一覧

地図番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所蔵者
A	中の沢	集落	縄文、土坑・溝跡・土器埋設炉など	秋田県埋蔵文化財センター
B	家の下	集落	旧石器・縄文、竪穴住居跡・土坑など	秋田県埋蔵文化財センター
C	泉沢中台	生産遺跡	平安・縄文、土師器・須恵器、鉄滓など	秋田県埋蔵文化財センター
18－4	真山野	包含地	縄文土器	琴丘町教育委員会
18－5	陣場野	包含地	縄文土器	琴丘町教育委員会
18－6	鯉川高石野	包含地	縄文土器	
18－7	高石野	包含地	縄文中・後・晩期土器、石器、土製品、中空土製品、石製品、土坑・竪穴状遺	琴丘町教育委員会
18－8	兵ヶ沢	包含地	石器	琴丘町教育委員会
18－9	館の越館	館跡	空堀	
18－10	狐森	包含地	縄文土器、石器	琴丘町教育委員会
18－11	北牛渕	包含地	縄文土器	琴丘町教育委員会
18－12	古館城跡	館跡	空堀・段築・井戸	
18－13	諏訪長根	包含地	縄文土器・石器、須恵器	琴丘町教育委員会
18－14	鬼沢口	包含地	縄文土器・石器	琴丘町教育委員会
18－15	宝竜前	包含地	縄文晩期土器・石器、竪穴住居跡・フラスコ状土坑	琴丘町教育委員会
18－16	地蔵長根	包含地	縄文土器、フラスコ状土坑	
18－17	長信田	包含地	石器	琴丘町教育委員会
18－18	向台	包含地	縄文土器、石器	琴丘町教育委員会
18－19	柏木岱	包含地	縄文土器	
18－20	小出	包含地	縄文土器	
18－22	増浦	包含地	縄文土器	
18－23	西増浦	包含地	縄文土器	
21－33	小狭間館	館跡	古井戸、土塁	工藤良夫
21－34	鳥矢場	包含地	縄文晩期土器・石器・石棒	山本町公民館、唐土三郎
21－35	東飛塚館	館跡	縄文土器・石鏃・石匙など	山本町公民館
21－36	ケゴ館	館跡	段築	
21－37	関の台	包含地	縄文土器（壷）、石鏃など	山本町公民館
21－38	藤巻館	館跡	空堀	
21－39	古館堤	包含地	縄文土器・石器	山本町公民館
21－40	古館堤頭	包含地	縄文中期土器・石器（石鏃・石匙など）土偶・竪穴住居跡・フラスコ状土坑	山本町公民館
21－41	東堤沢	包含地	縄文土器・石器	山本町公民館
21－42	木戸沢	包含地	縄文土器・石器	
21－43	木戸沢館	館跡	空堀	
21－44	塚の岱	包含地	縄文土器・石器類	
21－45	布沢城跡	館跡	空堀・築堤	
21－46	百騎館	館跡	空堀・築堤など	
21－47	百騎台	包含地	縄文土器・石器（石鏃・石槍・石匙）	山本町公民館

※地図番号と遺跡名などの内容は、A・B・C以外、秋田県教育委員会刊行の『秋田県遺跡地図』中央版－1990（平成２）年－によって作成した。

（Ｃ）の発掘調査を実施したが、それを加えて遺跡数は26箇所、縄文時代に属する遺跡が22箇所となる。遺跡の立地状況をみると、三種川上流域に５遺跡があり、他は旧八郎潟沿いの低位段丘面に遺跡が集中している。第１図の図幅中には本遺跡周辺の南北11.6km、東西7.7kmの範囲に分布する遺跡を示している。ここでは、遺跡の周辺（町内）にあって発掘調査された縄文時代の遺跡を中心に概観する。なお、文中（　）内の数字・記号は第１図、第１表と対応する。

宝竜前遺跡（18－15）は1975（昭和50）年、1976（昭和51）年の２次にわたって発掘調査が実施されている。発掘調査報告書が刊行されていないため詳細は不明であるが、秋田県遺跡地図（中央版）によれば、縄文時代晩期の土器・石器が出土し、竪穴住居跡や43基のフラスコ状土坑が検出されている。高石野遺跡（18－7）は標高20ｍの段丘上に立地する。1985（昭和60）年の調査では縄文時代中期・後期・晩期の土器やそれにともなう石器・土製品・石製品など多量の遺物が出土し、該期の土坑・竪穴状遺構をあわせて10基検出されている。本遺跡は1994（平成６）年にも調査され、竪穴住居跡などが検出されている。このほか、地蔵長根遺跡（18－16）では、発掘調査によってではないが、崖面に多数のフラスコ状土坑を見ることができる。上記の家の下遺跡では、縄文時代前期～晩期の土器・石器などが出土し、縄文時代前期～晩期の竪穴住居跡・竪穴遺構・土坑・フラスコ状土坑・屋外炉・焼土遺構・土器埋設遺構など250を越える遺構が検出されている。また、泉沢中台遺跡では、1994（平成６）年秋の範囲確認調査で、縄文時代の遺物が出土している。

なお、近隣の能代市や八竜町では、高規格道路である能代・八竜道路建設事業関係で、旧石器時代～中世まで多くの遺跡が発掘調査され、各時代の文化の様相が明らかになりつつある。琴丘町内では、上記の家の下遺跡で旧石器時代の石器が15,000点以上出土している。また、泉沢中台遺跡では、本調査で平安時代の柵列や土坑が検出され、1994（平成６）年秋の範囲確認調査においては、竪穴住居跡や焼土などが検出され、土師器・須恵器・鉄滓などが出土して古代の製鉄関連遺跡と推定された。町内には古代や中世の遺跡が散見されるが、発掘調査例が少ないこともあってまだ不明な点が多く、今後の遺跡発掘調査や検出された遺構・遺物の整理が進めば、縄文時代のみならず、ほかの各時代の文化の様相が少しずつ明らかになってくるものと思われる。

参考文献

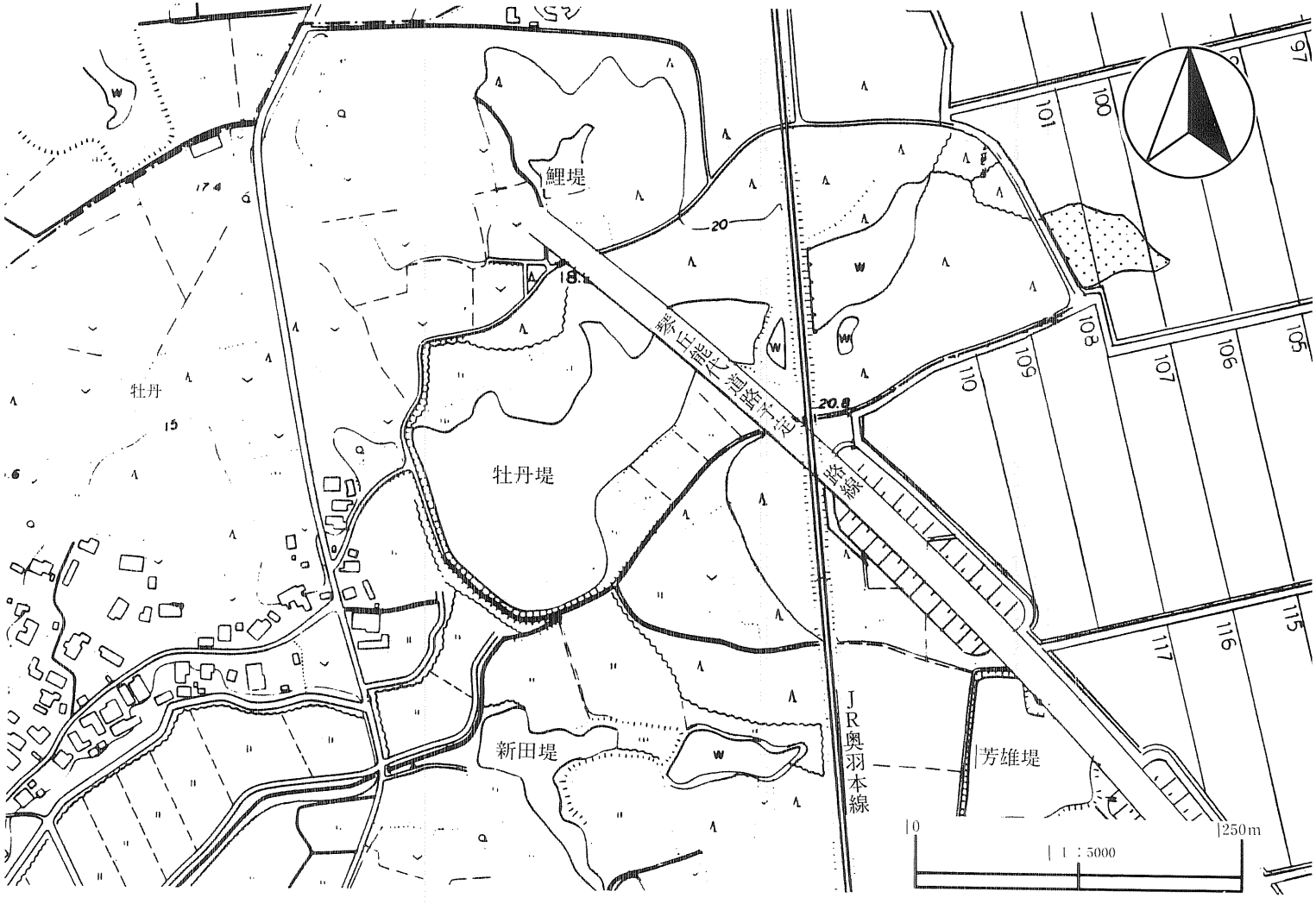
内藤博夫　「秋田県能代平野の段丘地形」『第四紀研究』第16巻第２号　1977（昭和52）年

秋田県農政部農地整備課　『土地分類基本調査　森岳・羽後浜田』1984（昭和59）年

通商産業省工業技術院地質調査所　『地域地質研究報告森岳地域の地質』1985（昭和60）年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』中央版　1990（平成２）年

琴丘町　『琴丘町史』通史編　1990（平成２）年



(アミ部分は中の沢遺跡調査範囲)

第2図　工事計画と周辺地形図

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

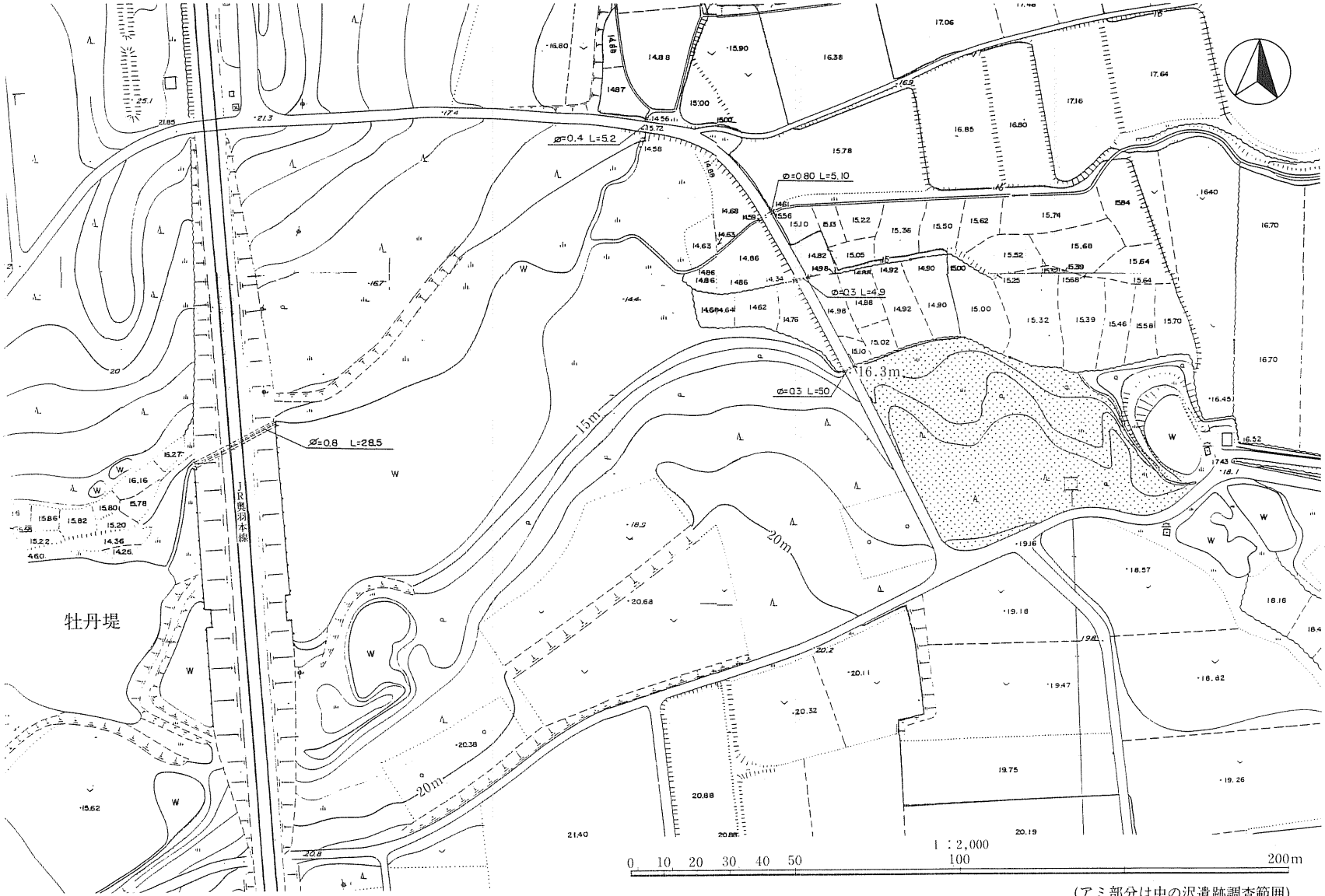
中の沢遺跡は、八郎潟の残存湖である東部承水路から北東方向約2.0kmの距離にあり、八郎潟の東岸に形成された標高19～20ｍの海成段丘上に立地する。今回の調査区は、この段丘面の北東部に位置し、南西から北東に向かって緩く傾斜する部分で、標高は約16.5～18.5ｍで、調査面積は3,300㎡である。調査区の北～東側は１段低い水田および沼沢や堤となっており、その比高差は約1.5ｍである。また、調査区の西端に隣接して東西に延びる農道があり、農道を挟んだ西側のほ場整備の対象区域外には、１段高い平坦面が山林や畑として残っている。農道造成前の原地形は、山林や畑の平坦部から１段低い調査区にかけて緩い斜面となっていたものと推定されることから、上の平坦面にも縄文時代の遺構の存在が予想される。

調査区の調査前の現況は、杉林であったが既に伐採されており、その切り株が多く残って笹竹や雑草が繁茂していた。杉林となる以前は水田や畑として耕作されていたようである。

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法（第４図）は、中の沢遺跡から300ｍほど離れて発掘調査していた、家の下遺跡の調査区内のＭＧ70グリッド杭を選定し、これより北（磁北）に80ｍ，西に280ｍ移動して調査区内の起点ＭＡ50とした。そして、ＭＡ50から北を求めてグリッドの南北基線とし、この南北基線及びそれと直交する東西基線から、４ｍ×４ｍのグリッドを設定し、５箇所の杭を仮レベル原点とした。グリッド杭には、東から西に向かって東西方向を表すＬＴ・ＭＡ…ＭＴ・ＮＡ…ＮＴ・ＯＡ…ＯＤというアルファベットと、南から北に向かって南北方向を表す46・47…の２桁の数字を組み合わせた記号を記入し、４ｍ×４ｍの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした。

遺物は、遺構内出土のものは、出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。基本的に土坑などの小規模な遺構は、長軸に沿って二分割して調査した。性格不明遺構（ＳＸ）などの大規模な遺構は十字に土層観察用のベルトを残し、四分割して調査した。調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は、基本的には１／20の縮尺で作図したが、土器埋設炉は1／10で、遺物出土状況図は1／10もしくは1／20の縮尺で作図した。写真撮影は、



(アミ部分は中の沢遺跡調査範囲)

第3図　調査範囲と周辺の地形図

35㎜のモノクロとカラーリバーサルフィルムを使用した。

室内における整理は、遺構は現場で取った平・断面図より第２原図を作成し、これをトレースした。遺物は洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

第３節　調査の経過

平成６年７月６日・７日の両日、現地に資材の搬入や作業員の確保、調査区や排土置場などについての確認や調査方法の検討などの事前準備をした。なお、調査に先立ち重機による表土剥ぎやグリッド杭の打設を業者委託した。調査は７月11日から８月８日まで実施した。

７月11日　ベルトコンベヤーなどが搬入され午後から起動し、北端部から粗掘りを開始した。

７月14日　西部と中央部の粗掘りを終了し、東部にベルコンラインを移した。併せて遺構検出作業も行った。乾燥と笹竹の根のために進行が遅い。

７月19日　東端部の遺構集中地点と西部の溝跡付近の遺構検出作業を行う。12日以来真夏日が続き、乾燥しきっているため散水しながらの作業を継続する。

７月20日　西部の溝跡の精査を集中的に行う。

７月25日　北東部の西寄りで土坑２基と遺物集中箇所を検出した。

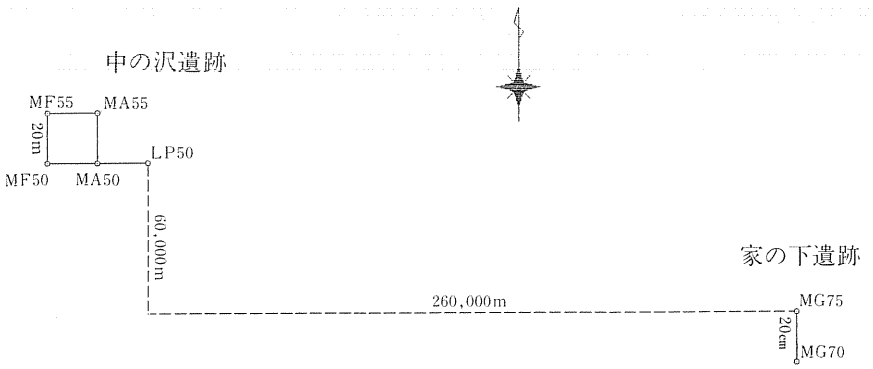
７月27日　北東部のフラスコ状土坑や土坑・焼土・ピットを次々に半截し、断面図や平面図の作成を行う。今日から利部が調査に参加。

８月１日　残っていた遺構（ＳＫ11・ＳＸ09・ＳＸ21など）の精査を開始。午後から待望の雨が降った。北東端では地山精査中に、胎土に繊維を含んだ土器が出土した。

８月５日　地形測量や個々の遺構や全体の写真撮影を主体に行う。

８月８日　全ての遺構の調査を終了し、発掘調査の現場作業を全て完了した。

この後、秋田県埋蔵文化財センターで遺物・図面の整理作業を行い、報告書を作成した。



第４図　グリッド杭設定図

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

今回の調査地点は、前述したように段丘の北東部にあたり、北西側から南東側にかけて緩く傾斜している。基本的には第Ⅰ層の表土から第Ⅴ層の地山まで５層に分層したが、調査区中央部のＭＣ52グリッド付近では第Ⅳ層の地山漸移層を欠き、表土から地山までの深さは35cmである。調査区東部の鉄塔付近（ＬＱ50グリッド）では表土から地山までの深さは51cm～53cmであるが、ここでは基本層序を観察するのに遺存状態の良かったＬＱ50グリッドの層序について記す。なお、各層の詳細については基本層序図（第６図）に記してあるので、ここでは土色と層厚を簡単に記す。

第Ⅰ層　黒褐色土　表土　層厚９cm～19cm

第Ⅱ層　黒色土　層厚６cm～11cm　上面が現代の溝の掘り込み面となっている。

第Ⅲ層　黒褐色土　縄文時代の遺物包含層　層厚８cm～12cm

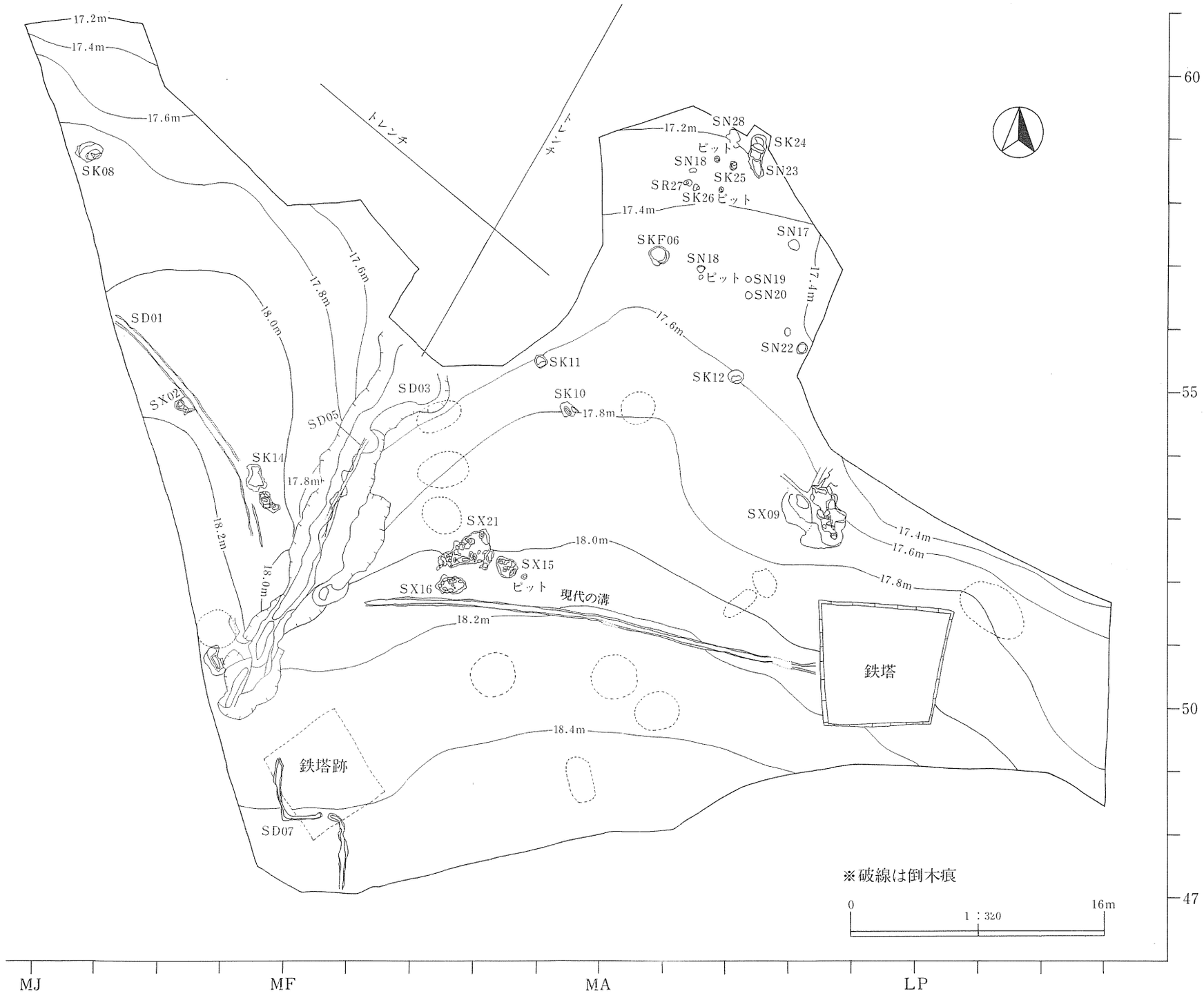
第Ⅳ層　黒褐色土　第Ⅲ層と第Ⅴ層(地山)の漸移層　層厚６cm～７cm

第Ⅴ層　にぶい黄橙色土　地山

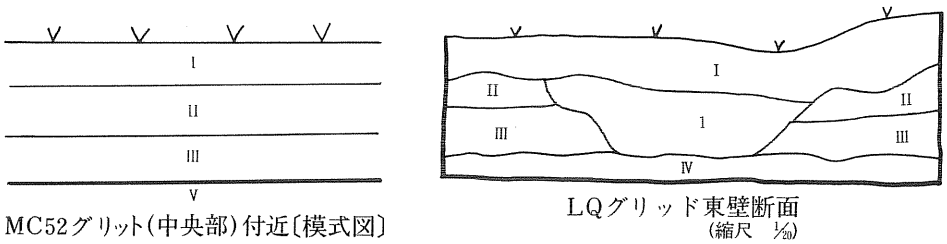
第２節　検出遺構と遺物

今回の調査では、縄文時代前期～晩期の土器や石器が出土しており、そのなかでも後期前半の時期の遺構・遺物が多い。遺物量は大コンテナ(縦59cm×横38.6×深さ20.7cm)で６箱であり、石器は土器に比較して相対的に出土数が多く、この中で石錘や不定形石器の出土比率が比較的高い。遺構は土坑10基、フラスコ状土坑１基、焼土遺構７基、炉跡１基、溝跡４条、性格不明遺構４基の計27遺構を検出した。遺構は、調査区の西部や北東部にあり、とりわけ北東端部に集中して分布しており、ここでは焼土遺構や土坑の12遺構を検出した。西部には溝跡や土坑などが分布している。以下、土坑、フラスコ状土坑、焼土遺構、炉跡、溝跡、性格不明遺構の順番に記述する。遺物の出土地点・層名について土器は挿図中に、石器類は観察表中に記入した。

なお、遺物の出土地点についてはＳＸ09は土器（「ＲＰ」と略す)、石器（「ＲＱ」と略す）の平面分布図・垂直分布図を掲載したので、その図を参照していただきたい。遺物の挿図は土器･石器とも遺構内･外に関係なく通し番号を付した。また、石器には、挿図中の番号の先「Ｓ」を付して土器と区別して記述する。図版（写真）中の番号もこれにしたがった。


17.2m
17.4m
17.6m
17.8m
18.0m
18.2m
18.4m
トレンチ
トレンチ
SK08
SD01
SX02
SK14
SD05
SD03
SK11
SK10
SK12
SX09
SX21
SX15
SX16
ピット
現代の溝
鉄塔
鉄塔跡
SD07
SN28
SK24
SN23
SN18
SK25
SR27
SK26
SN17
SKF06
SN19
SN20
SN22
※破線は倒木痕
0
1：320
16m
60
55
50
47
MJ
MF
MA
LP

第５図　遺構配置図



MC52グリット(中央部)付近〔模式図〕

LQグリッド東壁断面
(縮尺　1/20)

基本層序
Ⅰ層　表土（耕作土－黒褐色土）
Ⅱ層　黒色土（10ＹＲ2／1）１㎜以下の地山粒子・炭化物粒子１％含有。やや締まり有り。
Ⅲ層　黒褐色土（10ＹＲ2／2）１㎜以下の地山粒子２％含有。１㎜前後の炭化物粒子１％　含有。締まりは強い。
Ⅳ層　黒褐色土（10ＹＲ3／2）黒褐色土と地山土の漸移土。
Ⅴ層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ6／3）－地山－
１層　黒褐色土（10ＹＲ2／2）１㎜以下の地山粒子１％含有。粘性・締まり中位。－現代の溝－

第６図　基本層序図

前述したように、調査に入る前に杉の根・笹竹などの根を重機によって表土～地山漸移層（Ⅳ層）か地山上面（Ⅴ層）まで除去したこともあって、遺構のほとんどを地山漸移層か地山上面で検出した。

（１）　土坑

平面形はさまざまであるが、やや深い掘り込みをもつものが多い。西側で２基、北東側で６基検出した。

ＳＫ02土坑　（第７図）

［検出位置］　西側のＭＧ54グリッドで検出した。ＳＤ01と重複しており、本遺構が古い。

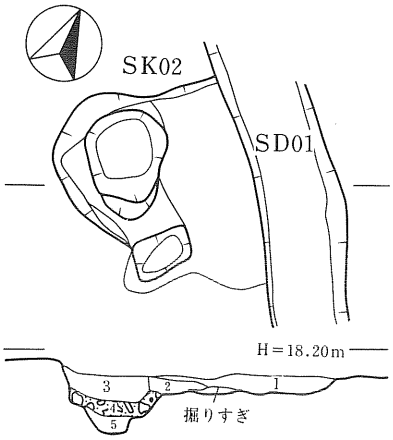
［形状］　平面形は不整楕円形で、断面形は鍋底状である。

［規模］　長軸0.99ｍ、短軸0.79ｍ、深さ0.49ｍである。

［堆積土の状況］　４層に分層した。上の２・３層は褐色系であるが、下の４層は地山主体（小ブロック）層でボロボロしており、最下層（５層）も４層と似ている。また、３～５層はレンズ状の堆積をしている。

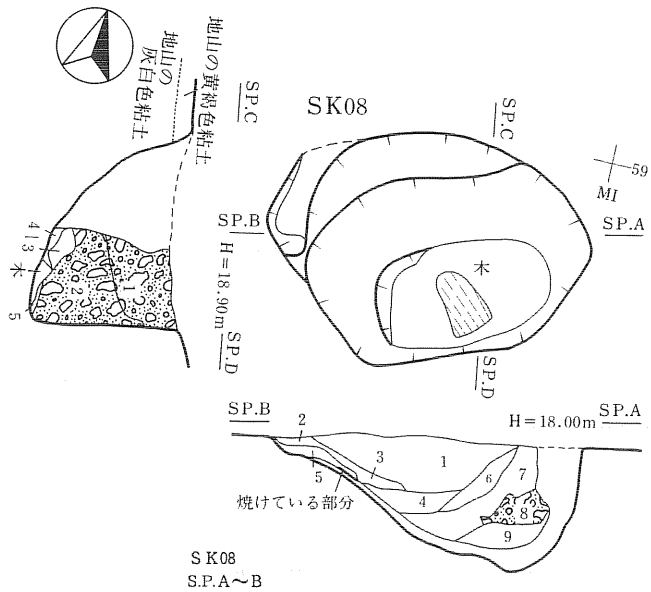
［壁・底面の状況］　壁・底面とも凹凸している。

［出土遺物］出土しなかった。



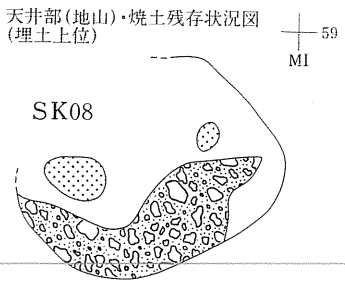
ＳＫ02，ＳＤ01

1．暗褐色（10ＹＲ3／3）土。粘性中、締まり中。地山小粒子５％。混入。
2．暗褐色（10ＹＲ3／4）土。粘性中、締まり強。地山小～中粒子10％混入。
3．黒褐色（10ＹＲ2／3）土。粘性なし、締まり弱。
4．浅黄橙色（2.5Ｙ7／3）土。地山主体、２の土わずかに（５％）混入。全体的に小ブロックとなりボロボロしている。
5．浅黄橙色（2.5Ｙ7／3）土。４と似るが２の土が20％混入し、やや締まりあり。



ＳＫ08
S.P.A～B

1．黒色（10ＹＲ1.7／1）土。粘性・締まりとも弱。－基本層位の２層－
2．黒褐色（10ＹＲ2／3）土。粘性・締まりとも弱。
3．極暗褐色（7.5ＹＲ2／3）土。粘性弱、締まり中。焼土炭化物を30％含んだ層。
4．黒褐色（10ＹＲ3／2）土。粘性弱、締まり中。焼土・炭化物を10％含む。
5．にぶい黄褐色（10ＹＲ4／3）土。粘性中、締まり中。
6．３とほぼ同じだが、やや締まりあり。
7．黒褐色（10ＹＲ3／2）土。粘性中、締まり強。
8．地山を主体にした層。褐色土が５～10％混入。
9．黒褐色（10ＹＲ3／2）土。粘性・締まりとも弱。ボロボロしている。



0　1：20　2m

第７図　土坑（１）

ＳＫ08土坑　（第７図）

［検出位置］　他の遺構と約10ｍ離れた北西側ＭＩ58グリッドにおいて、単独で検出された。検出状況は楕円形の外側（特に北側）に地山、内側に黒色土（第Ｉ層）が堆積していたもので、当初は倒木痕かと考えられた。

［形状］　平面形は不整楕円形で、断面形は北・西側は緩く立ち上がり、南・東側は壁半ばから急な立ち上がりを示す。

［規模］　長軸1.70ｍ、短軸1.18ｍ、深さ0.88ｍである。

［堆積土の状況など］　土層断面図は２箇所（ＳＰ．Ａ～Ｂ・Ｃ～Ｄ）で作成した。当初、長軸に沿って半截（ＳＰ．Ａ～Ｂ）したが、南西～西側で壁と思っていた地山の下から炭化物粒子を含んだ暗褐色土や灰白色粘土、スギの生材を検出したので、急遽、短軸の土層断面図（ＳＰ．Ｃ～Ｄ）を作成したものである。したがって、北側半分は壁の輪郭しか図にできなかった。

本遺構は地山の黄褐色粘土やその下位の地山である灰白色粘土を掘り込んで構築されている。ＳＰ．Ｃ～Ｄの土層断面は、４層に分層した。１・２層は30cm～50cmの層厚をもつ地山で、その下の底面との間に３層（灰白色粘土）・４層（暗褐色土）が中の生材を挟むように５cm～12cmの層厚をもって堆積しており、この深さで湧水があるため木材が腐らずに残ったのであろう。１・２層は壁際から中心部にかけて堆積をしており、その下の３層と下位の地山である灰白色粘土は同じものと考えられることから、３層と底面間は空洞となっていたのが崩落したものと思われる。

ＳＰ．Ａ～Ｂの土層断面は９層に分層した。全体的にはレンズ状の堆積をしている。中位の３～６層のうち、３・４・６層は焼土・炭化物を含み、やや締まりがあり、西側落ち込み際の５層の下はわずかに焼けた痕跡がみられる。下位の東壁寄りの８層は、地山主体の大ブロックで、ＳＰ．Ｃ～Ｄの土層断面中の１・２層と同じ地山がオーバーハングしていて崩落した可能性が考えられる。

［壁・底面の状況］　底面は凹凸がある。西側を除く壁は比較的滑らかであるが、西側はやや凹凸がある。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　（第16図１・２、第18図Ｓ１・２）遺構確認面から土器片４点・石器４点、埋土から石器が１点、土坑底面から23cm×35cmで加工痕のない、杉の生材が1点出土している。１・２は遺構確認面から出土した縄文を施文した土器である。Ｓ１は不定形石器（Ⅱ－ａ類）で、Ｓ２は微小剥離痕のある石器（Ｉ類）である。

ＳＫ10土坑　（第８図）

［検出位置］　中央部のやや北のＭＡ54グリッドで検出した。

［形状］　平面形は不整長方形で、断面形はやや浅い擂り鉢の形状である。

［規模］　長軸1.10ｍ、短軸0.85ｍ、深さ0.30ｍである。坑底面に凹凸があり、長軸0.60ｍ、短軸0.28ｍ、深さ0.03ｍの楕円形の浅い掘り込み状となっている。

［堆積土の状況］　５層に分層した。いずれも褐色系の埋土で、やや波打っているもののレンズ状に近い形状をしていることから、自然堆積かと思われる。１層は焼土粒子を30％含み、２～４層には炭化物粒子を数％含む。

［壁・底面の状況］　底面はやや凹凸がある。壁は比較的滑らかに立ち上がる。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　出土しなかった。

ＳＫ11土坑　（第８図）

［検出位置］　中央部のやや北のＭＢ55グリッドで検出した。

［形状］　平面形は不整円形で、断面形は浅い皿形である。

［規模］　長軸0.78ｍ、深さ0.10ｍである。

［堆積土の状況］　２層に分層した。いずれも暗褐色土で炭化物粒子を１％含み、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

［壁・底面の状況］中央部から南壁寄りに緩く傾斜しているが、他は滑らかである。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　出土しなかった。

ＳＫ12土坑　（第８図）

［検出位置］　北東部ＬＲ55グリッドで検出した。

［形状］　平面形は円形で、断面形は擂り鉢のやや浅い形状である。

［規模］　直径0.93ｍ、深さ0.23ｍである。

［堆積土の状況］　４層に分層した。いずれも褐色土系で地山粒子を含む。特に３・４層で地山小ブロックの混入度が高く、３層が中央部でやや盛り上がり、２・４層が両脇から流入・堆積し、また、２～４層ともやや波打っていることから人為的堆積と思われる。

［壁・底面の状況］　底面はやや凹凸がある。壁は比較的滑らかに立ち上がる。

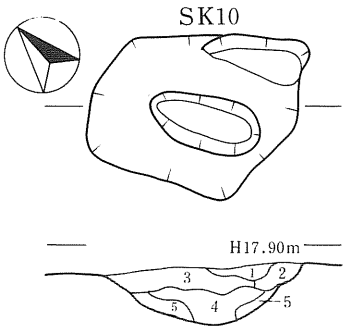
［付属施設］　検出されなかった。

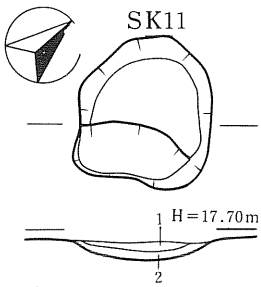
［出土遺物］　出土しなかった。

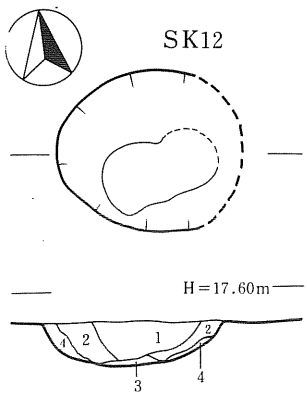
ＳＫ13土坑　（第８図）

［検出位置］　西側のＭＦ53グリッドで検出した。ＳＫ14が北側に近接しているが重複はない。確認面では長軸に沿って 0.25㎝×1.25㎝の長楕円形の焼土が確認された。

［形状］　平面形は不整楕円形で、断面形をみると北西側は比較的深く、南東側は大変浅い２



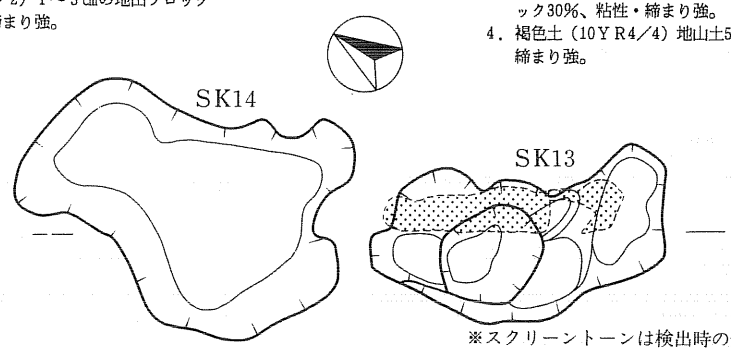




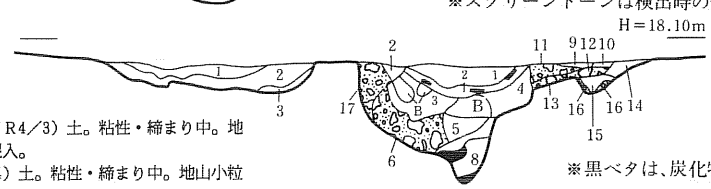
ＳＫ10
1．暗褐色土（10ＹＲ3／4）１～３㎜の焼土粒子30%含有。粘性中位、締まり弱。
2．暗灰黄色土（2.5Ｙ4／2）１～２㎜の炭化物粒子１%、３㎜前後の地山粒子30%含有。軟かい所と締まっているところが、ところどころにある。粘性・締まりも同じ状態。
3．黒褐色土（10ＹＲ2／3）１～３㎜の炭化物粒子２%含有。粘性中位、締まり強。
4．黒褐色土（10ＹＲ2／2）２～３㎜の炭化物粒子１%含有。粘性・締まりとも弱。
5．黒褐色土（10ＹＲ3／2）１～３㎝の地山ブロック30%含有。粘性・締まり強。

ＳＫ11
1．暗褐色土（10ＹＲ3／3）炭化物粒子（１㎜）１%、0.5～2.0㎝地山ブロック20%含有。粘性・締まり中。
2．暗褐色土（10ＹＲ3／3）炭化物粒子（１㎜）１%、粘性・締まり中。

ＳＫ12
1．黒褐色土（10ＹＲ2／3）１㎜前後の地山粒子１%、粘性・締まり中位。
2．暗褐色土（10ＹＲ3／3）１㎜前後の地山粒子１%、粘性・締まりやや強。
3．暗褐色土（10ＹＲ3／4）５㎜前後の地山ブロック30%、粘性・締まり強。
4．褐色土（10ＹＲ4／4）地山土50%含有。粘性・締まり強。



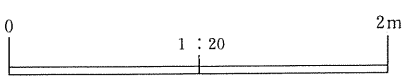
※スクリーントーンは検出時の焼土である。



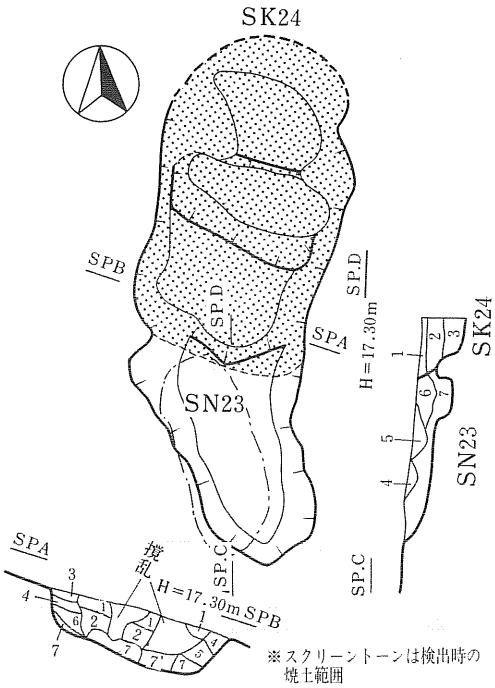
※黒ベタは、炭化物である。

ＳＫ14
1．にぶい黄褐色（10ＹＲ4／3）土。粘性・締まり中。地山粒子30%縞状に混入。
2．暗褐色（10ＹＲ3／4）土。粘性・締まり中。地山小粒子10%混入。
3．地山と暗褐色（10ＹＲ3／4）の混含土。

ＳＫ13
1．黒色（10ＹＲ2／1）土。軟かい。基本層位Ⅱ層と似る
2．褐色（10ＹＲ4／4）土。軟かい。炭化物混入。
3．黒褐色（10ＹＲ3／2）土。よく締まる。地山小～中粒子10%混入。焼土混入のためか茶色がかってみえる。
4．暗褐色（10ＹＲ3／4）土。ボロボロしている。地山小～中粒子15%、黒（炭化物か）色土がブロック状に混入。根もかなり入りこんでいる。
5．３とほぼ同じ。３より地山の混入度高く、20%混入。
6．にぶい黄褐色（10ＹＲ6／3）粘土－地山－の大ブロック主体で、暗褐色（10ＹＲ4／6）土が粒状に15%混入。部分的に黒（炭化物）わずかに混じる。
7．にぶい黄褐色（10ＹＲ4／3）粘土。粘性強やや軟かい。
8．黒褐色（10ＹＲ2／2）土。粘性中、締まり弱。地山小～中粒子５%、炭化物小粒子10～15%混入。
9．暗褐色（7.5ＹＲ3／3）土。焼土ボロボロしている。
10．黒褐色（10ＹＲ2／3）土。粘性・締まり弱。
11．地山主体。大ブロック間に地山粒子・焼土粒子混入。
12．にぶい黄褐色（10ＹＲ4／3）土－ 地山－と黒褐色（10ＹＲ2／3）の混合土。
13．12と土質ほぼ似る。12より地山多く混入。
14．黒褐色（10ＹＲ2／2）土。粘性・締まりとも中。
15．黒褐色（10ＹＲ2／2）土。地山小ブロック５%混入。
16．地山主体で、暗褐色土わずかに混入。
17．地山主体。大ブロック間に褐色土粒子混入。

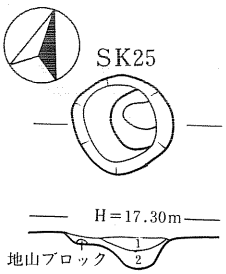


第８図　土坑（２）

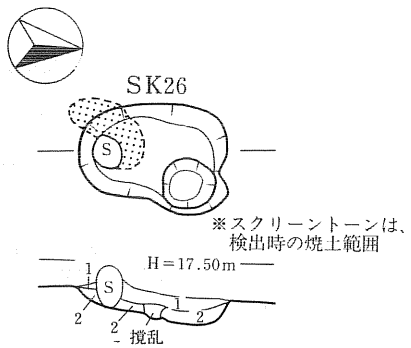


S.P.C～D（ＳＮ23）
1．暗褐色土（10ＹＲ3／4）均一・１㎜前後の炭化物粒子１％含有。粘性・締まり弱。
2．暗褐色土（10ＹＲ3／4）１～５㎜の地山粒子、１㎜前後の炭化物粒子１％含有。粘性・締まりやや強。
3．オリーブ黄色土（５Ｙ6／3）地山土と暗褐色土が60％対40％で混入。粘性・締まり強。礫・炭化物粒子混入。
4．褐色土（10ＹＲ4／4）全体が赤味を沿びた焼土であるが、明瞭なものでない。粘性・締まりやや弱。
5．暗褐色土（10ＹＲ3／4）１～５㎜の焼土粒子２％含有。粘性・締まり中位。
6．褐色土（10ＹＲ4／4）地山粒子１％。粘性・しやや強。
7．褐色土（10ＹＲ4／4）青灰色の地山ブロック10％、３㎜前後の炭化物粒子１％含有。粘性・締まりやや強。

ＳＫ24とＳＮ23
S.P.A～B（ＳＫ24）
1．暗褐色土（10ＹＲ3／4）均一・１㎜前後の炭化物粒子１％含有。粘性・締まり弱。
2．暗褐色土（10ＹＲ3／4）１～５㎜の地山粒子、１㎜前後の炭化物粒子１％含有。粘性・締まりやや強。
3．褐色土（10ＹＲ4／6）焼土だが、全体に褐色土でややあか味を呈している。粘性・締まり中位。炭化物粒子１％以下含有。
4．褐色土（10ＹＲ4／4）粘性・締まり中位。炭化物粒子１％以下含有。
5．にぶい黄褐色土（10ＹＲ5／4）５㎜前後の炭化物を認める。１～３㎜の地山粒子５％含有。粘性・締まり中位。
6．暗褐色土（10ＹＲ3／3）１㎜の炭化物粒子１％、３㎜前後の地山粒子３％含有。粘性・締まり弱。
7．オリーブ黄色土（５Ｙ6／3）地山土と暗褐色土が60％対40％で混入。礫も混在。粘性・締まり強。
7'．にぶい黄褐色土（10ＹＲ5／3）７に比べて暗褐色土が主体である。３～10㎜の地山土を30％含有。粘性・締まり強。



ＳＫ25
1．褐色（10ＹＲ4／4）土。締まりやや強く、粘性強。
2．褐色（10ＹＲ4／6）土。地山粒子多量混入。炭化物極少量混入。１より粘性共に強い。



ＳＫ26
1．暗褐色土（10ＹＲ3／4）５㎜前後の炭化物２％含有。１㎜前後の地山粒子１％含有。粘性・締まり中位。
2．にぶい黄褐色土（10ＹＲ4／3）１～５㎜の地山粒子30％含有。炭化物粒子１％含有。粘性・締まり強。

0　1：20　2m

第９図　土坑（３）

段構造となっている。北西側の平面形は不整楕円形で、坑底面中ほどに平面形が略円形の摺鉢状の掘り込みがある。南東側は平面形が略楕円形で、坑底面のやや南西壁寄りにはわずかな窪みがある。

［規模］　全体の規模は長軸1.55ｍ、短軸0.73ｍ、確認面からの深さは最深部で0.62ｍである。北西側は規模が長軸0.73ｍ×0.88ｍ、坑底面までの深さ0.26ｍ～0.42ｍで、坑底面にある掘り込みの規模は0.43ｍ×0.58ｍ、坑底面からの深さ0.15ｍである。南東側の規模は0.43㎝×0.69㎝、深さ0.07ｍ～0.12ｍで、坑底面のやや南西壁寄りの窪みは径0.20ｍ、坑底面からの深さが0.08ｍである。

［堆積土の状況］　全体的に複雑な様相を呈しており、17層に分層した。北西側・南東側断面の順に記述する。北西側は１～８・17層に分層した。上位の１～４層はレンズ状に近い堆積をしており、２～４層は焼土・炭化物の主体層もしくは多く含んだ層で、２層は炭化物を多く含んだ焼土層かと思われ、３・４層は地山大ブロックを挟むようにして堆積している。壁際の17層は地山主体層である。最上層の１層は、窪んだところに堆積したと思われる、基本層序の第Ⅱ層と類似した黒色土である。下位の５～８層は地山主体の層が多い。５層は焼土と地山の混土層、６～８層は地山に炭化物や地山の粒子がわずかに混入した層である。７層下面の坑底面もしくは８層下面の掘り込み部底面には部分的に炭化物層が0.05ｍの厚さで堆積している。

以上のように、北西側の下部７・８層下面には炭化物層があり、その上には地山主体層（６層）や地山大ブロックが多く、炭化物や焼土を含んだ層（３～５層）が上下あるいは隣接して波打ちながら堆積している。また、上位には炭化物を含んだ焼土層（か）があり、ほぼレンズ状に堆積している。これらのことから、坑底面付近は空洞であったものが崩落したもので、その後に上部で火を焚いたと推定することも可能であるが、決定的な判断材料に欠ける。

南東側は９～16層まで10層に分層した。最上層の９層は焼土で、その下の11～13層は地山主体土もしくは地山と褐色土の混合土である。11～13層下の14・15層は、やや粘性・締まりのある黒褐色土で、やや南西壁寄りの窪みから壁際にかけて堆積している。

［壁・底面の状況］　北西側の壁そのものは比較的滑らかで、坑底面の中ほどの摺鉢状の掘り込みから、南東壁以外は、壁半ばまでは緩く立ち上がり、壁半ばから急な立ち上がりを示す。南東側は壁そのものは滑らかで、坑底面のやや西壁寄りにはわずかな窪みがあるが、壁は緩やかに立ち上がる。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　埋土から土器片が２点出土している。磨滅した小破片のため図示できなかったが、色調は褐灰色で、胎土は精選され、網目状撚糸文と思われる文様を施文していることから、縄文時代後期前半の土器と思われる。

ＳＫ14土坑　（第８図）

［検出位置］　西側のＭＦ53グリッドで検出した。ＳＫ13が南側に近接しているが重複はない。

［形状］　平面形は「ダルマ」形に近い形状で、断面形は浅い皿形である。

［規模］　長軸1.75ｍ、短軸 1.27ｍ、深さ0.19ｍで、くびれ部の短軸は0.76ｍである。

［堆積土の状況など］　３層に分層した。褐色土系や褐色土と地山の混合土が、やや波打ちながらも、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

［壁・底面の状況］　壁や底面には凹凸がある。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　出土しなかった。

ＳＫ24土坑　（第９図）

［検出位置］　北東側のＬＲ58・ＬＲ59グリッドで検出した。ＳＮ23と重複しており、本遺構が新しい。

［形状］　平面形は、北壁が明瞭でないが、不整楕円形と思われる。横断面形は鍋底形であるが、長軸の南から北に緩く傾斜している。

［規模］　長軸1.68ｍ、短軸 1.03ｍ、深さ0.31ｍである。

［堆積土の状況］　東西の土層断面（ＳＰ．Ａ～Ｂ）は８層に分層した。上部は暗褐色土や褐色土系が中心で炭化物がわずかに混入している層が多く、上部の西隅にはわずかに焼土層が認められる。坑底面付近には褐色土と地山の混合土が堆積している。中央部２箇所が根による撹乱のため全体の状況は不明であるが、おおまかに見るとやや波打ちながらもレンズ状に近い堆積していることから、自然堆積と思われる。

［壁・底面の状況］　底面は長軸の南から北に緩く傾斜しわずかな段差はあるが、壁は滑らかである。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　（第16図４～８、第18図Ｓ３・６）埋土から土器片６点、石器の剥片が５点出土している。土器の４～８は縄文を施文した土器で、４・５は細く、浅い沈線を縦に施文している。Ｓ３は不定形石器（Ｉ－ｂ－4類）で、Ｓ６は不定形石器（Ｉ－ｂ－１類）である。

ＳＫ25土坑　（第９図）

［検出位置］　北東側のＬＲ58・ＬＳ58グリッドで検出した。

［形状］　平面形は円形である。断面形は西側が浅い皿形であるが、東側はやや窪んでいるため鍋底状を呈する。

［規模］　直径0.54ｍで、深さは西側で0.03ｍ、東側で0.17ｍである。

［堆積土の状況］　２層に分層した。いずれも褐色土である。レンズ状の堆積をしていること

から自然堆積と思われる。

［壁・底面の状況］　底面にやや凹凸がある。壁は滑らかである。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＫ26土坑　（第９図）

［検出位置］　北東側のＬＳ58グリッドで検出した。確認面で立石の周囲に、楕円形で短軸0.20、長軸0.48ｍの大変薄い焼土を確認した。

［形状］　底面の南東壁際に円形の落ち込みがあってやや張り出すが、平面形は不整楕円形で、断面形は浅皿形である。南壁際に楕円形の立石（幅0.16ｍ、長さ0.22ｍ）がある。

［規模］　長軸0.77ｍで、短軸0.49ｍ、深さは0.14ｍである。円形の落ち込みは直径0.26ｍ、深さ0.32ｍである。

［堆積土の状況］　２層に分層した。1層は暗褐色土で炭化物をわずかに含む。２層は粘性・締まりとも強いにぶい黄褐色土で、わずかな炭化物と多くの地山粒子を含むことから人為堆積と思われる。

［壁・底面の状況］　底面にやや凹凸があるが、壁は滑らかである。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

（２）　フラスコ状土坑

土坑と区別して、断面形がフラスコ状となるものを本遺構とした。南東部で１基検出した。

ＳＫＦ06フラスコ状土坑　（第10図）

［検出位置］　北東側のＬＴ57グリッドで検出した。

［形状］　平面形は円形で、断面形はフラスコ状である。

［規模］　開口部径1.08ｍ、口勁部径0.74ｍ、底径0.76ｍ、深さ0.88ｍである。底面よりやや上に最大径がありその直径は1.18ｍである。

［堆積土の状況］　８層に分層した。上位は褐色土系の堆積土が炭化物をわずかに含んで、やや波打ちながらレンズ状の堆積をしている。下位は褐色土系の堆積土が、地山か地山と暗褐色土の混合土を縞状に挟みながら、やや波打ちながら中央部が盛り上がった状態を呈しており、いづれの層厚も一定していない。以上のことから人為堆積と思われる。

［壁・底面の状況］　底面はやや凹凸がある。壁は崩落のため上半部にやや凹凸がある。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　（第16図９～25、第18図Ｓ５）埋土から土器片64点、石器や剥片が15点出土し

ている。土器の９～11は地文が撚糸文で、垂下する沈線を施文後、沈線間の一部を磨り消して文様帯を作出しており、９・10は渦巻状の文様を施文している。13・15・17は波状口縁部片で、13は波頂部に渦巻状の文様を、17は円形文を施文している。19・21は条痕文を施文した土器である。23は粗製土器の下半分の残存で、胴部上半から緩い曲線を描いて底部にいたる器形である。縄文地である。24・25は土器の底部である。Ｓ５は弧状部の片面に刃部を作出した不定形石器（Ⅱ－Ａ類）である。本遺構の構築時期は、出土土器から、縄文時代後期前半と思われる。

（３）　焼土遺構

検出時に焼土・炭化物の広がりが確認された遺構である。焼土・炭化物の下に比較的小さく、浅い掘り込みのある遺構もここで扱う。本遺構は南東部で７基検出した。

ＳＮ17焼土遺構　（第10図）

［検出位置］　北東側のＬＱ57グリッドで検出した。

［形状］　焼土の平面形は楕円形で、焼土下に鍋底状の浅い掘り込みがある。

［規模］　焼土の広がりは0.57×0.74ｍで、掘り込みは径1.08ｍ、深さ0.18ｍである。

［堆積土の状況］　２層に分層した。１・２層とも褐色系で、基本層序の第Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んだ上に堆積している。いずれも細かい焼土粒子がにじむように混入している。

［壁・底面の状況］　壁・底面とも大変凹凸がある。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　（第17図26・27）焼土から土器片３点、石器の剥片が３点出土している。土器の26・27は細破片であるが縄文地の土器である。

ＳＮ18焼土遺構　（第10図）

［検出位置］　北東側のＬＳ57グリッドで検出した。

［形状］　焼土の平面形は楕円形である。焼土は薄く、かすかに範囲を示しているが、その下に掘り込みは無い。

［規模］　焼土の広がりは0.25×0.50ｍである。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　出土しなかった。

ＳＮ19焼土遺構　（第10図）

［検出位置］　北東側のＬＲ56グリッドで検出した。

［形状］　焼土の平面形は円形で、焼土下に浅い皿状の掘り込みがある。

［規模］　焼土の広がりは直径0.40ｍで、掘り込みは径0.45ｍ、深さ0.14ｍである。

［堆積土の状況］　３層に分層した。いずれも暗褐色系で、レンズ状に近い堆積を示している。

上位の１層は橙色気味の粒子（焼土）がうっすらと、また、２・３層には地山ブロックや炭化物粒子が混入している。

［壁・底面の状況］　壁・底面ともやや凹凸がある。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　出土しなかった。

ＳＮ20焼土遺構　（第10図）

［検出位置］　北東側のＬＲ56グリッドで検出した。

［形状］　焼土の平面形は円形で、焼土下に浅皿状の掘り込みがある。

［規模］　焼土の広がりは直径0.42ｍで、掘り込みは径0.70ｍ、深さ0.18ｍである。

［堆積土の状況］　３層に分層した。上位の１層は暗褐色土で、橙色気味の粒子（焼土）がうっすらと均一に混入し、３層は灰黄褐色で多くの地山ブロックにわずかに炭化物が混入している。

［壁・底面の状況］　壁・底面にはやや凹凸がある。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＮ22焼土遺構　（第10図）

［検出位置］　北東側のＬＲ55・56グリッドで検出した。

［形状］　焼土の平面形は楕円形で、焼土下に平面形が円形、断面形が浅皿状の掘り込みがある。

［規模］　焼土の広がりは0.37×0.60ｍで、掘り込みは直径0.66ｍ、深さ0.24ｍである。

［堆積土の状況］　５層に分層した。上位の２層は褐色の焼土層である。３～５層はにぶい黄褐色や暗褐色で炭化物や地山粒子がわずかに混入している。

［壁・底面の状況］　壁は滑らかで、底面は平坦である。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　（第16図３）遺物は埋土から３の土器が１点出土した。３はやや風化している口縁部片である。無文で、色調は浅黄橙色、胎土に砂粒を含む。縄文時代中期後半～後期前半の土器と思われる。

ＳＮ23焼土遺構　（第９図）

［検出位置］　北東側のＬＲ58グリッドで検出した。ＳＫ24と重複しており、本遺構が古い。

［形状］　焼土の平面形は楕円形で、焼土下に平面形が不整楕円形、断面形が鍋底状の掘り込みがある。

［規模］　焼土の広がりは0.42×0.97ｍで、掘り込みは長軸1.08ｍ、短軸0.57～0.93ｍ、深さ0.18ｍである。

［堆積土の状況］　４層に分層した。上位の４層は褐色の焼土層で、５層は暗褐色で焼土がわずかに混入している。下位の７層は褐色で青灰色の地山ブロックや炭化物粒子が混入し、粘性・締まりが強い。

［壁・底面の状況］　壁はやや滑らかで、底面にはやや凹凸がある。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　（第17図28〜39、第18図Ｓ４・７）　遺物は埋土から土器片が31点、石器が２点、石器の剥片が５点出土した。29・30、33〜35は無文の土器で、36は無文地に縦の２条の細い沈線を施文している。31・32は縄文地で、29・30は細い沈線を縦に曲線的に施文している。縄文時代後期前半の土器と思われる。Ｓ４・７は微小剥離痕のある石器（Ｉ類）である。

ＳＮ28焼土遺構　（第11図）

［検出位置］　北東側のＬＲ59グリッドで検出した。

［形状］　焼土はかすかに範囲を示しているが、その下に掘り込みは無い。焼土の平面形は東西に長い不整形である。

［規模］　焼土の広がりは0.81×1.22ｍ、厚さは0.03ｍである。

［付属施設］　検出されなかった。

［出土遺物］　（第17図40〜43）　遺物は埋土から土器片が７点出土した。40は小波状口縁で、細く、浅い沈線がやや曲線的に波頂部から垂下している。口縁部下にも同じ様な１条の沈線が直線的に巡る。43は無文地に直線的な沈線を斜めに施文している。いずれも色調は灰白色である。これらは縄文時代後期前半の土器と思われる。

（４）　土器埋設炉

土器が埋められており、その周囲で火を焚いた痕跡のあるものを本遺構とした。北東部で１基検出された。

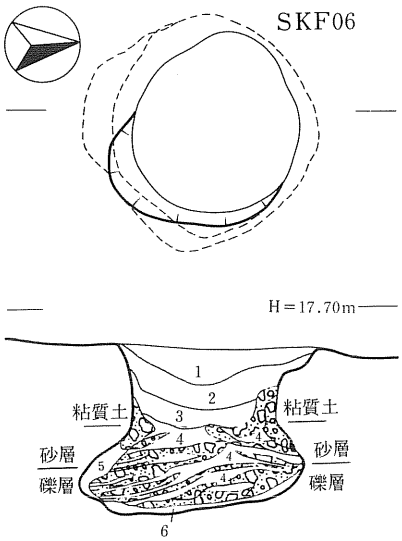
ＳＲ27土器埋設炉　（第11図）

［検出位置・状況］　北東側のＬＳ58グリッドで検出した。検出段階で、土器の周囲に不整円形の焼土・炭化物の広がりがうっすらと確認された。土器の上半部は既に欠失していた。竪穴住居跡を想定して周囲を精査したが、本遺構に伴うと思われる柱穴や壁溝などは検出されなかった。

［形状］　半截したところ、浅い皿状を呈した掘形が確認された。土器は掘形のほぼ中央に、正位で埋設されていた。

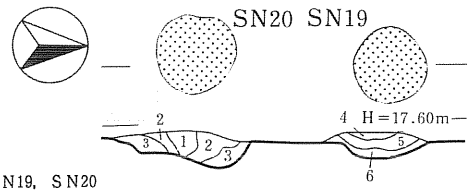
［規模］　焼土の広がりは直径0.44ｍで、掘方は径0.40ｍ、深さ0.08ｍである。

［堆積土の状況］　５層に分層した。１〜３層は土器内部の、４・５層は掘形の堆積土である。

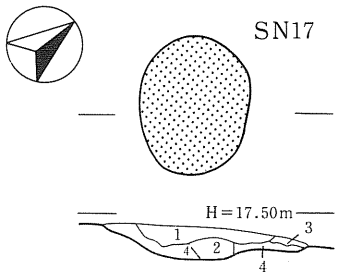


※スクリーントーンは、７・８層である。

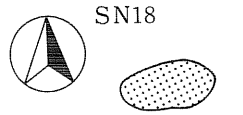
ＳＫＦ06
1．黒褐色土（10ＹＲ2／3）１㎜前後の炭化物粒子１％。粘性・締まり中位。
2．黒褐色土（10ＹＲ2／2）0.5～1.0㎝の炭化物１％。１㎜前後の炭化物粒子１％。粘性・締まり中位。
3．黒褐色土（10ＹＲ2／3）１㎜前後の炭化物粒子・地山粒子２％。粘性・締まり中位。
4．暗褐色土（10ＹＲ3／3）１㎜前後の地山粒子１％。粘性・締まり弱。
5．黒褐色土（2.5Ｙ3／2）１㎜前後の地山粒子２％。粘性・締まり強。
6．にぶい黄褐色土（10ＹＲ4／3）１㎜前後の炭化物粒子１％。粘性強、締まり中位。
7．黄褐色土（2.5Ｙ5／4）ややにごるがほぼ純粋の地山土。粘性・締まり強。
8．黄褐色土と暗褐色土50％つづ、粘性強、締まりは強～弱である。（オリーブ褐2.5Ｙ4／4）

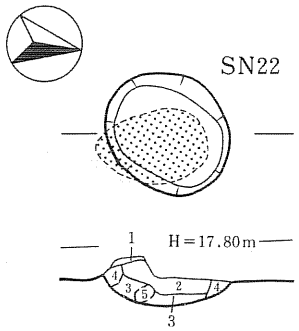


ＳＮ19，ＳＮ20
1．暗褐色土（10ＹＲ3／4）橙色気味の粒子が、うっすらと均一に含む。２～３㎜の炭化物粒子10％含有。不安定な５㎜前後の地山ブロック５％含有。粘性・締まり中位。
2．黒褐色土（10ＹＲ2／3）１～２㎜の炭化物粒子・地山粒子１％含有。粘性・締まりやや強。
3．灰黄褐色土（10ＹＲ4／2）１～２㎜の炭化物粒子１％含有。0.5～2㎝の不安定な地山ブロック40％含有。粘性・締まりやや強。
4．暗褐色土（10ＹＲ3／4）橙色気味の粒子が、うっすらと含まれるが、中に５㎜前後で、ブロック状を呈する部分もある。
5．黒褐色土（10ＹＲ3／2）地山粒子が集合して、ブロック状を呈する部分もある。１㎜以下の炭化物粒子１％含有。粘性・締まり弱。
6．褐色土（10ＹＲ4／4）３～５㎜の地山ブロック10％含有。粘性はややあるが、根によるためか軟かく締まりがない。

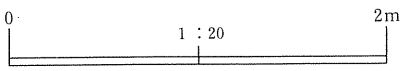


ＳＮ17
1．暗褐色土(焼土)(10ＹＲ3／4）２～５㎜の炭化物３％含有。粘性・締まり中位。細かい焼土粒子がにじむように混入。
2．褐色土(焼土)(10ＹＲ4／6）細かい焼土粒子がにじむように混入。粘性・締まり中位。
3．暗褐色土（10ＹＲ3／4）１～２㎜の地山粒子３％含有。粘性・締まり中位。基本層位のⅢ。
4．暗褐色土（10ＹＲ3／4）0.5～1.0㎝の地山ブロック50％含有。粘性・締まりやや強。基本層位のⅣ(漸移層)

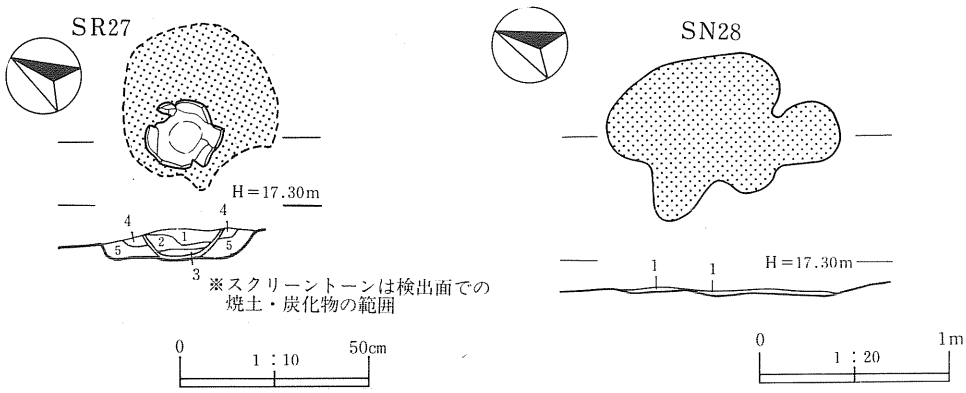




ＳＮ22
1．黒褐色土（10ＹＲ2／3）さらさらした黒色土。粘性・締まり弱。
2．褐色土（10ＹＲ4／6）焼土であるが、全体としては褐色土のように見える。粘性・締まり中位。焼土化した３～５㎜の焼土粒子１％含有。
3．にぶい黄褐色土（10ＹＲ5／4）砂粒子を30％含む。３～５㎜の炭化物粒子１％含有。粘性・締まり強。
4．暗褐色土（10ＹＲ3／3）１～２㎜の地山粒子１％含有。３㎜前後の炭化物粒子１％含有。粘性・締まり中。
5．暗褐色土（10ＹＲ3／4）地山粒子１％含むが、攪乱。粘性・締まり弱。

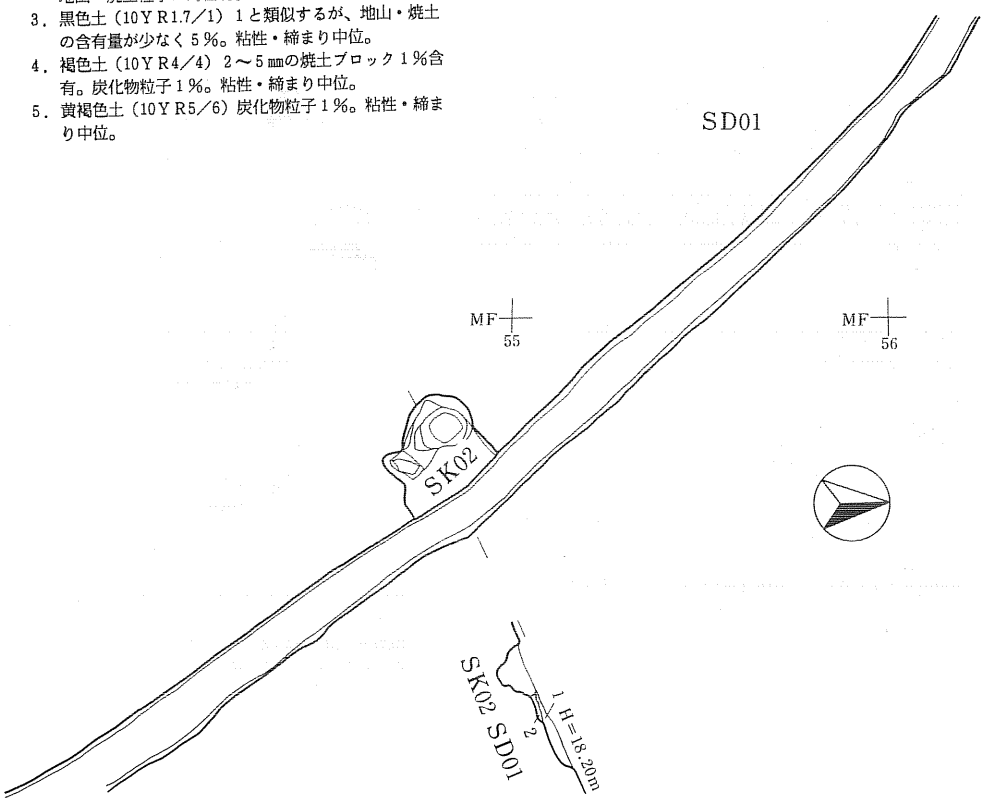


第10図　フラスコ状土坑・焼土遺構（１）



ＳＲ27
1．黒色土（10ＹＲ1.7／1）１～２㎜の地山・焼土粒子10％含有。粘性・締まり中位。炭化物粒子２％含有。
2．黒褐色土（10ＹＲ2／2）炭化物粒子１％、１～３㎜の地山・焼土粒子30％含有。粘性・締まり中位。
3．黒色土（10ＹＲ1.7／1）１と類似するが、地山・焼土の含有量が少なく５％。粘性・締まり中位。
4．褐色土（10ＹＲ4／4）２～５㎜の焼土ブロック１％含有。炭化物粒子１％。粘性・締まり中位。
5．黄褐色土（10ＹＲ5／6）炭化物粒子１％。粘性・締まり中位。

ＳＮ28
1．褐色土（10ＹＲ4／6）焼土・炭化物粒子を１％含有。平面でもかすかに分る程度である。粘性・締まり中位。



ＳＤ01
1．暗褐色（10ＹＲ3／3）土。粘性・締まり中。地山小粒子５％混入。
2．暗褐色（10ＹＲ3／4）土。粘性中、締まり強。地山小～中粒子10％混入。
3．黒褐色（10ＹＲ2／3）土。粘性なし、締まり弱。

第11図　焼土遺構（２）・土器埋設炉・溝跡（１）

１～３層はほぼ水平に近い堆積をしている黒色もしくは黒褐色土で、焼土・炭化物・地山の粒子を混入している。４・５層は褐色土もしくは黄褐色土で、焼土ブロック・炭化物粒子を混入している。

［壁・底面の状況］　壁・底面とも比較的滑らかである。

［出土遺物］　（第17図56）56は炉体土器である。下半分の残存で、胴部半ばからかなり丸みを帯びた曲線を描いて底部にいたる器形で、縄文地の粗製土器である。底部付近は加熱により、赤変している。器厚は４mmと薄い。以上の特徴や周囲の土器出土状況から、56の土器は縄文時代晩期の所産と思われる。

（５）　溝跡

長さのわりに幅がなく、細長く伸びているものを本遺構とした。西側で４条を検出した。

ＳＤ01溝跡　（第11図）

［検出位置］　ＭＦ53～ＭＨ56グリッドにかけて検出した。南から北西方向に伸びている。ＳＫ02土坑と重複しており、本遺構が新しい。

［形状］　全体的にはほぼ直線的であるが、南では幅がやや広く、浅い。北西では幅がやや狭くて、深く、壁がわずかに外に開く形状である。

［規模］　全長は13.16ｍ、幅0.25～0.55ｍ、深さは最深部で0.14ｍである。

［堆積土の状況］　２層に分層した。１層は暗褐色、２層は黒褐色で、いずれも締まりがややある。

［壁・底面の状況］　壁・底面ともやや凹凸がある。

［出土遺物］　（第18図Ｓ８）は埋土から石器が１点出土した。Ｓ８は微小剥離痕のある石器でＩ類である。

ＳＤ03溝跡　（第12図）

［検出位置］　ＭＦ50～ＭＤ54グリッドにかけて検出した。南西から北東方向にゆるく傾斜して沢まで伸びている。ＳＤ05と重複しており、本遺構が古い。

［形状］　全体的にはほぼ直線的であるが、部分的にかなり広狭がある。南西ではかなり深さがあるが、北東は大変浅い。壁は南西では外に開く形状であるが、他はやや窪んでいる程度で、壁はなだらかな立ち上がりを示している。

［規模］　全長は25.60ｍ、幅1.20～4.90ｍ、深さは最深部で0.53ｍである。

［堆積土の状況］　南西側の土層断面は７層に分層した。レンズ状の堆積をしており、自然堆積と思われる。ほとんどの層は締まりがよい。上位の１・２層とも黒褐色で、２層は滞水による土色の変化のためかやや灰色を帯びて見えた。下位の３～７層は暗褐色や黒褐色で地山粒子

の混入している層が多い。土層断面の観察から、３～７層が堆積した後に流水があり、１・２層によってそれが埋まったことがわかる。北東の溝底面には部分的に細砂層がわずかに堆積している場所もみられた。

［壁・底面の状況］　南西は壁・底面とも凹凸があるが、北東の壁は滑らかで、底面はやや平坦である。

［出土遺物］　（第17図44・45・57、第18・～21図Ｓ９・10・17～21）　底面や埋土から土器片が10点、石器や剥片が14点出土している。土器の44・57は灰白色でやや厚手の土器である。57は底部付近の残存で、網目状撚糸文を施文している。剥片石器の９は不定形石器（Ⅰ類）で、10は微小剥離痕のある石器（Ⅱ類）である。礫石器の17・18は擦石で、４面に広い擦面をもつ。19・21は石皿で、19は欠損しているが縁をもっている。21は偏平な石の１面にやや広い擦面をもっていることから石皿としたものである。20は凹み石であるが、１端に敲打痕をもつことから、敲石としても使用されたものである。

本遺構は、出土土器から、縄文時代後期前半の所産と思われる。

ＳＤ05溝跡　（第13図）

［検出位置］　ＭＥ53～ＭＤ54グリッドにかけて検出した。南西から北東方向にゆるく傾斜して沢近くまで伸びている。ＳＤ03と重複しており、本遺構が新しい。

［形状］　全体的にはやや直線的であるが、部分的に広狭がある。断面形は、壁がやや外に開く形状である。

［規模］　全長は6.90ｍ、幅0.15～0.30ｍ、深さは最深部で0.18ｍである。

［堆積土の状況］　１層のみで、黒褐色で柔らかい。

［壁・底面の状況］　壁にはやや凹凸があるが、底面はやや平坦である。

［出土遺物］　埋土から土器片が２点、石器の剥片が１点出土している。土器は磨滅が著しい小破片で図示しなかったが、色調は浅黄橙色で、胎土には細砂粒が混入していることから、縄文時代後期のものと思われる。

ＳＤ07溝跡　（第13図）

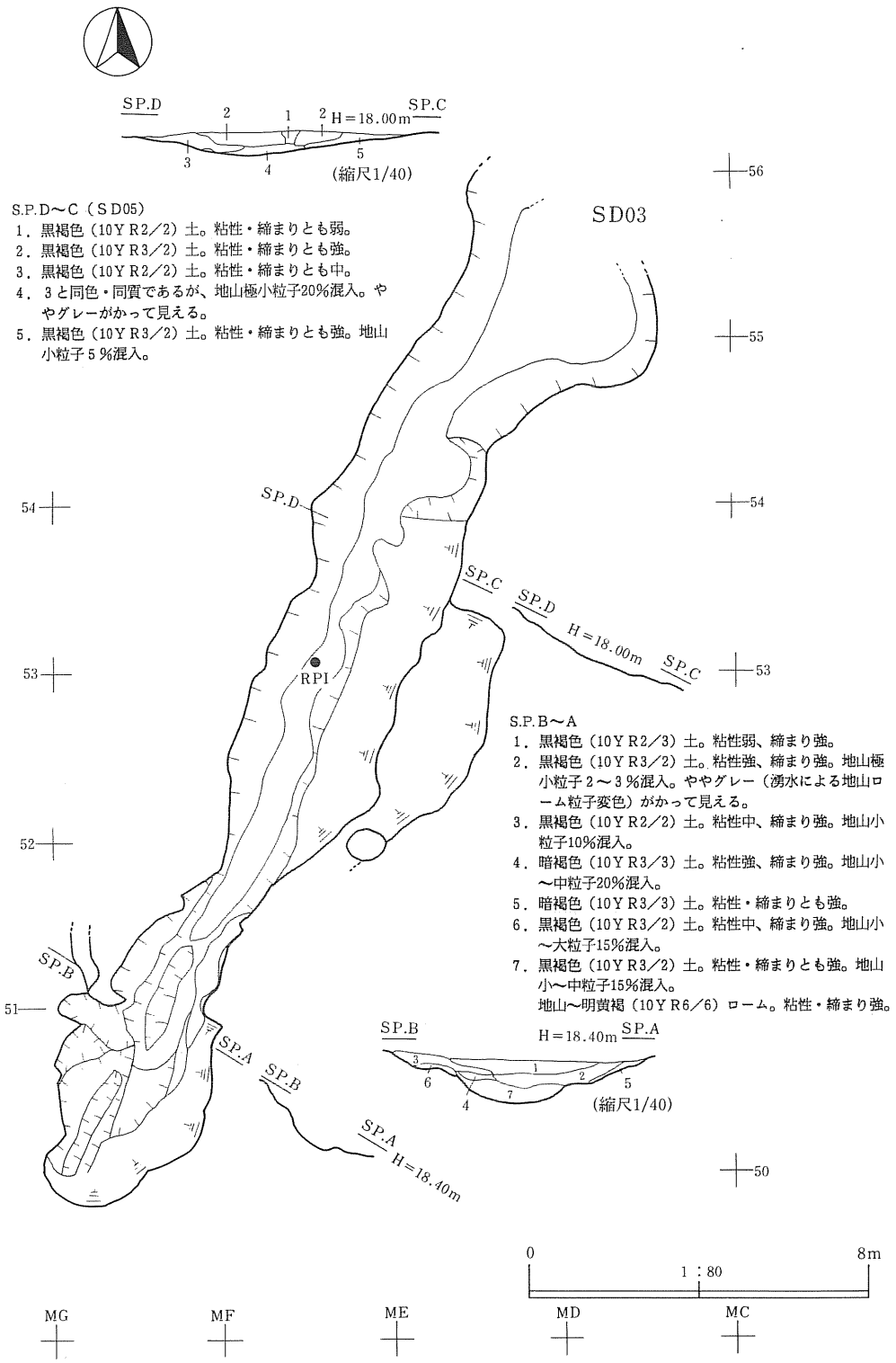
［検出位置］　ＭＥ47～ＭＦ48グリッドにかけて検出した。南から北方向にゆるく傾斜して伸びている。

［形状］　平面形は「Ｌ」字クランク状で、部分的に広狭がある。断面形は、壁がやや外に開く形状である。

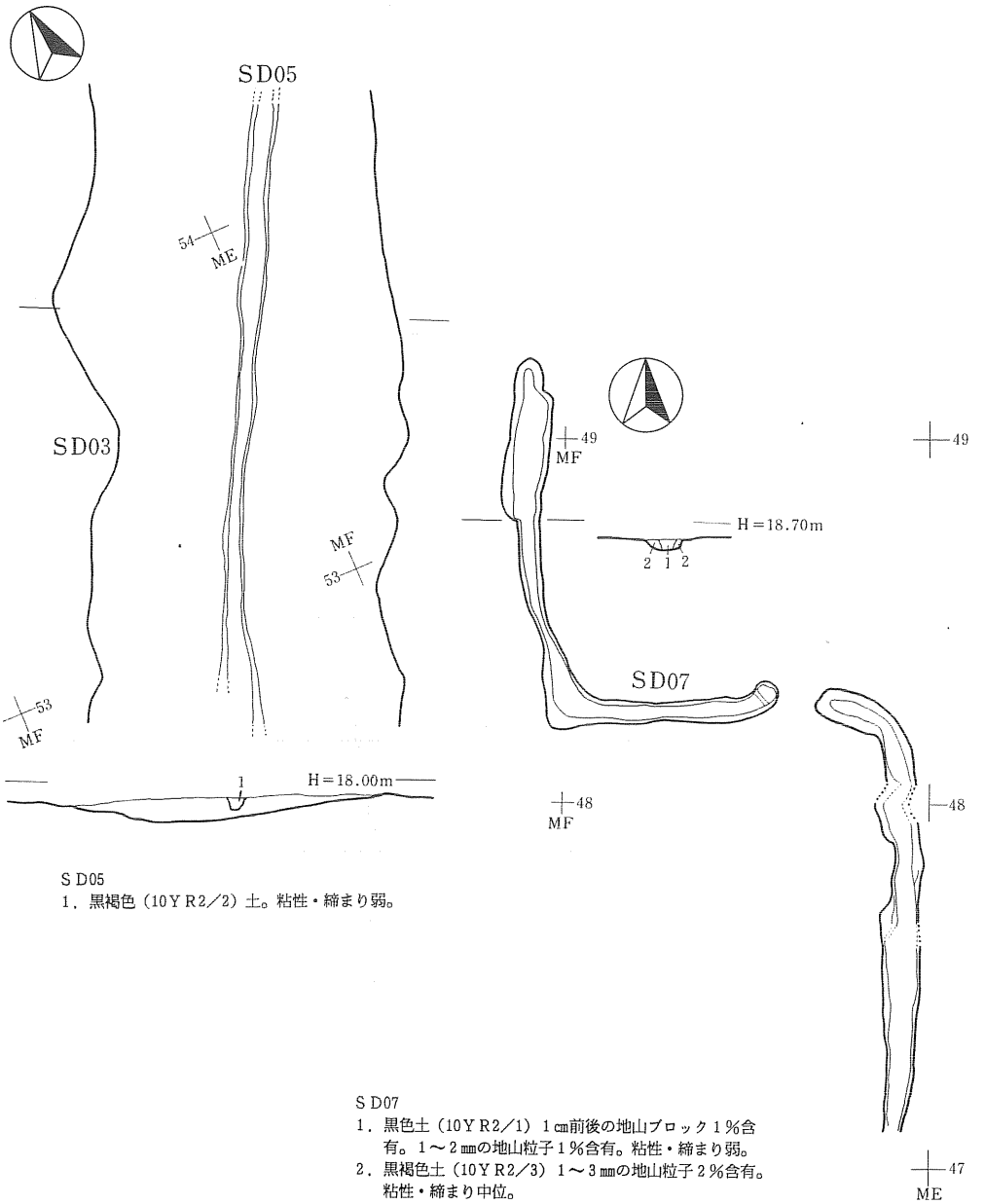
［規模］　全長は13.15ｍ、幅0.20～0.45ｍ、深さは最深部で0.14ｍである。

［堆積土の状況］　２層に分層した。黒色・黒褐色で地山の小粒・小ブロックをわずかに含む。

［壁・底面の状況］　壁にはやや凹凸があるが、底面はほぼ平坦である。


SP.D
SP.C
H＝18.00m
(縮尺1/40)
S.P.D～C（SD05）
1．黒褐色（10YR2／2）土。粘性・締まりとも弱。
2．黒褐色（10YR3／2）土。粘性・締まりとも強。
3．黒褐色（10YR2／2）土。粘性・締まりとも中。
4．3と同色・同質であるが、地山極小粒子20%混入。ややグレーがかって見える。
5．黒褐色（10YR3／2）土。粘性・締まりとも強。地山小粒子5%混入。
SD03
RPI
SP.B
SP.A
H＝18.40m
S.P.B～A
1．黒褐色（10YR2／3）土。粘性弱、締まり強。
2．黒褐色（10YR3／2）土。粘性強、締まり強。地山極小粒子2～3%混入。ややグレー（湧水による地山ローム粒子変色）がかって見える。
3．黒褐色（10YR2／2）土。粘性中、締まり強。地山小粒子10%混入。
4．暗褐色（10YR3／3）土。粘性強、締まり強。地山小～中粒子20%混入。
5．暗褐色（10YR3／3）土。粘性・締まりとも強。
6．黒褐色（10YR3／2）土。粘性中、締まり強。地山小～大粒子15%混入。
7．黒褐色（10YR3／2）土。粘性・締まりとも強。地山小～中粒子15%混入。
地山～明黄褐（10YR6／6）ローム。粘性・締まり強。
H＝18.40m
(縮尺1/40)
0
8m
1：80
MG
MF
ME
MD
MC

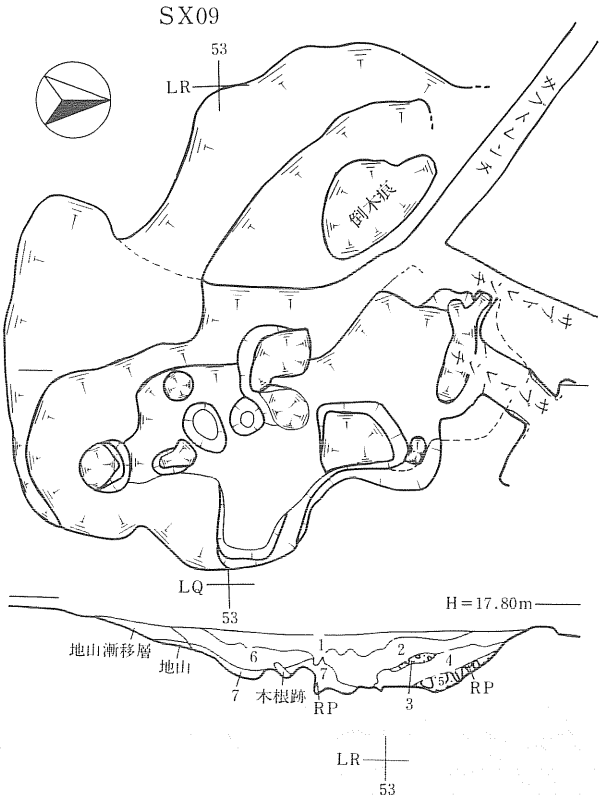
第12図　溝跡（２）



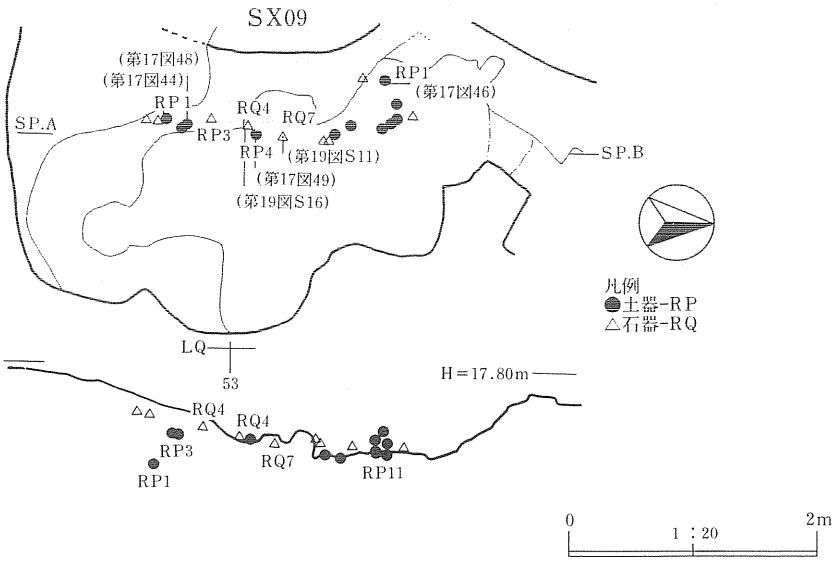
ＳＤ05
1．黒褐色（10ＹＲ2／2）土。粘性・締まり弱。

ＳＤ07
1．黒色土（10ＹＲ2／1）１㎝前後の地山ブロック１％含有。１～２㎜の地山粒子１％含有。粘性・締まり弱。
2．黒褐色土（10ＹＲ2／3）１～３㎜の地山粒子２％含有。粘性・締まり中位。

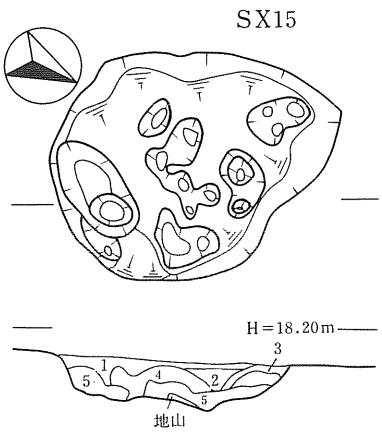
第13図　溝跡（３）

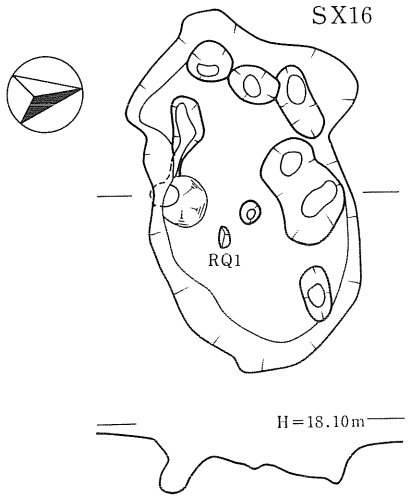


ＳＸ09
1．黒色（10ＹＲ2／1）土。基本層位第２層。
2．褐色（10ＹＲ4／4）土。粘性弱、締まり強。炭化物・地山小～中粒子30%混入。
3．黄褐色（10ＹＲ5／6）土。地山主体で炭化物小粒子５%混入。
4．褐色（10ＹＲ4／4）土。粘性・締まりとも中。炭化物・地山小～中粒子20～25%混入。
5．褐色（10ＹＲ4／4）土。粘性中、締まり強。地山主体で炭化物・地山小～中粒子10%混入。
6．黒褐色（10ＹＲ3／2）土。粘性弱、締まり強。地山・炭化物小粒子２～３%混入。
7．暗褐色（10ＹＲ3／3）土と地山の混合土。粘性・締まり中。炭化物小粒子１%混入。

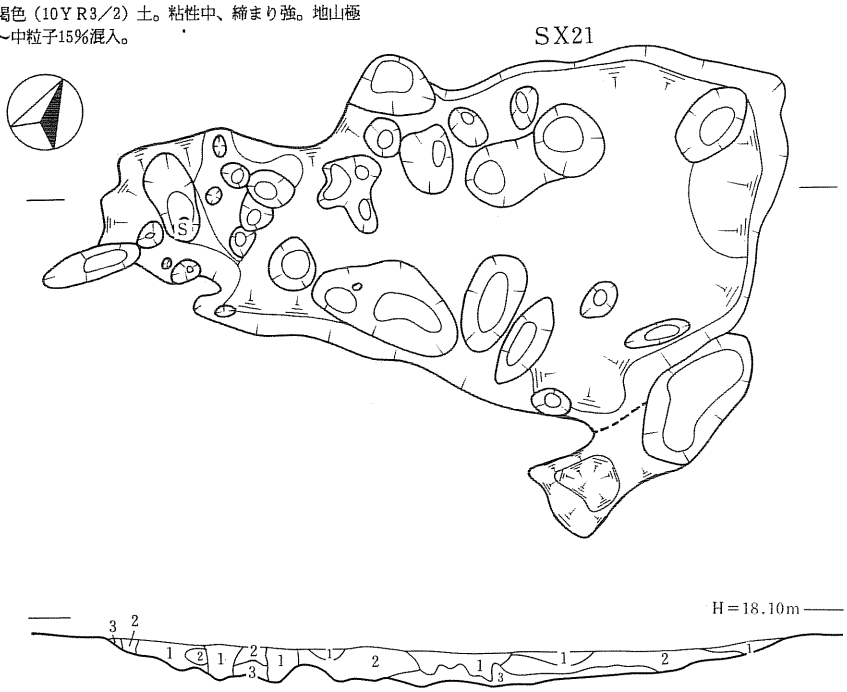


第14図　その他の遺構（１）

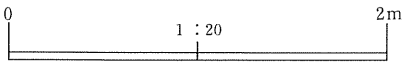




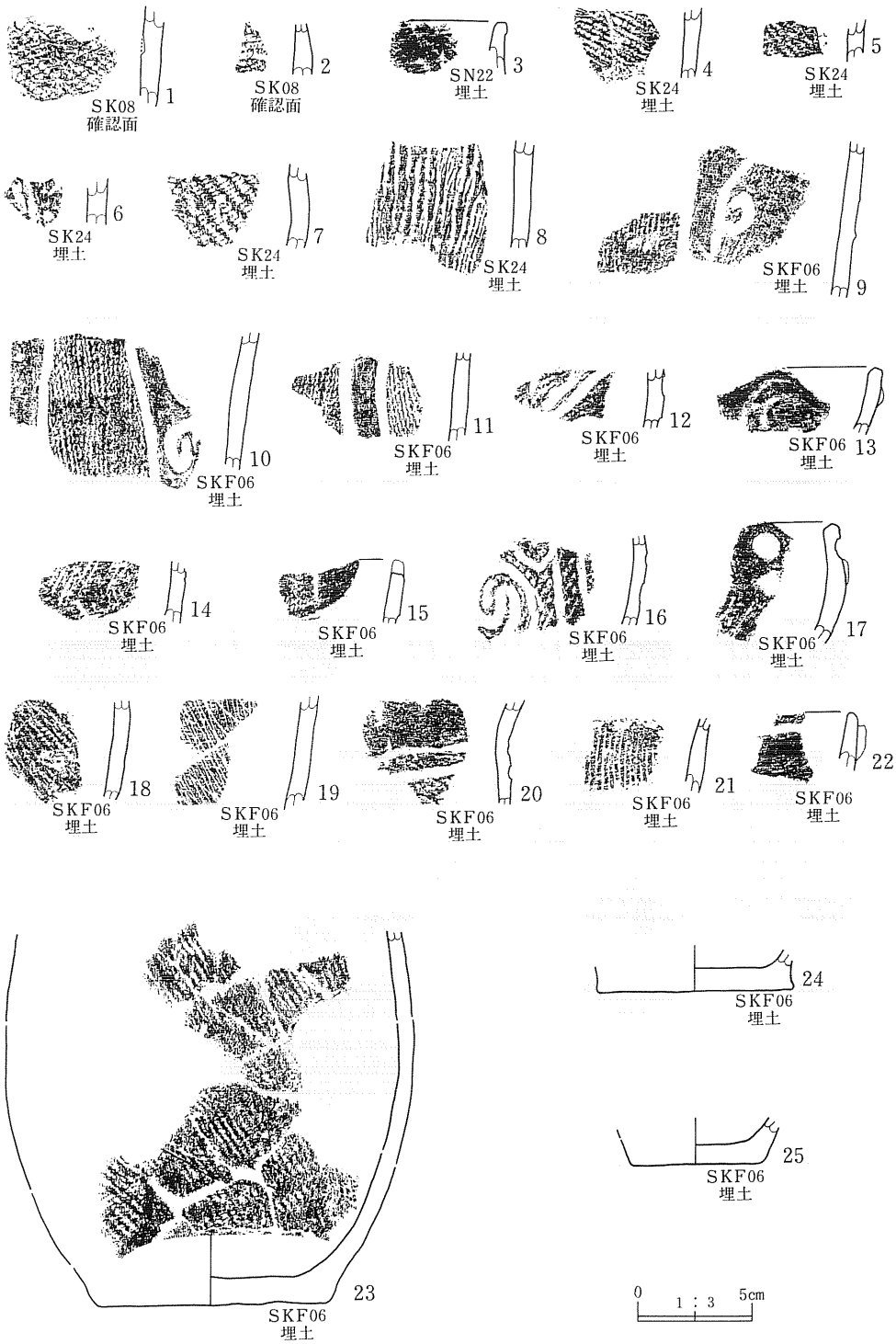
ＳＸ15
1．黒褐色（10ＹＲ3／2）土。粘性・締まりとも弱。
2．黒褐色（10ＹＲ2／3）土。粘性・締まりとも中。
3．灰黄褐色（10ＹＲ4／2）土。粘性中、締まり強。地山小～中粒子20％混入。
4．暗褐色（10ＹＲ3／3）土。粘性中、締まり強。地山小～大粒子40％混入。
5．黒褐色（10ＹＲ3／2）土。粘性中、締まり強。地山極小～中粒子15％混入。



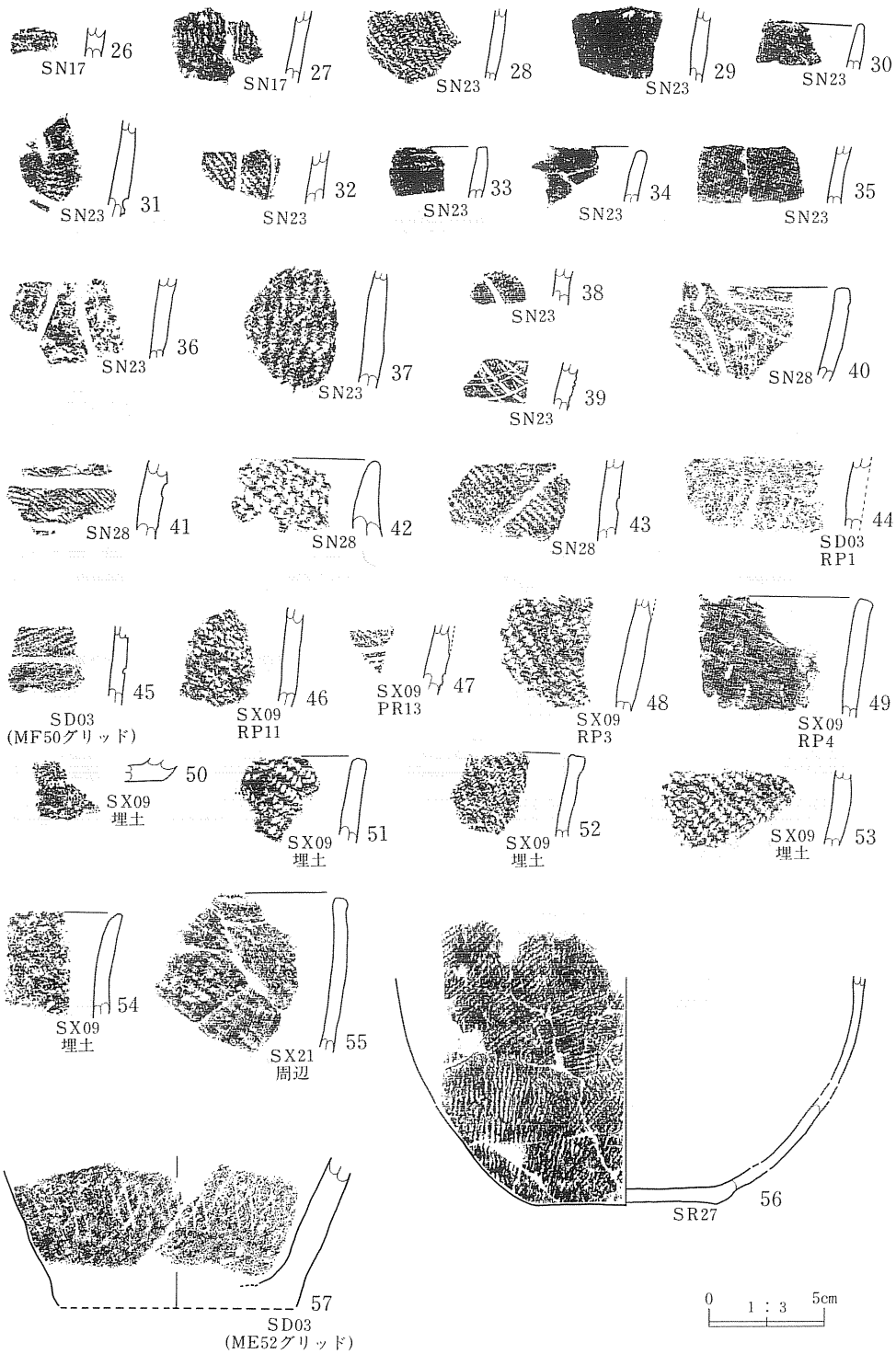
ＳＸ21
1．褐色土（10ＹＲ4／4）炭化物粒子１％含有。粘性・締まり弱。
2．黒褐色土（10ＹＲ2／2）１～２㎜の地山粒子・炭化物粒子２％含有。部分的にグライ化したような土も含む。粘性・締まり強。
3．オリーブ黄色土（10ＹＲ6／3）全体が粘質土、部分的に酸化している部分があり。粘性・締まりとも強。



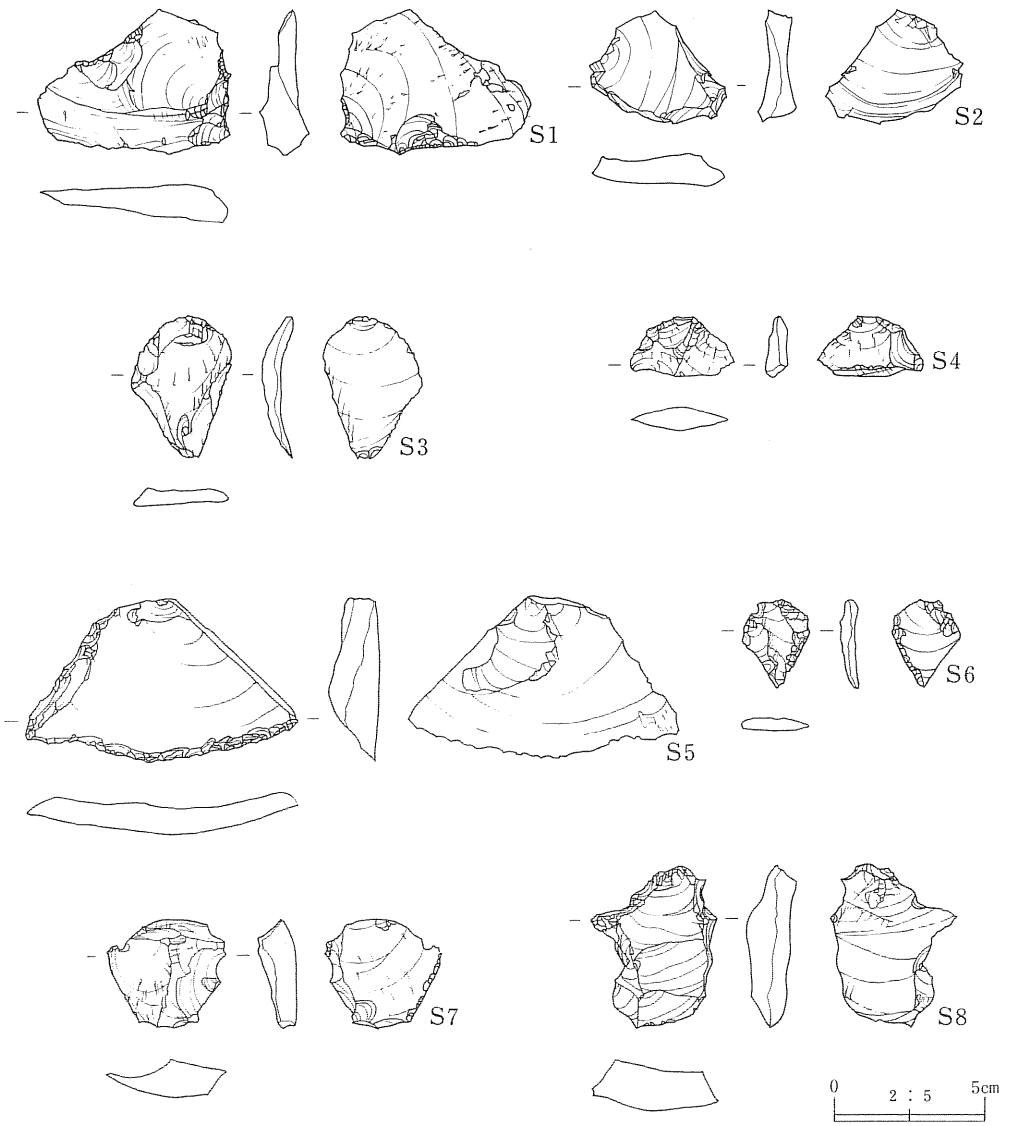
第15図　その他の遺構（２）



第16図　遺構内出土土器（１）

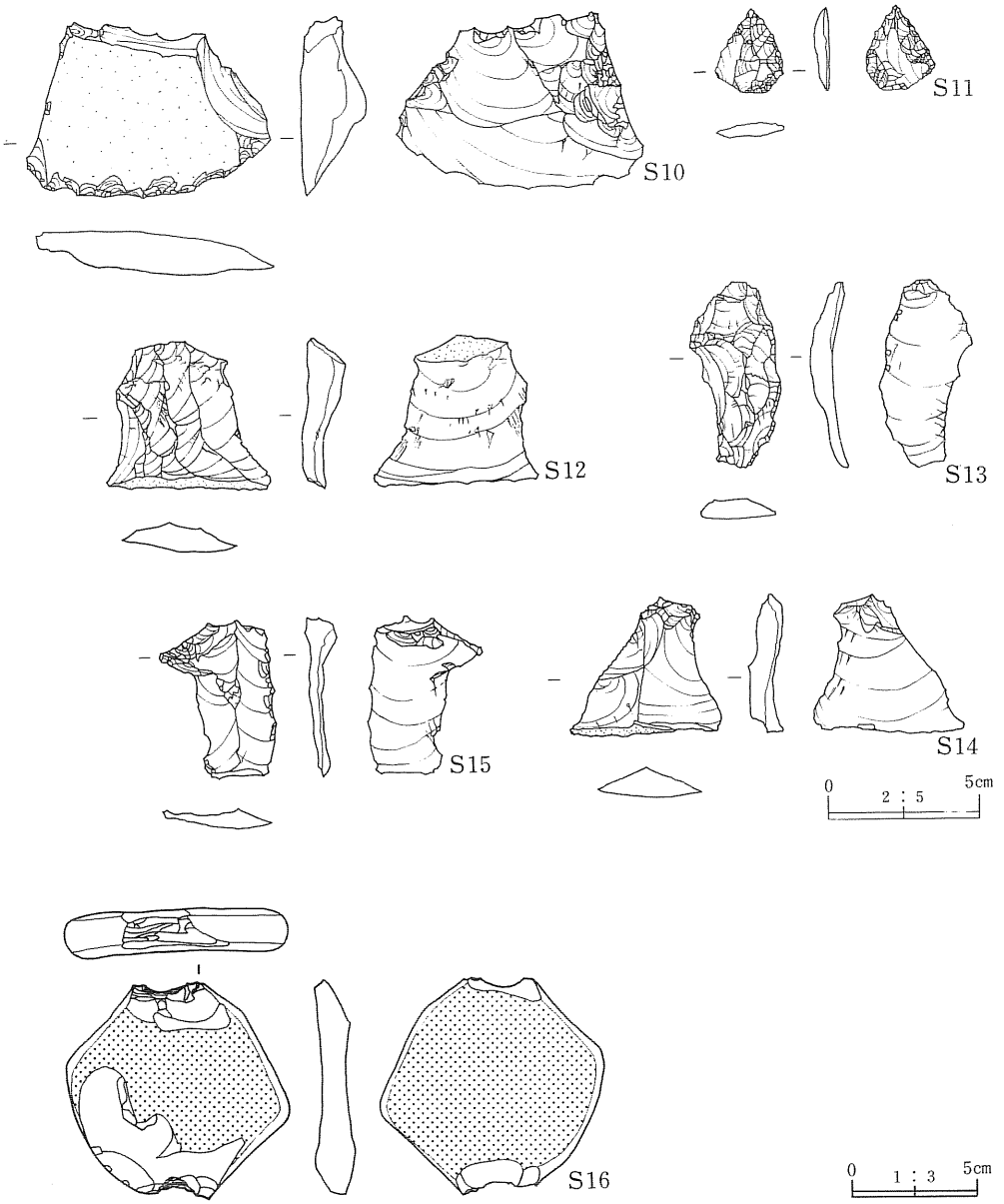


第17図　遺構内出土土器（２）



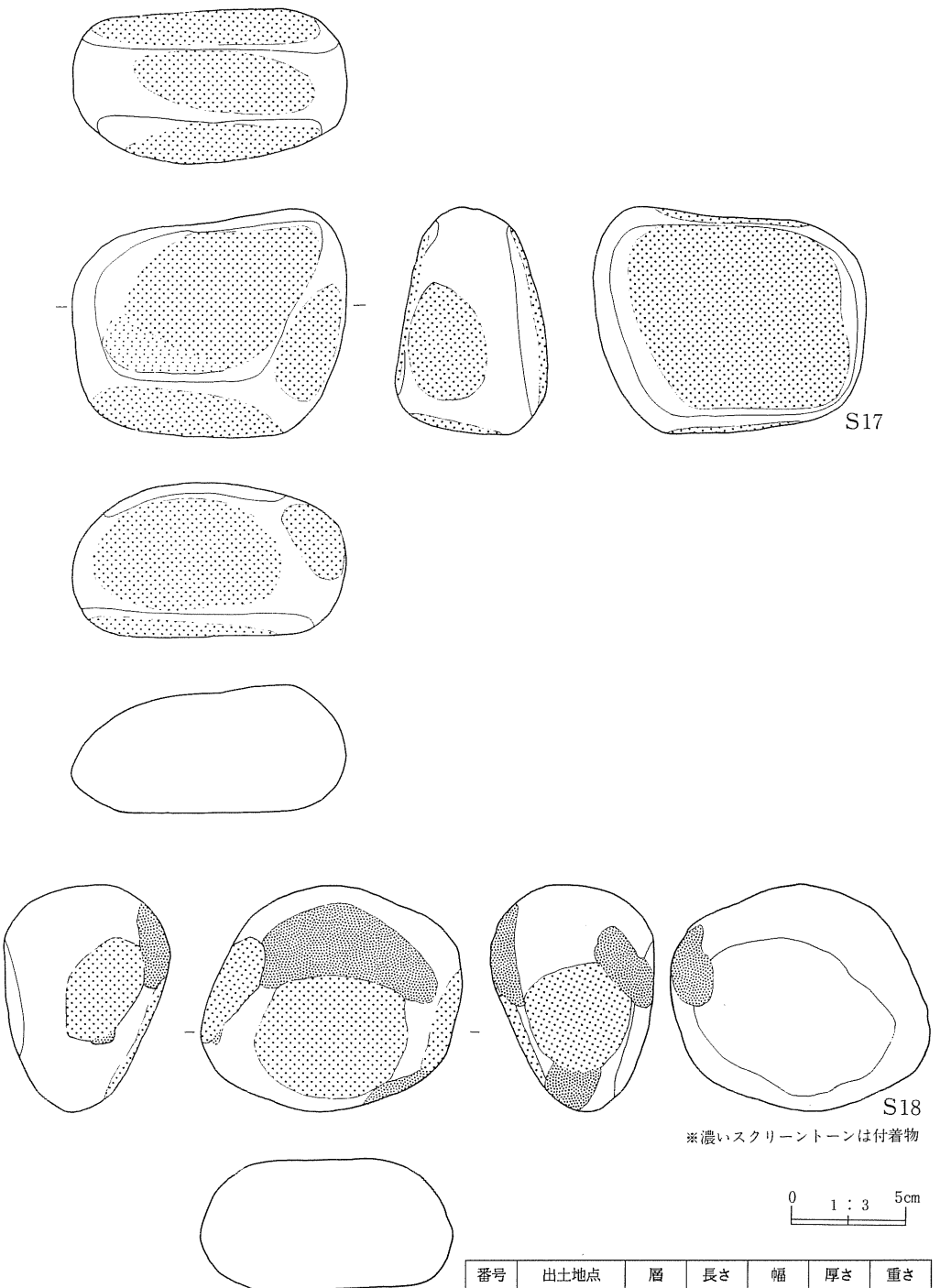
番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S 1	SK08	確認面	4.8	6.4	1.4	28
S 2	SK08	埋土	3.75	4.6	1.2	14
S 3	SK24	埋土	4.7	3.3	0.6	7
S 4	SN23	黒色土	2.0	3.5	0.8	4
S 5	SKF06	覆土	5.4	9.0	1.65	51
S 6	SK24	埋土	2.9	2.25	0.5	2
S 7	SN23	褐色土	3.6	3.95	1.3	15
S 8	SD01(MH55)	底面	5.35	4.25	1.45	28
S 9	SD03(MD54)	埋土	4.4	3.1	1.35	18

第18図　遺構内出土石器（１）



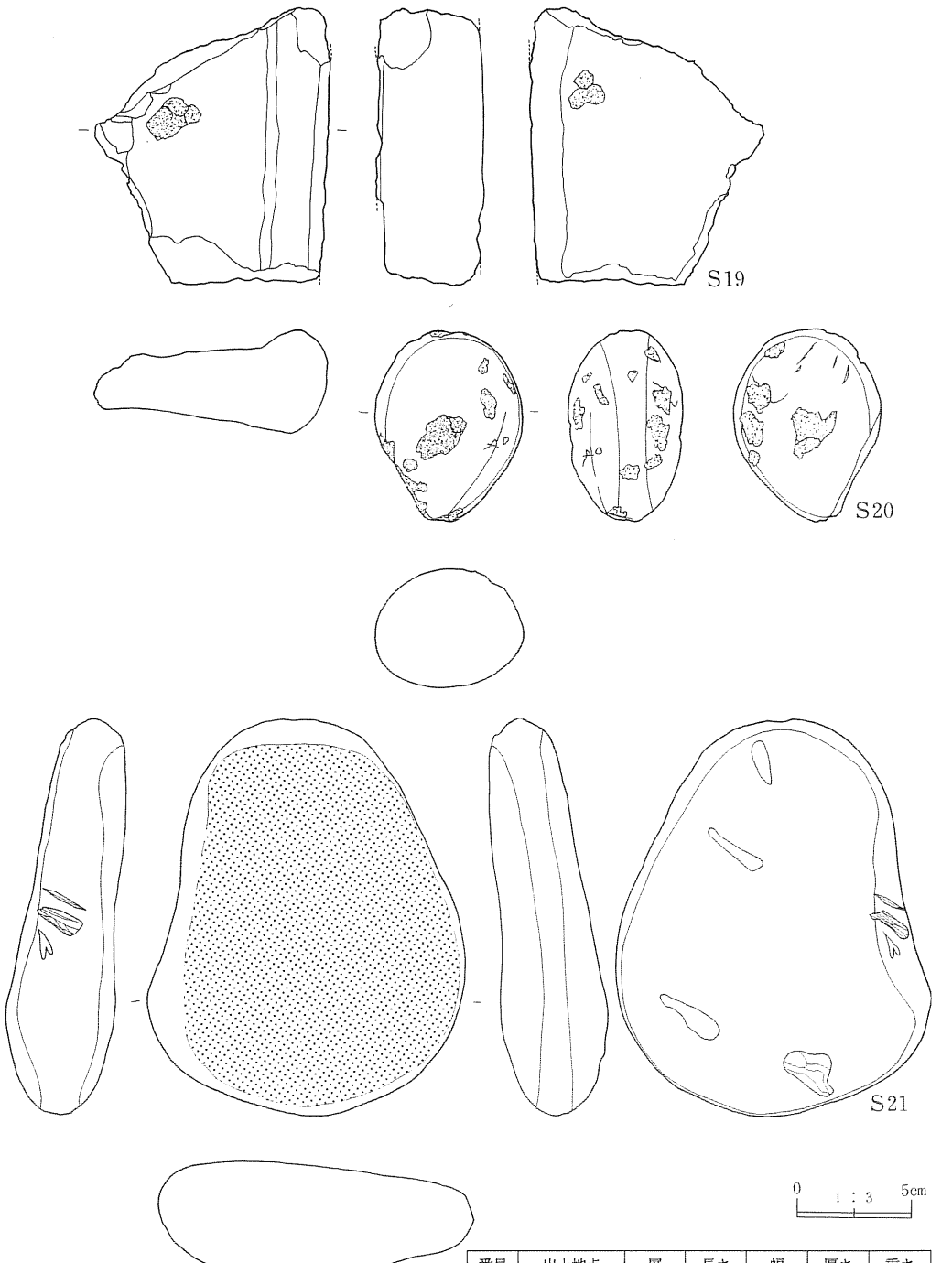
番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S10	SD03(ME52)	黒色土Ⅰ	5.9	8.2	2.1	86
S11	SX09.RQ7	―	2.8	2.3	0.5	2
S12	SX09	埋土	4.95	5.45	1.25	25
S13	SX09	埋土	6.2	3.0	0.7	10
S14	SX09	埋土	4.6	5.0	1.0	15
S15	SX16	埋土	5.3	3.85	0.9	9
S16	SX09.RQ4	―	8.8	9.0	1.8	144

第19図　遺構内出土石器（２）



番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S17	SD03(MD53)	埋土	10.01	12.0	6.75	1,193
S18	SD03(MD53)	埋土	10.00	11.45	7.35	958

第20図　遺構内出土石器（３）



番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S19	SD03(MD53)	－	(12.2)	10.3	4.7	518
S20	SD03(MD54)	埋土	8.5	6.5	5.2	344
S21	SD03(MD54)	埋土	17.5	13.95	5.0	1,383

第21図　遺構内出土石器（４）

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

（６）　その他の遺構

平面形が不整形で、底面には凹凸があるという特徴をもつ遺構をその他の遺構とした。中央部で３基、西で１基を検出した。

ＳＸ09その他の遺構　（第14図）

［検出位置］　ＬＱ52・53グリッドで検出した。

［形状］　平面形は不整形で、南側の壁は浅い皿状に緩く立ち上がるが、北側の壁はオーバーハングもしくは鍋底状の急な立ち上がりを示す。

［規模］　長軸2.53ｍで、短軸1.87ｍ、深さは0.44ｍである。底面のくぼみは平面形・断面形とも不規則であるが、その規模は長さ0.12～0.80ｍである。

［堆積土の状況］　７層に分層した。いずれも層厚は一定していない。中位の２～４・６層は褐色土か黄褐色土で、炭化物や地山の粒子を比較的多く含み、締まりのある層が多い。下位の５・７層は褐色土か黄褐色土で、いずれも炭化物をやや含み、７層は地山が多く混じる。上位の１層は基本層序の第Ⅰ層と思われる黒色土で、遺構が埋没しかかって窪んでいるところに堆積したものである。

［壁・底面の状況］　壁・底面とも凹凸がある。

［出土遺物］　（第17図46～54、第19図Ｓ11～16）埋土から土器片40点、石器や剥片が57点出土している。土器の47は色調が暗褐色で、他は褐色で、49・50以外は縄文を施文している。49・51・52・54は口縁部である。49の口縁部は無文である。46～48、51～54は胎土に繊維が混入していることから、縄文時代前期のものと思われる。石器の11は円基形の石鏃である。13・15は不定形石器で、それぞれⅠ－ｂ－１類、Ⅰ－ｂ－２類に分類した。12・14は微小剥離痕のある石器で、Ⅰ類に分類した。16は礫の両端を打ち欠いた打欠石錘である。

ＳＸ15その他の遺構　（第15図）

［検出位置］　ＭＢ52グリッドで検出した。

［形状］　平面形は不整楕円形で、断面形は浅い皿状に近い。

［規模］　長軸1.55ｍ、短軸1.22ｍ、深さは0.16ｍである。底面の凹凸は平面形・断面形とも不規則であるが、その規模は長さ0.19～0.59ｍである。

［堆積土の状況］　５層に分層した。上位の１・２層は黒褐色土で、軟らかい。下部の３～５層は灰黄褐色か黒味を帯びた色で、地山粒子がやや多く混じる。いずれも層厚は一定しておらず、うねったような状況で堆積している。

［壁・底面の状況］　壁・底面とも凹凸がある。

［出土遺物］　遺物は出土していない。

ＳＸ16その他の遺構　（第15図）

［検出位置］　ＭＢ51・52グリッドで検出した。

［形状］　平面形は不整楕円形で、断面形は浅い皿状に近い。

［規模］　長軸1.90ｍ、短軸1.03ｍ、深さは0.29ｍである。底面のくぼみは、ＳＸ15と同様に、平面形・断面形とも不規則であるが、その規模は長さ0.14～0.55ｍである。

［堆積土の状況］　断面図は作成できなかったが、黒色土の落ち込みとして確認したものである。

［壁・底面の状況］　壁・底面とも凹凸がある。

［出土遺物］　（第19図Ｓ15）石器が埋土から１点出土している。Ｓ15は不定形石器（Ｉ－ｂ－２類）である。

ＳＸ21その他の遺構　（第15図）

［検出位置］　ＭＣ52グリッドで検出した。

［形状］　平面形は不整楕円形で、断面形は浅い皿状に近い。

［規模］　長軸4.05ｍ、短軸2.18ｍ、深さは0.22ｍである。底面のくぼみは平面形・断面形とも不規則で、その規模は長さ0.05～0.80ｍである。

［堆積土の状況］　３層に分層した。１層の褐色土は撹乱と思われるが、２層の黒褐色土は炭化物や地山粒子・グライ化した土も含む。３層はオリーブ黄色の粘質土である。

［壁・底面の状況］　壁・底面とも凹凸がある。

［出土遺物］　遺物は出土していない。

第３節　遺構外の出土遺物

遺構外からは、縄文時代前期と中期～後期、そして晩期の土器・石器が出土している。遺物は南東部と西部に多く、遺構を多く検出した南東部に集中して出土している。挿図中の土器の出土地点・層名はその下に付記している。また、石器は全て観察表中に記入している。なお、土器・石器の分類と説明には、遺構内のものも加えた。遺構外出土の土器と石器の番号は、遺構内出土のものから連続して、それぞれ通し番号となっている。

１．土器（第16図10・11・13・17、第17図57、第22図58～89、第23図90～99）

土器の分類は時期毎に群に分け、その中で口縁部を中心に文様構成・文様の施文手法の差異によって細分した。各群で胎土・焼成に特徴がみられたものはそれを付記した。

Ⅰ群土器　縄文時代前期前半の土器である。

１類（58）　口縁部と平行に１本の太い隆帯を貼付した土器である。隆帯上には太い原体の先端（開端部）の押捺が見られる。縄文が施文され、胎土に繊維が混入している。

２類（64～66）　不整撚糸文を施文した土器である。66は明らかに胎土に繊維が混入しており、軽い。

３類（59～63）　縄文を施文した土器である。59・60は平口縁の口縁部片で、60は口唇部にも縄文を施文している。

４類（67）　土器の底部である。底部の下端部や底面に縄文を施文している。

Ⅱ群土器　縄文時代中期後半の土器である。

１類（68）　地文が無文で、その上に渦巻文を施文した土器である。

２類（80）　円形竹管文を施文した土器である。曲線的な（楕円形か）細隆線の内側に円形竹管文を施文している。

Ⅲ群土器　縄文時代後期前半の土器である。

１類（79）　地文が無文であり、その上に、４条のやや曲線的で、細く浅い沈線を、横位に施文した土器である。

２類（57・86～89）　網目状撚糸文を施文した土器である。色調は赤褐色や褐灰色である。

３類　地文が縄文で、その上に沈線で文様を施文した土器である。

ａ種（69～75）　曲線的な沈線を施文した土器である。沈線は細く浅い。

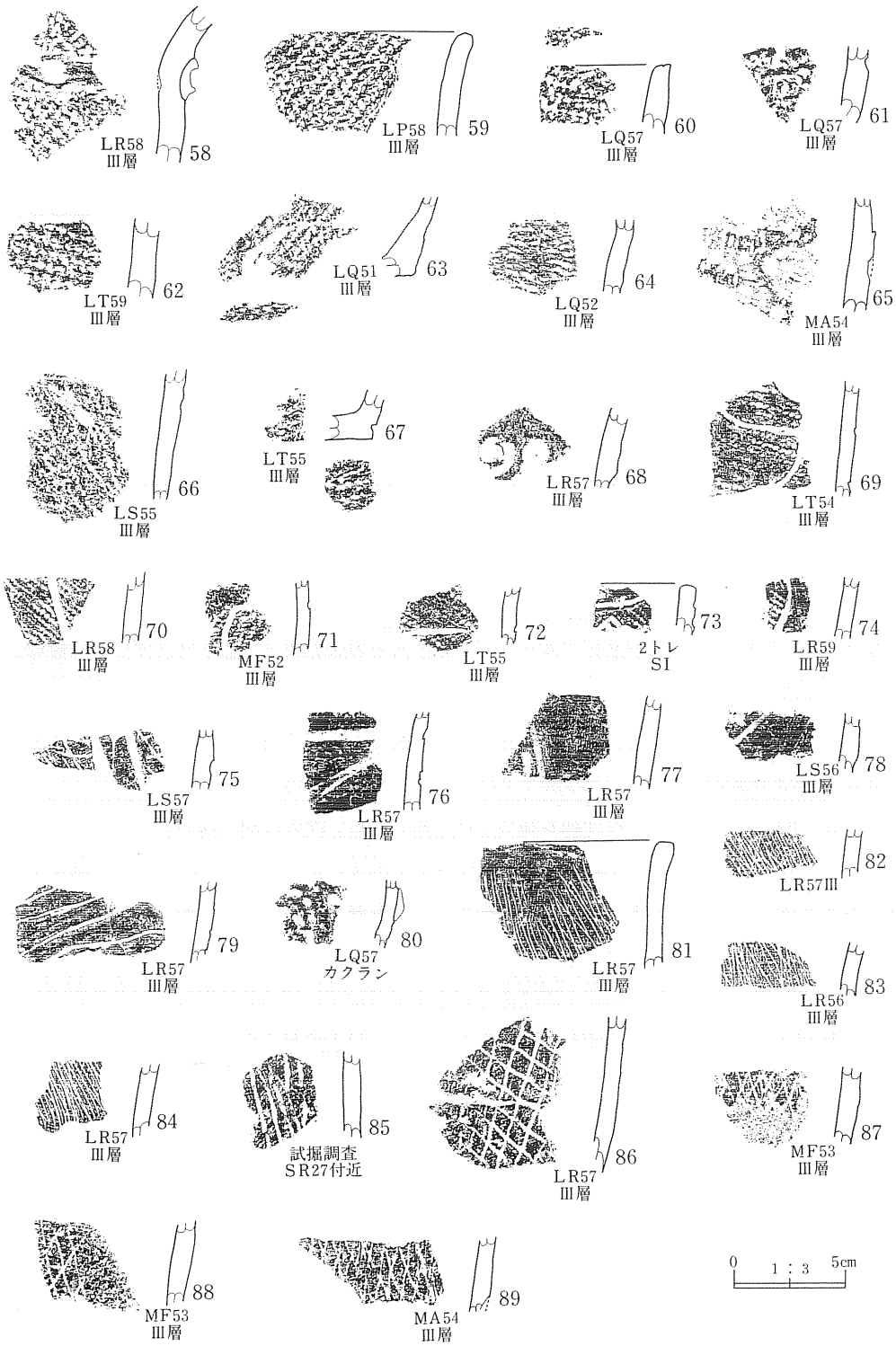
ｂ種（10・11）　縦位の沈線を施文し、磨消縄文手法によって無文部を作出し、縄文部と無文部を区画した土器である。無文部に渦巻状の文様を施文している。沈線はやや広い。ＳＫＦ06フラスコ土坑から出土した。

４類（13・17）隆線を施文した土器である。小波状口縁で、17は波頂部に円形文を施文しており、色調は褐灰色である。いずれもＳＫＦ06フラスコ状土坑から出土した。

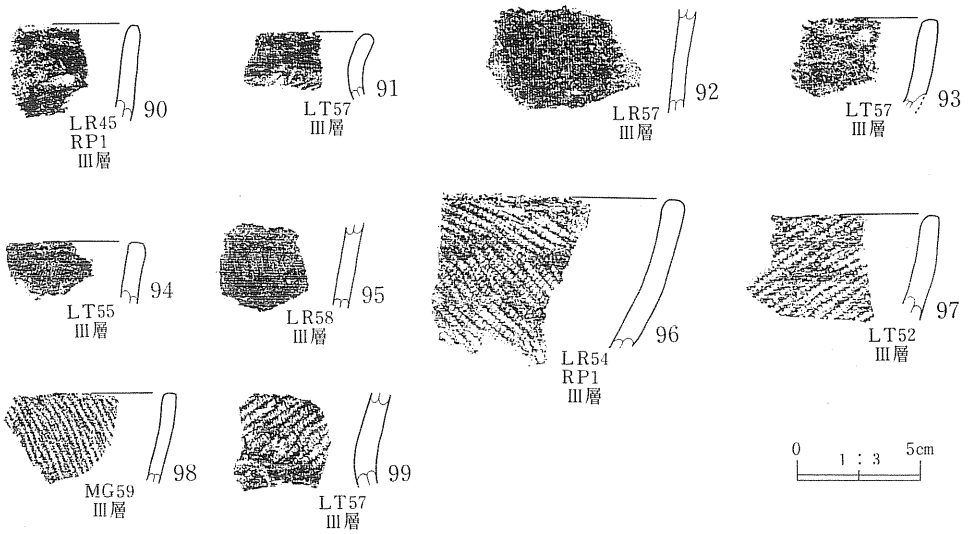
Ⅳ群土器　縄文時代中期～後期の土器と思われるが、細片で器形や施文上の特徴、および胎土・焼成から時期を明確に分け難いため、一括して分類した。

１類（76～78）　地文が無文であり、その上に１～２条のやや太めの沈線を施文した土器である。色調は76・77は赤褐色で、胎土が精選され、78は褐灰色で砂粒が混入している。

２類（81～85）　撚糸文を縦位・斜位に施文した土器である。焼成・胎土とも良好で、色調は赤褐色かにぶい黄橙色をしている。81は平口縁で口縁部が無文となる。



第22図　遺構外出土土器（１）



第23図　遺構外出土土器（２）

３類（96～99）　縄文のみを施文した土器である。96～98は口縁部で、外面に煤状炭化物が付着している。

４類（90～95）　無文の土器である。焼成・胎土とも良好で、色調は赤褐色かにぶい黄橙色をしている。

２．石器　（第18図Ｓ２・Ｓ４・Ｓ６～Ｓ９、第19図Ｓ10・Ｓ11・Ｓ13～Ｓ16、第20図Ｓ17・Ｓ18、第21図Ｓ19～Ｓ21、第24図Ｓ22～第33図Ｓ84）

遺構外の石器は形態・調整抜法などから下記のように分類した。なお、説明にあたって必要な石器は遺構内から適宜引用した。

①　剥片石器

石質は大多数が頁岩である。

石鏃（Ｓ11）　１点出土した。円基鏃である。

石錐　３点出土した。いづれも錐部の断面形が略三角形で、縦長の一端がやや細くなる剥片を利用している。

Ⅰ類（Ｓ22・Ｓ23）　尖端部のみに二次調整を施して錐部としたものである。

Ⅱ類（Ｓ26）　両側縁に二次調整を施して錐部としたものである。

石匙（Ｓ24～Ｓ23）　５点出土した。両側縁から抉りを入れてつまみ部を作出し、両側縁を片面からの加撃によって刃部が作られた石器で、刃部とつまみの中軸線の交わる角度によって以

下のように分類した。

Ⅰ類　縦型

Ⅰ－Ａ類（Ｓ24・Ｓ25・Ｓ28）　ほぼ平行する２つの側縁をもつものである。Ｓ25・Ｓ28は折損しているが、この仲間と思われる。

Ⅰ－Ｂ類（Ｓ29）　やや曲線的な２つの側縁をもち、刃部が直線的である。平面形が台形状である。

Ⅱ類　斜型（Ｓ27）

刃部が直線的なものである。

石篦　３点出土した。ほぼ左右対象で、略楕円形、もしくは上方が広く、下方が狭い石器である。

Ⅰ類　略楕円形

Ⅰ－Ａ類（Ｓ30）　丸刃・片刃のものである。

Ⅰ－Ｂ類（Ｓ35）　丸刃・両刃のものである。

Ⅱ類（Ｓ32）　上方が広く、下方が狭い、丸刃・片刃のものである。

打製石斧（Ｓ31）　１点出土した。縦長の剥片で、裏の両側縁と、刃部の表に粗い剥離を施して撥形に成形しているもので、丸刃・片刃である。

不定形石器　39点出土した。不定形石器は、形が不定形な剥片に二次調整を施して刃部を作出したものである。剥片の形状や製作技法・刃部の形状の特徴から以下のように分類した。

Ⅰ類　縦長の剥片を素材としたものである。

Ⅰ－Ａ類　厚手の剥片で急角度に調整された刃部を作出した石器である。片面調整のものが多い。

Ⅰ－Ａ－１類（Ｓ34）　楕円形で、周縁に二次調整を施して刃部を作出しているもの。

Ⅰ－Ａ－２類（Ｓ15・Ｓ33、Ｓ36～Ｓ38）　楕円形・略長方形・不定形で、１～３側縁に二次調整を施して刃部を作出しているものである。

Ⅰ－Ｂ類　大・小の剥片の側縁に連続的な二次調整によって刃部を作出した石器である。片面調整で薄い刃部をもつものが圧倒的に多い。

Ⅰ－Ｂ－１類（Ｓ６・Ｓ13、Ｓ39～Ｓ44）　略長方形・略三角形で、周縁もしくは３側縁に二次調整を施すものである。

Ⅰ－Ｂ－２類（Ｓ15、Ｓ45～Ｓ49）　略長方形で、平行する側縁の両側縁もしくは片側に二次調整を施すものである。

Ⅰ－Ｂ－３類（Ｓ９）　半月形の側縁に二次調整を施すもので、両面調整の片刃である。

Ⅰ－Ｂ－４類（Ｓ14・Ｓ50・Ｓ51・Ｓ53・Ｓ57）　略三角形で尖端部をもち、両側縁も

しくは片側縁に二次調整を施すものである。

Ⅰ－Ｂ－５類（Ｓ52・Ｓ56）　不定形で、尖端部をもち、弧状となった片側縁に二次調整を施すものである。

Ⅰ－Ｂ－６類（Ｓ54）　靴型で、片面（表面）の側縁の一部に二次調整を施すものである。

Ⅰ－Ｂ－７類（Ｓ58）　楕円形で、両面の周縁に二次調整を施すものである。

Ⅱ類　横長の剥片を素材としたものである。

Ⅱ－Ａ類（Ｓ59・Ｓ61）　略三角形で、緩く弧状となった下辺部に二次調整を施して刃部としたものである。

Ⅱ－Ｂ類（Ｓ60・Ｓ63・Ｓ64・Ｓ67）　不定形で、側縁もしくは周縁の一部に二次調整を施して刃部としたものである。

微小剥離痕のある石器　８点の出土である。使用痕と思われる微小剥離痕があるものである。剥片の形状から以下のように分類した。

Ⅰ類（Ｓ２・Ｓ４・Ｓ７・Ｓ８・Ｓ62・Ｓ65）　縦長の剥片を素材としたもの。

Ⅱ類（Ｓ10・Ｓ66）　横長の剥片を素材としたもの。

石核（Ｓ68）

原材は頁岩で、その原石を分割して取り出した石核である。他に２点出土している。

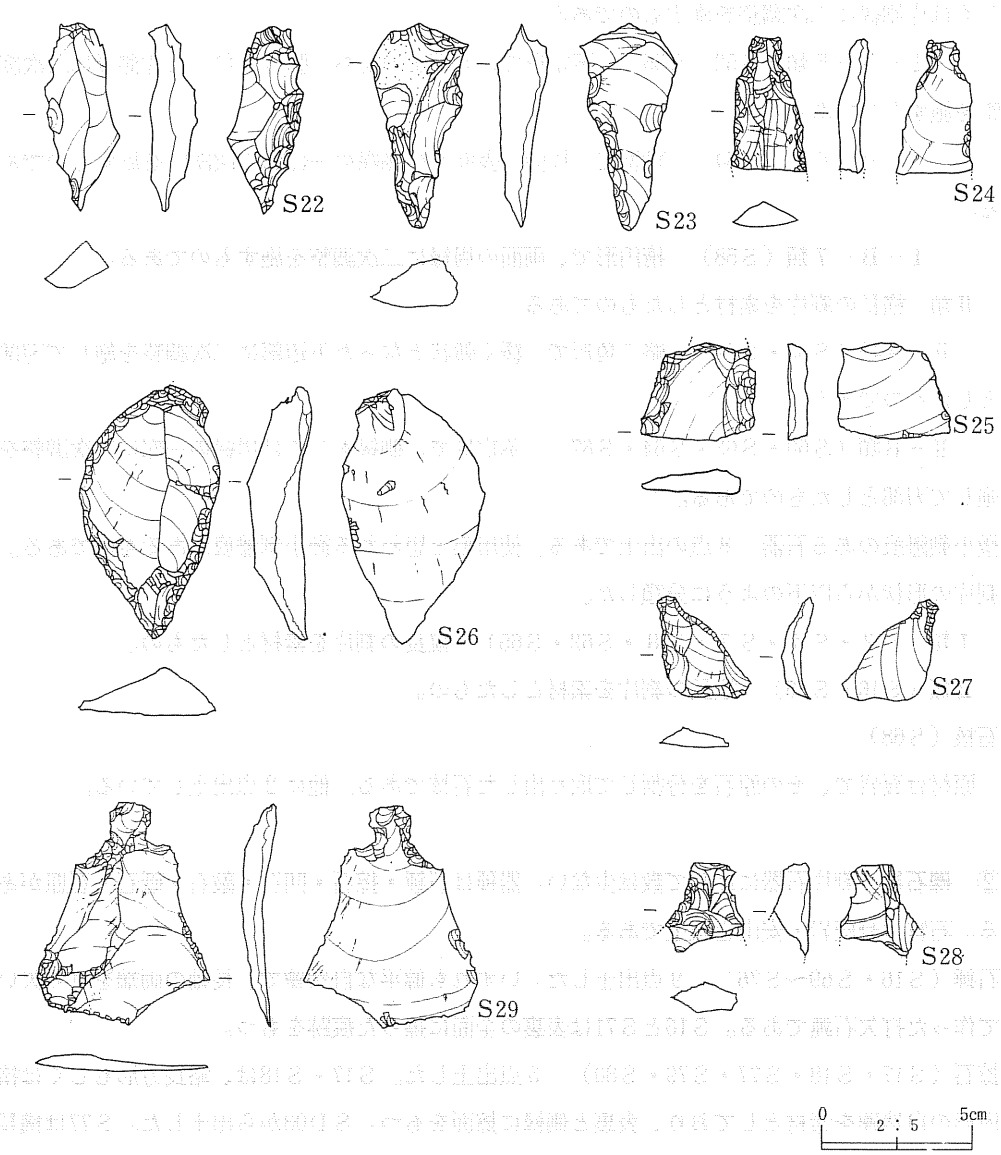
② **礫石器**　剥片石器に比して数は少ない。器種は石錘・擦石・凹石・敲石・砥石・石皿がある。石質は凝灰岩・安山岩が主である。

石錘（Ｓ16・Ｓ69～Ｓ76）　９点出土した。いずれも偏平な自然礫で、長軸の両端を打ち欠いて作った打欠石錘である。Ｓ16とＳ71は表裏の全面に擦った痕跡をもつ。

擦石（Ｓ17・Ｓ18・Ｓ77・Ｓ79・Ｓ80）　５点出土した。Ｓ17・Ｓ18は、略長方形もしくは楕円形の自然礫を素材としており、表裏と側縁に擦面をもつ。ＳＤ03から出土した。Ｓ77は横長の自然礫を素材としており、長軸の３面に擦面をもつ。両端には敲打痕を残している。Ｓ79・Ｓ80は折損しているが、横長の偏平な自然礫を素材としたものと思われ、長軸の片側縁に擦面をもつものである。

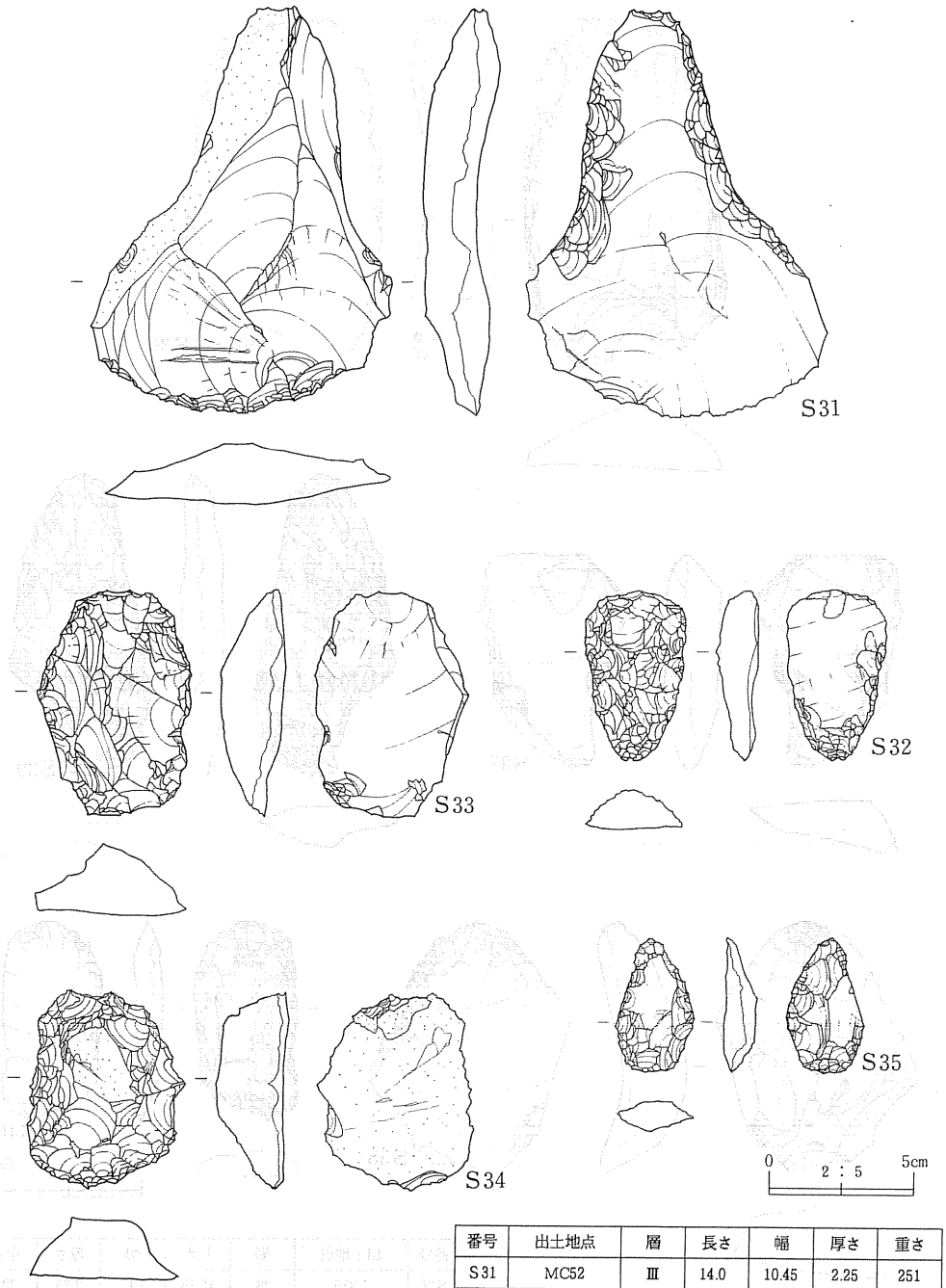
凹石（Ｓ20・Ｓ82・Ｓ83）　３点出土した。いずれも楕円形の自然礫を素材としており、Ｓ20・Ｓ82は表裏に、Ｓ83は片面に凹面をもつ。Ｓ20は長軸の１端に敲打痕を、Ｓ82・Ｓ83は表裏と側面の１部に擦面をもつ。

敲石（Ｓ78・Ｓ81）　２点出土した。いずれも楕円形の自然礫を素材としており、Ｓ78は長軸の１側縁に、Ｓ81は１端に敲打痕をもつものである。



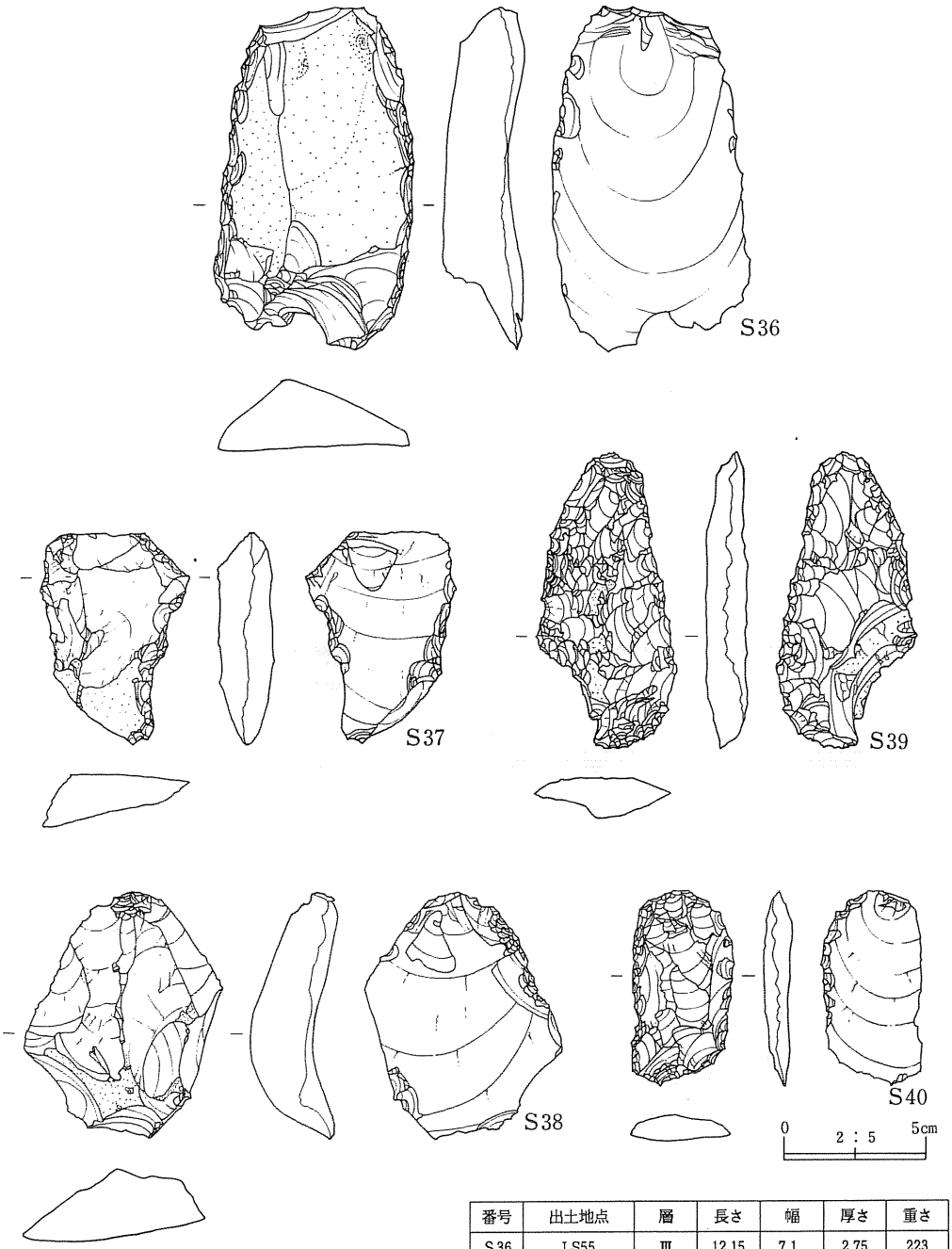
番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S22	MP52	Ⅲ	6.2	2.5	1.55	14
S23	LR53	Ⅲ	6.8	3.2	1.7	20
S24	LR53	Ⅲ	(4.45)	2.55	0.85	9
S25	LR58	Ⅲ	(3.2)	3.75	0.8	12
S26	LR49	Ⅲ	8.4	4.7	1.7	47
S27	LR50	Ⅲ	3.4	3.2	0.65	5
S28	LQ52	Ⅳ	(3.0)	2.6	1.2	6
S29	LO52	Ⅲ	7.4	5.75	0.9	25
S30	LS55	Ⅲ	7.0	4.4	1.8	55

第24図　遺構外出土石器（１）



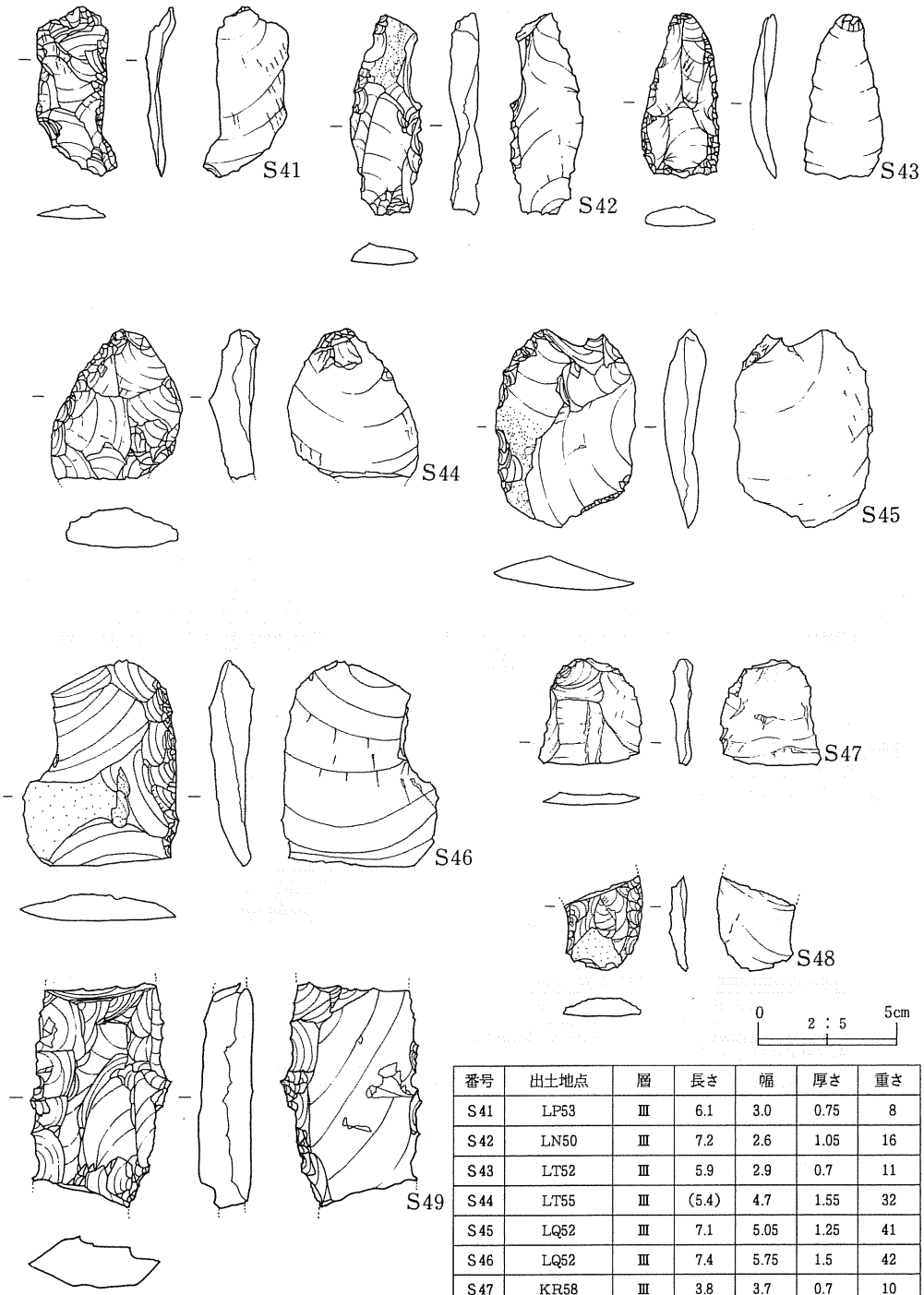
番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S31	MC52	Ⅲ	14.0	10.45	2.25	251
S32	LS59	Ⅲ	5.85	3.5	1.4	29
S33	LS56	Ⅲ	7.8	5.4	2.4	81
S34	LS57	Ⅲ	6.8	5.5	2.3	82
S35	試掘調査でSR27付近から出土	―	4.6	2.75	1.15	11

第25図　遺構外出土石器（２）



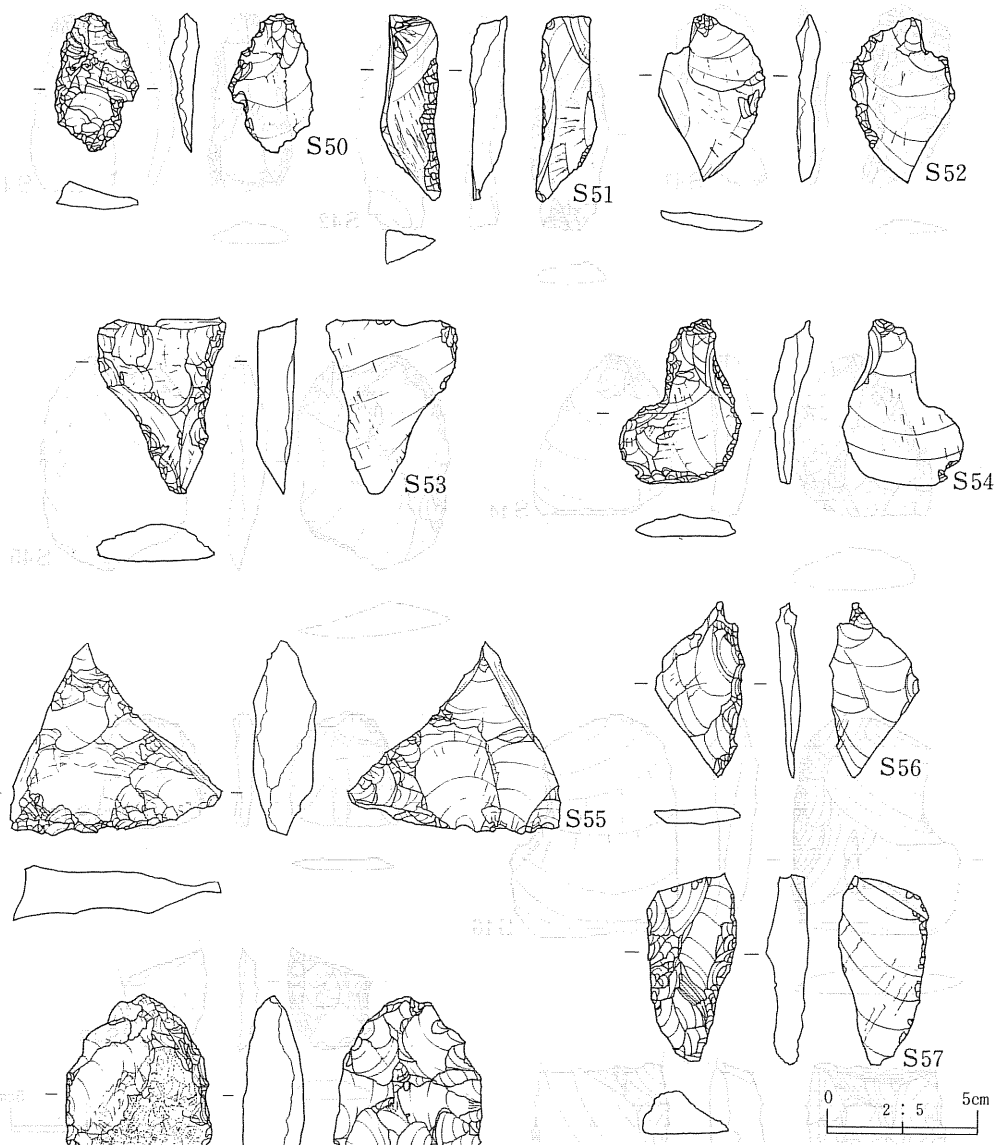
番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S36	LS55	Ⅲ	12.15	7.1	2.75	223
S37	LP51	Ⅲ	7.5	5.3	1.9	67
S38	LR58	Ⅲ	8.7	7.0	2.4	126
S39	LQ52	Ⅲ	10.45	5.0	1.5	71
S40	LQ52	Ⅲ	6.9	3.65	0.9	25

第26図　遺構外出土石器（３）



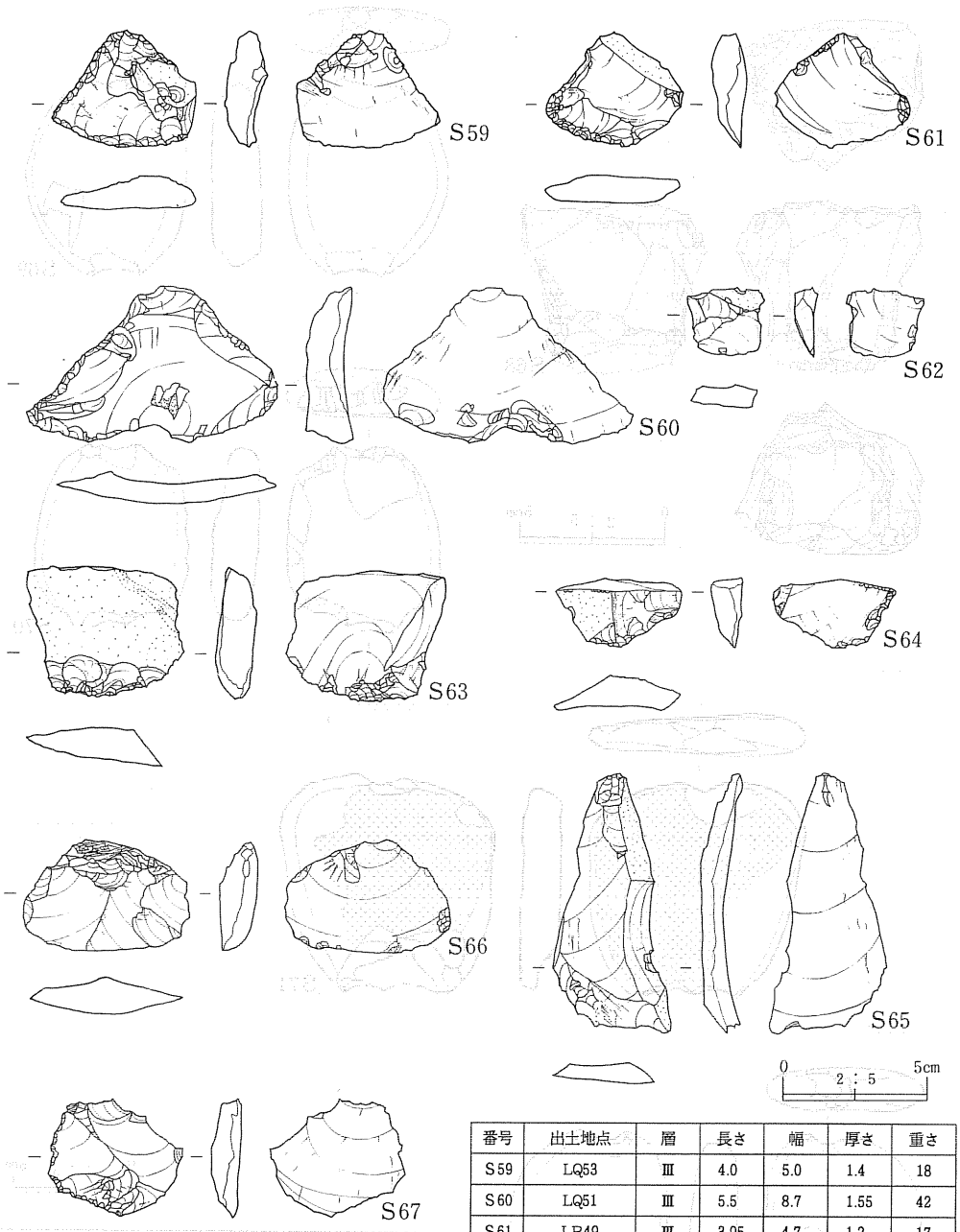
番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S41	LP53	Ⅲ	6.1	3.0	0.75	8
S42	LN50	Ⅲ	7.2	2.6	1.05	16
S43	LT52	Ⅲ	5.9	2.9	0.7	11
S44	LT55	Ⅲ	(5.4)	4.7	1.55	32
S45	LQ52	Ⅲ	7.1	5.05	1.25	41
S46	LQ52	Ⅲ	7.4	5.75	1.5	42
S47	KR58	Ⅲ	3.8	3.7	0.7	10
S48	LR53	Ⅲ	(3.4)	2.8	0.6	6
S49	LS57	Ⅲ	(8.1)	5.15	1.9	87

第27図　遺構外出土石器（４）



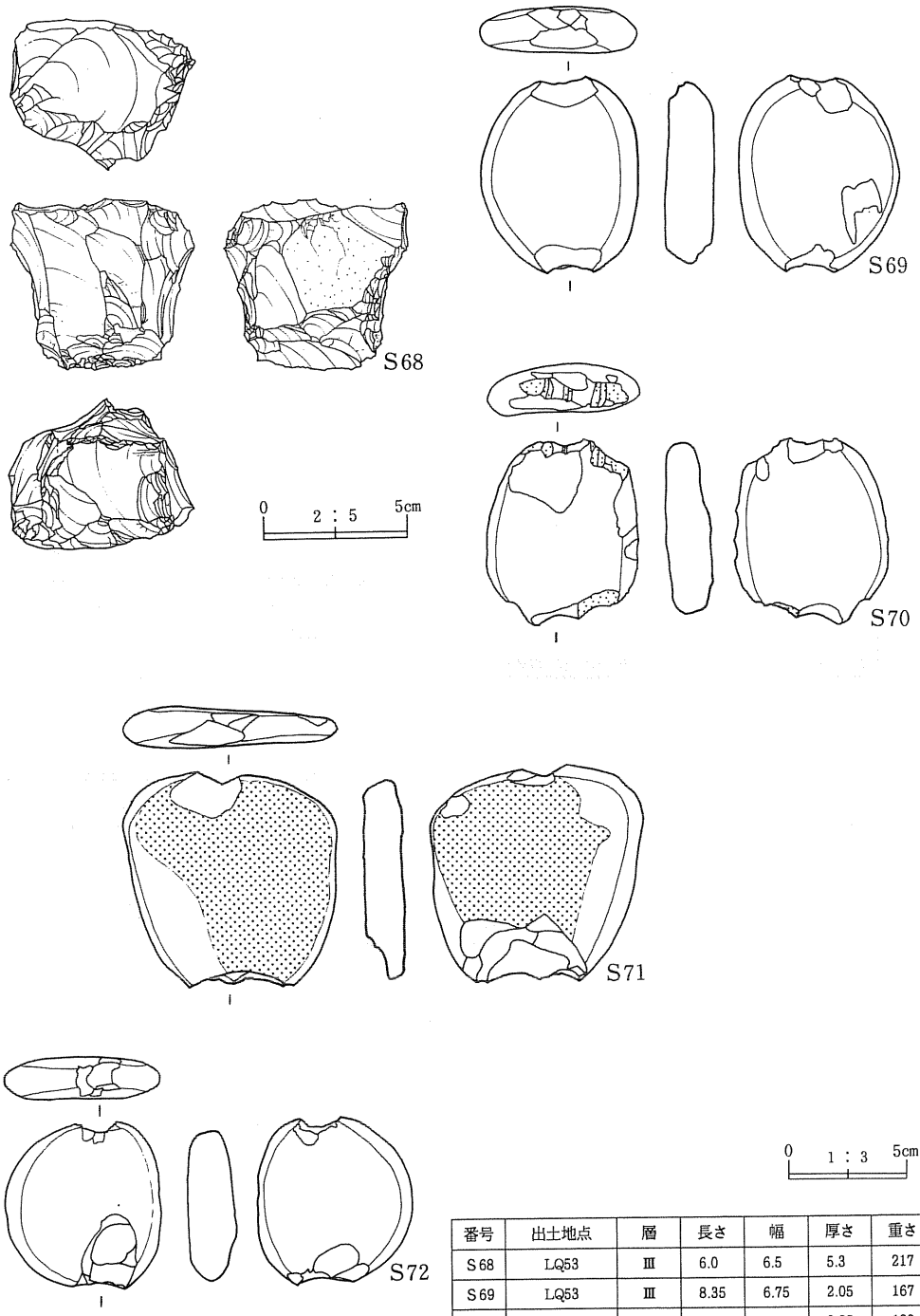
番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S50	LP53	Ⅲ	4.56	2.8	0.95	8
S51	LR50	Ⅲ	6.1	1.9	1.01	11
S52	KR58	Ⅲ	5.5	3.5	0.8	11
S53	LQ51	Ⅲ	5.8	4.35	1.3	28
S54	LP53	Ⅲ	5.5	4.1	0.95	13
S55	LT55	Ⅲ	6.4	7.15	2.1	70
S56	LS56	Ⅲ	5.8	2.95	0.65	8
S57	LP53	Ⅲ	6.3	2.9	1.45	20
S58	MH55	Ⅲ	7.3	4.8	2.0	65

第28　遺構外出土石器（５）



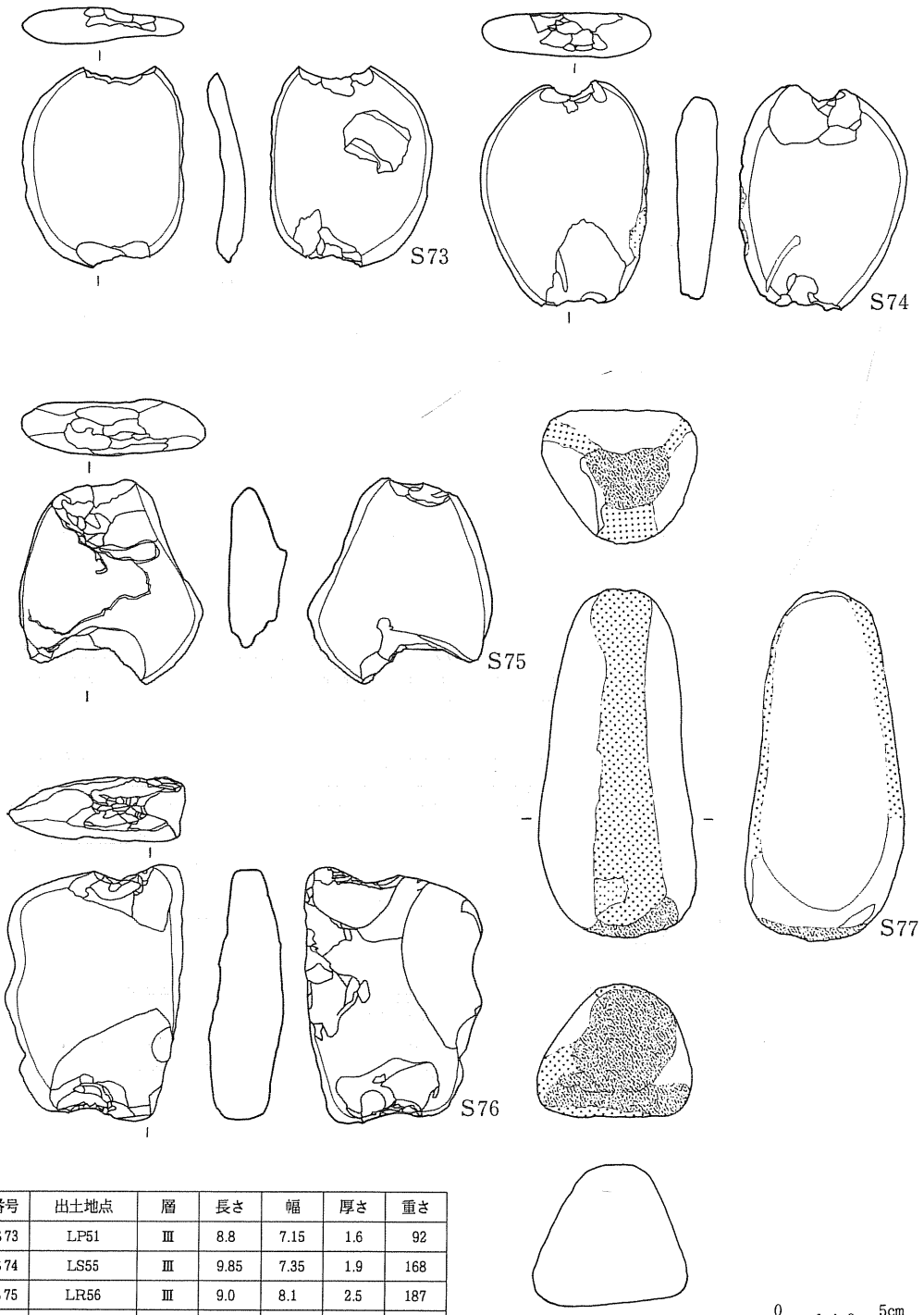
番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S59	LQ53	Ⅲ	4.0	5.0	1.4	18
S60	LQ51	Ⅲ	5.5	8.7	1.55	42
S61	LR49	Ⅲ	3.95	4.7	1.2	17
S62	LS55	Ⅲ	2.4	2.7	0.8	5
S63	LS55	Ⅲ	4.5	5.55	1.25	35
S64	KR58	Ⅲ	4.4	4.35	1.05	9
S65	LR54.RP1	Ⅲ	9.0	4.1	1.0	21
S66	LQ51	Ⅲ	3.85	5.8	1.3	25
S67	LQ52	Ⅲ	4.1	4.7	1.0	14

第29図　遺構外出土石器（６）



番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S68	LQ53	Ⅲ	6.0	6.5	5.3	217
S69	LQ53	Ⅲ	8.35	6.75	2.05	167
S70	LQ52	Ⅲ	8.0	6.5	2.05	132
S71	LP53	Ⅲ	9.2	9.1	1.8	195
S72	LR54.RP1	Ⅲ	7.1	6.6	2.0	121

第30図　遺構外出土石器（７）

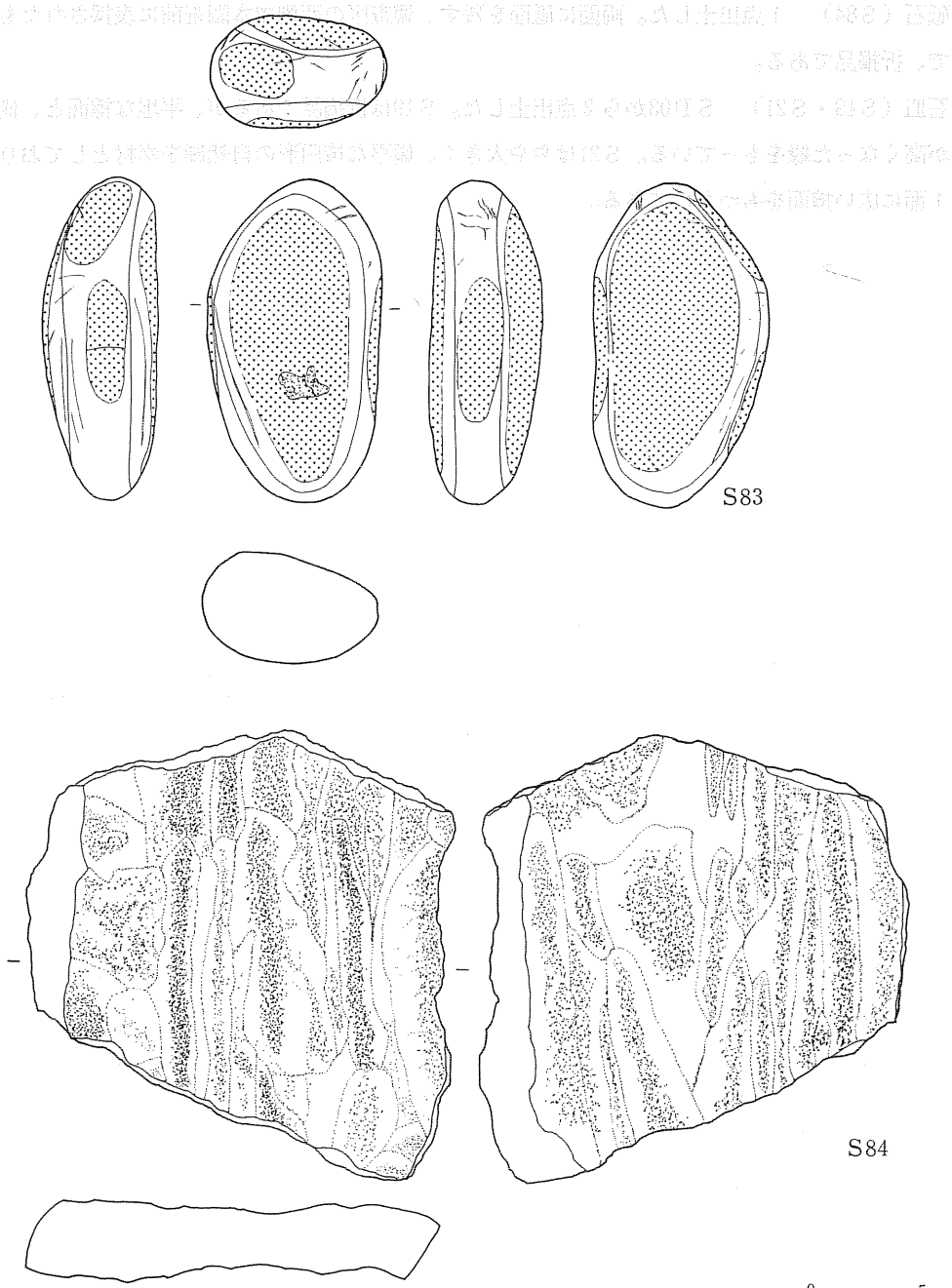


番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S73	LP51	Ⅲ	8.8	7.15	1.6	92
S74	LS55	Ⅲ	9.85	7.35	1.9	168
S75	LR56	Ⅲ	9.0	8.1	2.5	187
S76	LT59	Ⅲ	11.2	7.8	3.0	283
S77	LT55	Ⅲ	15.3	6.9	6.1	862

第31図　遺構外出土石器（８）

番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S78	LT51	Ⅲ	7.6	10.9	6.1	590
S79	LT59	Ⅲ	6.4	9.3	2.7	67
S80	MD55	Ⅲ	7.3	(8.25)	3.2	255
S81	LP53	Ⅲ	(8.5)	5.9	3.5	264
S82	MG53	Ⅲ	14.6	7.4	6.2	878

第32図　遺構外出土石器（９）



番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S83	LS59	Ⅲ	13.4	7.3	4.7	597
S84	試掘調査で SD03付近から出土	―	18.6	17.85	3.4	1,434

第33図　遺構外出土石器（10）

砥石（Ｓ84）　１点出土した。両面に砥面を残す。調査区の西側で本調査前に表採されたもので、折損品である。

石皿（Ｓ19・Ｓ21）　ＳＤ03から２点出土した。Ｓ19は折損品であるが、平坦な擦面と、側面が高くなった縁をもっている。Ｓ21はやや大きく、偏平な楕円形の自然礫を素材としており、１面に広い擦面をもつものである。

第５章　放射性炭素年代測定とその樹種

中の沢遺跡出土材の放射性炭素年代測定とその樹種

藤根　久（パレオ・ラボ）

１．はじめに

中の沢遺跡は、山本郡琴丘町鹿渡字中の沢地内の遺跡である。遺跡からは、縄文時代後期の土器を伴うフラスコ状土坑（ＳＫＦ06）や縄文時代の石器を伴う土坑（ＳＫ08）あるいは縄文時代後期と思われる土器を伴う土坑（ＳＫ13）などが検出されている。また、これらの遺構からは、生材や炭化材も伴っている。

ここでは、これらの遺構から検出された生材や炭化材の放射性炭素年代測定を行い、その樹種も検討した。なお、放射性炭素年代測定は、学習院大学の木越邦彦氏に測定していただいた。

２．放射性炭素年代測定

試料は、ＳＫ08土坑底面出土生材とＳＫ13土坑埋土下部出土炭化材である。

なお、年代値の算出には^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差（One sigma）に相当する年代です。また、試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値（B.P.）として表示してあります。また、試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、δ14Ｃ％を付記してあります。

第２表　中の沢遺跡出土材の放射性炭素年代測定結果とその樹種

試　　料	Gak－No.	^{14}Ｃ年代値（1950年よりの年数）	樹　種
ＳＫ08土坑底面生材	GaK-18181	1,830±100（A.D.120）	スギ
ＳＫ13土坑埋土下部炭化材	GaK-18182	3,100± 70（1,150 B.C.）	スギ
ＳＫＦ06フラスコ状土坑埋土炭化材	－	－	クリ・コナラ節

３．出土材の樹種同定

試料は、炭化材がＳＫ13土坑埋土下部出土材とＳＫＦ06フラスコ状土坑埋土出土材であり、生材がＳＫ08土坑底面出土材である。

このうち生材試料は、片刃カミソリを用いて横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面（柾目と同義）の３断面を作り、ガムクロラール（Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材試料は、比較的硬い部分を対象として、実体顕微鏡下で横断面について観察し、片刃カミソリなどを用いて横断面、接線断面、放射断面の３断面を作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM T－100型）で観察・同定する。以下に各標本の記載を述べ、その結果を第２表に示す。なお、ここで樹種の検討を行った生材プレパラートは、パレオ・ラボに保管してある。

スギ Cryptomeria japonica (Linn. fil.)D.Don スギ科 生材図版1a～1c、炭化材図版1a～1c.
仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行はゆるやかである（横断面）。分野壁孔は、水平方向に長軸をもった典型的なスギ型で、１分野に2個見られる（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり単列で2～12細胞高からなる（接線断面）。

以上の形質から、スギ科スギ属のスギの材と同定される。スギは東北から九州にかけての温帯から暖帯にかけて分布する常緑針葉樹である。このスギ材は、木理通直で割裂性が大きいため、板材や角材が取り易く、主に建築材などに利用される。

コナラ節　Quercus sect. Prinus ブナ科　炭化材図版2a～2c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のコナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ（Q.serrata）やミズナラ（Q.mongolica var.grossesrrata）、カシワ（Q.dentata）、ナラガシワ（Q.aliena）などがある。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科　炭化材図版3a～3c.

年輪のはじめに大型の管孔が1～3列並び、そこから除々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2～17細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径１mに達する落葉広葉樹である。

このクリ材は、全国の縄文時代の遺跡から良く出土する木材であり、建築部材や杭材など広い用途に利用されている。しかしながら、一方で縄文時代においては、重要な食糧源であることから、積極的なクリの保護、管理も指摘されている（千野、1983）。

引用文献

千野裕道（1983）　縄文時代のクリと集落周辺植生．東京都埋蔵文化財センター「研究論集　Ⅱ」（財）東京都埋蔵文化財センター p27－42.

第6章　まとめ

今回の調査では、遺構内・外から、縄文時代の前期と中期～後期、晩期にかけての土器・石器が出土しており、その遺物量は大コンテナ(縦59cm×横38.6×深さ20.7cm)で6箱である。遺構は土坑10基、フラスコ状土坑1基、焼土遺構7基、炉跡1基、溝跡4条、性格不明遺構4基の計27遺構を検出した。ここでは、遺構の帰属時期と主な遺構の用途について考察し、遺跡の性格を考えたい。

上記の遺構のうち、遺構内から縄文時代の遺物が出土したのは計14遺構である。その内訳は土坑がＳＫ08・13・24の3基で、フラスコ状土坑（ＳＫＦ06）1基、焼土遺構はＳＮ17・22・23・28の4基、炉跡（ＳＲ27）1基、溝跡はＳＤ01・03・05の3条、その他の遺構はＳＸ09・16の2基である。ほかの13遺構は遺物がないため時期不明である。

土坑ＳＫ08・ＳＫ13について考えてみる。両遺構はＳＤ03の西側で検出したもので、ＳＫ13からは縄文時代後期と思われる土器、ＳＫ08からは石器が、いづれも埋土から出土している。平面形は不整楕円形で、他の土坑に比較して、深い掘り込みをともない、遺構検出面もしくは埋土上位で焼土が確認されたものである。土層断面の観察によれば、埋土中にも焼土や炭化物を含んだ層があり、壁付近が焼けていたり、底面近くに炭化物層がみられる。また、壁際には地山ブロックが多く認められるという共通した特徴がある。また、ＳＫ13は前記のような深い掘り込みのほかに、焼土層や地山ブロックが堆積する浅い掘り込みをともなう2段構造となっており、カマド煙道部の煙出口を想起させる。以上のことから、両遺構は、土坑上に覆いのあるトンネル状の空間であったもので、坑底面付近や埋土上位付近で火を焚いた、火熱利用の施設と推定される。

さて、ＳＫ08・ＳＫ13とした土坑と類似する縄文時代の遺構には炉穴がある。炉穴は、長径約1m内外の竪穴を構築しており、竪穴住居の中の炉に類した機能が推定されている。縄文時代早期から前期にかけて、関東地方を中心に、東北地方北部の青森県にも分布する。[註1] また、炉穴は以前に南九州において、二つの穴が連結することから「連結土坑」や、土坑を繋ぐ煙道部が長いことから「煙道付き炉穴」とも呼ばれた。最近、南九州の草創期にも存在することが確認されている。南九州地方の草創期の炉穴の機能については、保存食作りのための燻製施設の可能性が導きだされている。[註2]

以上の炉穴と比較してみると、本遺構はやや深い掘り込みを有し、明確な煙道部が無いなどの形態上の違いがある。ＳＫ13からは、前述のように、縄文時代後期と思われる土器が、ＳＫ08からは石器が埋土から出土している。しかし、ＳＫ13に隣接するＳＤ03溝跡や、ＳＫ13が位

置する同グリッドの遺構外から、ＳＫ13内出土土器と同じ後期の遺物が出土しており、これらの遺物が遺構内に流れ込んだ可能性も否定できない。また、第５章にあるように、ＳＫ08の生材とＳＫ13の炭化材の放射性炭素年代測定結果についてもバラツキがある。以上のようなことから、機能を含めた遺構の性格の解明や、遺構の年代については、今後の検出例の増加を待って検討されるべきことと考えられる。

ＳＲ27土器埋設炉は北東部で１基検出されたもので、土器の周囲には焼土・炭化物の広がりが確認された。竪穴住居跡を想定して周囲を精査したが、本遺構に伴うと思われる柱穴や壁溝などは検出されなかった。土器は、粗製土器で器形や器厚・施文法などから、縄文時代晩期のものと推定される。

土坑としたなかで、ＳＫ26から遺物は出土していないが、壁際に立石があり、確認の段階ではその回りに極く薄い焼土の広がりが検出された。立石は浅い皿状の掘り込みに立てられていたものである。この遺構は草創期から晩期まで使用された「配石地床炉」[註3]と、浅い掘り込みに石と焼土をともなうという点で似ている。また、立石と焼土の存在から、祭祀的な様相も感じられる。この地点のすぐ下は、現在は水路や沢であるが、縄文時代においては川であった可能性もある。今回の調査では、石錘が比較的多く、東側から出土しており、漁撈に係わる祭祀との関係も考える必要があろう。

ＳＫ26と類似する遺構としては、ＳＮ17・19・20・22焼土遺構があり、立石（配石）は無いが、掘り込みの上部に焼土を伴うことから、炉の１類型とも考えられる。ほかに、掘り込みはないが、ＳＮ18焼土遺構も炉（地床炉）としての機能を果たしていたものであろう。遺構の帰属時期は、ＳＮ23・28は後期前半、ＳＮ22は中期後半～後期前半である。また、ＳＮ18～20も、遺物は出土していないが遺構の形態や分布状況から、縄文時代中期後半～後期前半の所産と考えられる。

以上述べたＳＲ27土器埋設炉やＳＫ26土坑、ＳＮ17・19・20・22焼土遺構は、フラスコ状土坑を含めて、いづれも北東側に集中して分布していたもので、北東側は、縄文時代中期後半～後期前半と晩期に断続的に使用された場所であることがわかった。

西側で検出したＳＤ03溝跡は、南西から北東方向に緩く傾斜して沢まで伸びている。部分的にかなり広狭があり、南西ではかなり深く、北東は大変浅い。断面形も一定していない。底面や埋土からは土器や石器が出土し、縄文時代後期前半に帰属することが判明した。石器のなかの礫石器類は、北東端付近でまとまって出土したもので、廃棄されたものと考えられる。

この溝跡は、地形を見ると北東から続く沢の延長線上にあり、自然地形をうまく利用したことがうかがわれる。上部の北西側の状況を見ると、幅は狭いが、比較的深く、底面・壁とも凹凸がある。本遺構の周辺には、土坑（ＳＫ）などがあるが、それらの遺構との係わりや、遺跡

全体のなかでどういった役割を果たしていたのかは、部分的な調査ということもあり、不明である。

今回の調査地点は、前述したように段丘の北東部にあたり、北西側から南東側にかけて緩く傾斜している。調査区の西端には隣接して東西に延びる農道があり、農道を挟んだ西側のほ場整備の対象区域外には、1段高い平坦面が山林や畑として残っている。農道造成前の原地形は、山林や畑の平坦部から1段低い調査区にかけて緩い斜面となっていたと考えられることから、上位の平坦面にも縄文時代の竪穴住居跡などの遺構の存在が予想され、今回の調査地区は集落の一部であると推定される。

註1　十菱駿武・鈴木克彦　「炉穴の研究」『考古風土記　第9号』　1984（昭和59）年

註2　新東　晃一　「南九州の初期縄文文化」『季刊考古学　第50号』　1994（平成6年）

註3　目黒　吉明　「住居の炉」『縄文文化の研究第8巻　社会・文化』　雄山閣　1982（昭和57）年

第６章　まとめ

参考文献

青森県教育委員会　『中の平遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第25　1975（昭和50）年

青森県教育委員会　『三内澤部遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第41集　1978（昭和53）年

秋田市教育委員会　『小阿地下堤遺跡・坂ノ上遺跡発掘調査報告書』　1976（昭和51）年

秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ－居熊井遺跡・湯瀬館遺跡・大地平遺跡・上山田遺跡・堂の上遺跡・上葛岡遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第78集　1982（昭和57）年

秋田県教育委員会　『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－野沢岱遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第237集　1993（平成５）年

秋田県教育委員会　『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－山王岱遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第221集　1992（平成４）年

秋田県教育委員会『杉沢台・竹生遺跡』秋田県文化財調査報告書第83集　1981（昭和5）年

秋田県教育委員会『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第84集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』　秋田県文化財調査報告書　第120集　1984（昭和59）年

秋田県教育委員会　『八木遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第181集　1989（平成元）年

秋田県稲川町教育委員会　『欠上り遺跡発掘調査報告書』　1990（平成２）年

今井富士雄・磯崎　正彦　「十腰内遺跡」　十腰内遺跡調査団　1969（昭和44）年

岩手県立博物館　『岩手の土器－県内出土資料の集成－』　1982（昭和57）年

㈶岩手県埋蔵文化財センター　『田代遺跡発掘調査報告書』　岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第41集　1982（昭和57）年

梅宮　茂　「複式炉文化論」『福島考古』第15号　福島県考古学会　1974（昭和49）年

江坂　輝彌　『石神遺跡』　ニュー・サイエンス社　1970（昭和45）年

大館市史編さん委員会　『大館市史』第一巻　1979（昭和54）年

葛西　励　「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化第11号』　1979（昭和54）年

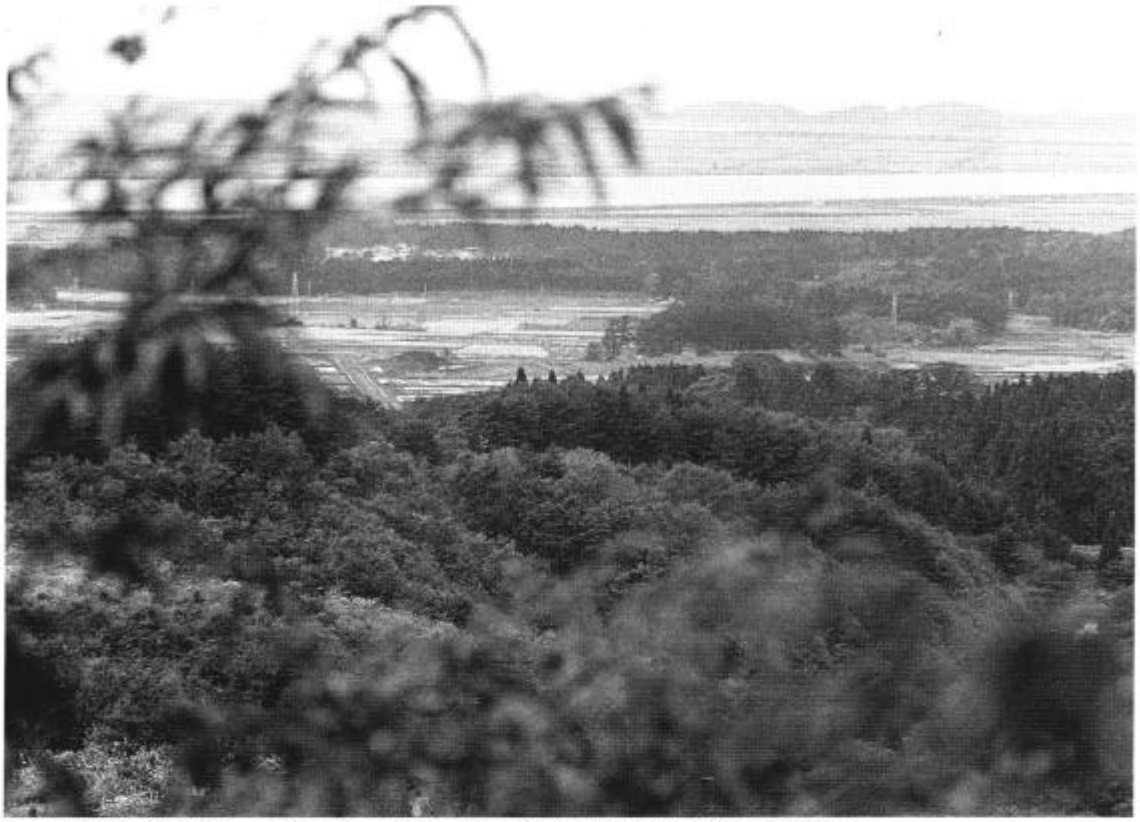
鹿角市　『鹿角市史』第一巻　1982（昭和57）年

鹿角市教育委員会　『天戸森遺跡発掘調査報告書』　鹿角市文化財調査資料26　1984（昭和59）年

鹿角市教育委員会　『天戸森の土器』　鹿角市文化財調査資料41　1990（平成２）年

縄文文化検討会　『第１回　縄文文化検討会　シンポジウム　東北地方北部の縄文時代中期末葉～後期前半の土器編年について』　1986（昭和61）年

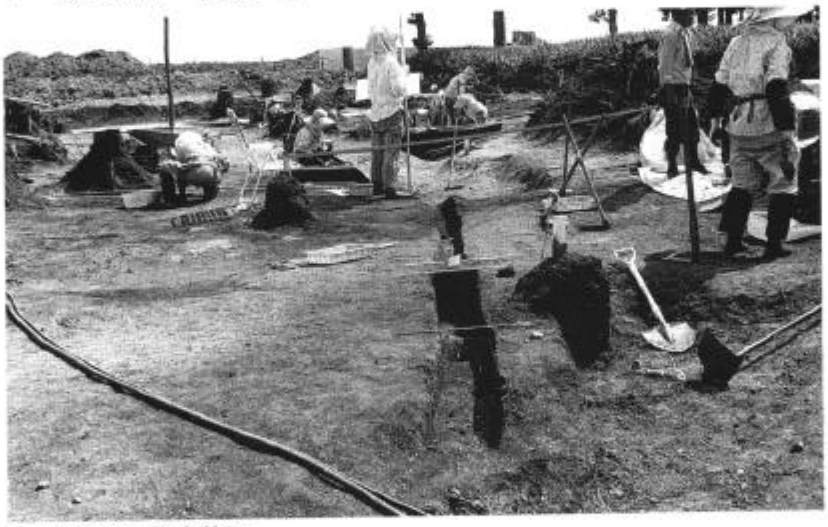
鈴木　克彦　「円筒土器に後続する土器の編年」『考古風土記　第７号』1982（昭和57）年
鈴木　克彦　「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年考察」『北奥古代文化　第８号』
北奥古代文化研究会　1976（昭和51）年
鈴木道之助　『図録石器の基礎知識Ⅲ』　柏書房　1981（昭和56）年
角鹿　扇三・渡辺　兼庸　『角鹿扇三蒐集考古学資料集』　1980（昭和55）年
冨樫　泰時　「縄文中期の土器－東北地方－」『縄文土器大成２・中期』　講談社　1981（昭和56）年
中村　良幸　「「複式炉」について」『考古風土記　第７号』　1982（昭和57）年
成田　滋彦　「青森県の土器」『縄文文化の研究４』　雄山閣　1981（昭和56）年
成田　滋彦　「入江、十腰内式土器様式」『縄文土器大観４』　小学館　1989（平成元）年
西田　泰民　「堀之内・加曾利Ｂ式土器様式」『縄文土器大観４』　小学館　1989（平成元年）年
日本鉱業株式会社船川製油所　『大畑台遺跡発掘調査報告書』　1979（昭和54）年
丹羽　茂　「中期大木式土器様式」『縄文土器大観１』　小学館　1989（平成元）年
丹羽　茂　「大木式土器」『縄文文化の研究４』　雄山閣　1981（昭和56）年
二ツ井町教育委員会　『鳥野遺跡第２・３次発掘調査概報』　二ツ井町埋蔵文化調査報告書第２集
1992（平成４）年
宮城県教育委員会　『埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚－』　宮城県文化財調査報告書第19集
1969（昭和44）年
村越　潔　『円筒土器文化』　雄山閣　1974（昭和49）年
目黒　吉明　「住居の炉」『縄文文化の研究第８巻社会・文化』雄山閣　1982（昭和57）年
盛岡市教育委員会　『柿ノ木平遺跡－昭和57年度発掘調査概報－』　1983（昭和58）年
盛岡市教育委員会　『柿ノ木平遺跡－昭和59年度発掘調査概報－』　1985（昭和60）年
盛岡市教育委員会　『大館遺跡群（大館町遺跡）－昭和56年度発掘調査概報－』　1982（昭和57）年
盛岡市教育委員会　『繋遺跡－昭和58年度発掘調査概報－』　1984（昭和59）年
盛岡市教育委員会　『大館遺跡群－昭和55年度発掘調査概報－』　1981（昭和56）年
盛岡市教育委員会　『大館遺跡群（大新町遺跡・大館町遺跡）－昭和60年度発掘調査概報－』
1989（平成元）年
盛岡市教育委員会　『大館遺跡群　平成２年度発掘調査概要』　1991（平成３）年
盛岡市教育委員会　『大館遺跡群大館町遺跡　平成３年度発掘調査概要』1992（平成４)年
盛岡市教育委員会　『大館遺跡群（大新町遺跡・大館町遺跡）－昭和58年度発掘調査概報－』
1984（昭和59）年
渡辺誠　『縄文時代の漁業』　雄山閣　1973（昭和48）年
よねしろ考古学研究会　『よねしろ考古 第７号 特集 縄文時代前・中期のムラ』　1991（平成３）年



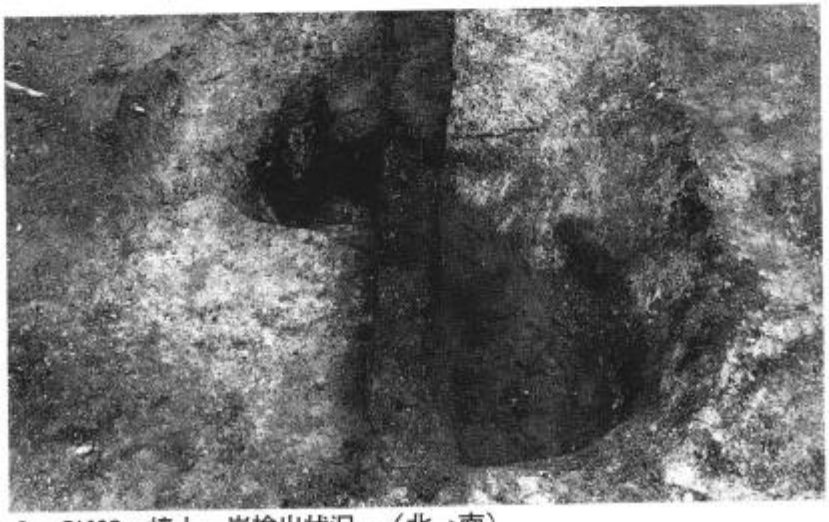
1　中の沢遺跡遠景　（東→）－右上の林の中の鉄塔付近が今回の調査区－

2　遺跡近景　（北→）

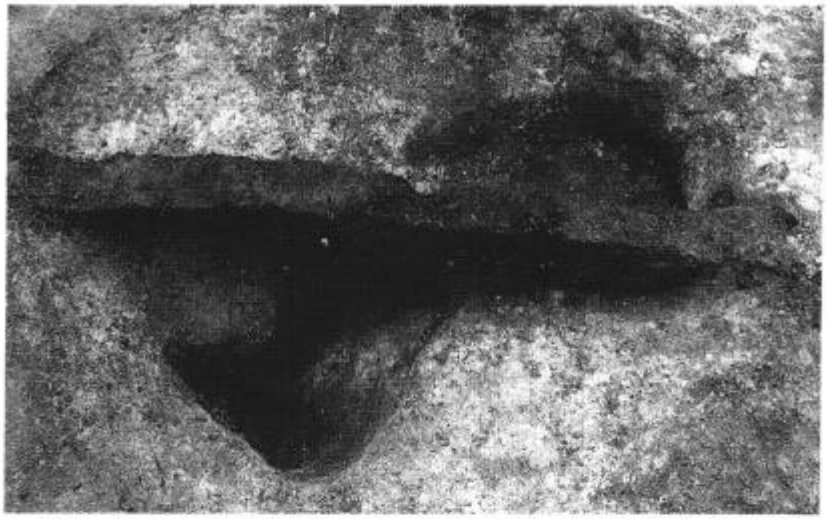
1　調査状況　（南東→）



2　SD05　調査状況

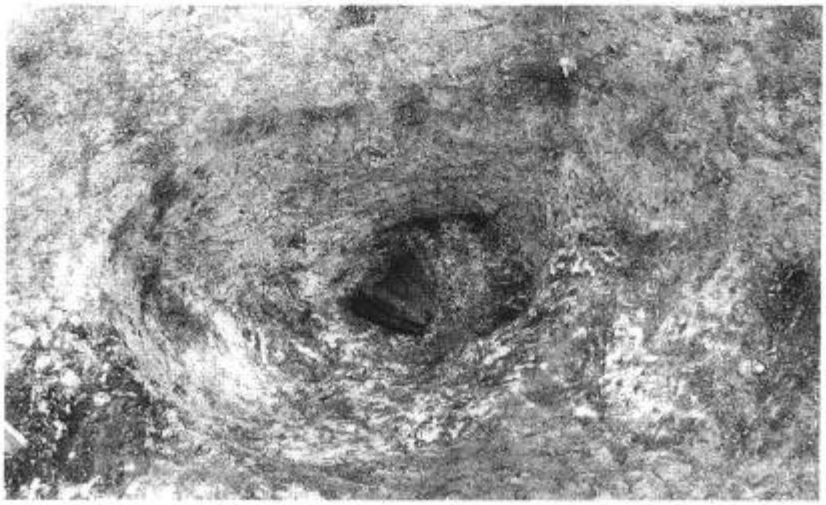


3　SK08　焼土・炭検出状況　（北→南）

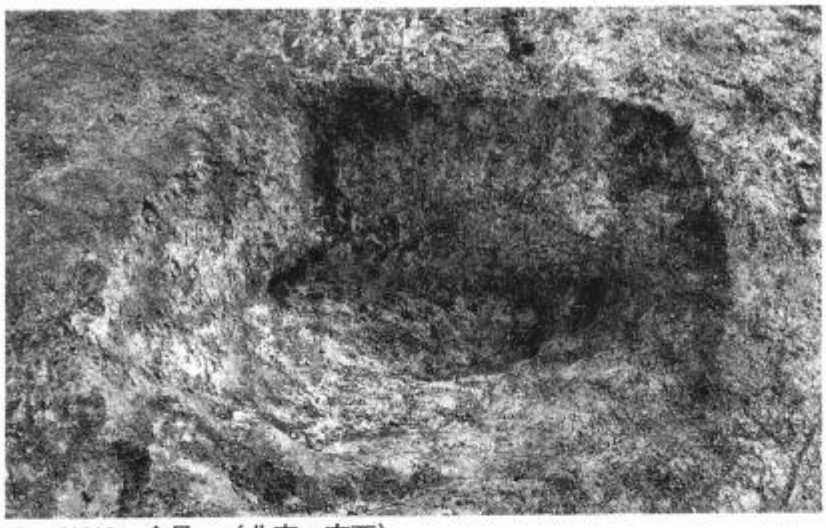


1　SK08　焼土・炭検出状況　（北→南）

2　SK08　土層断面　SP.C～D　（西→東）



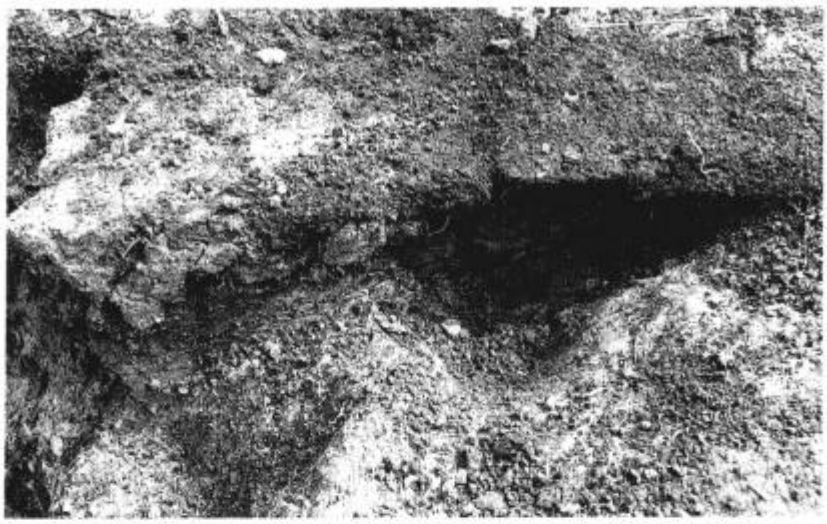
3　SK08　完掘　（南→北）



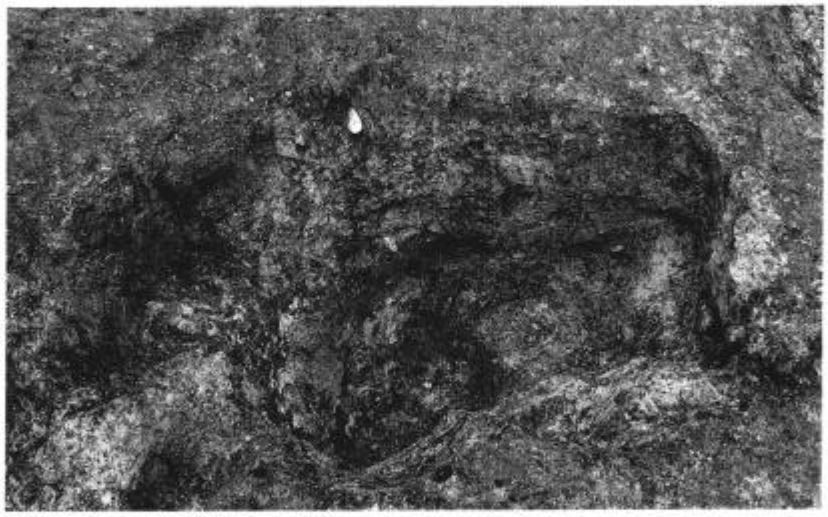
1　SK10　全景　（北東→南西）

2　SK11　完掘　（南東→北西）

3　SK13　土層断面　（西→東）



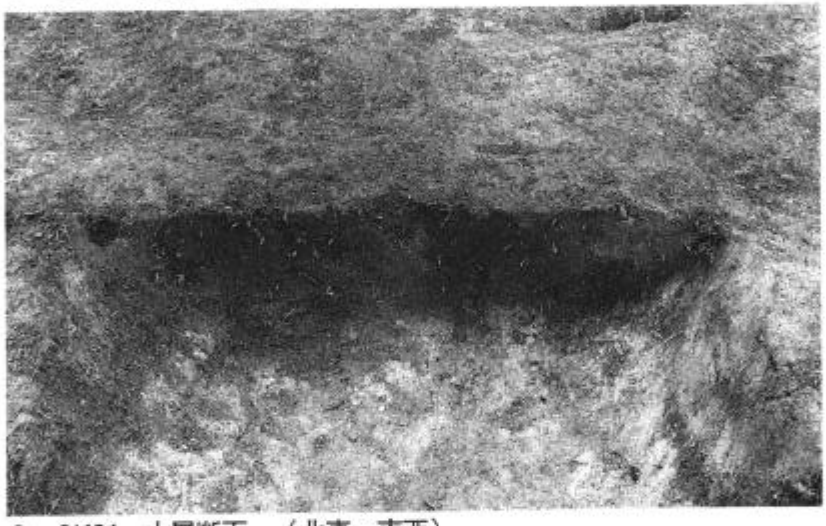
1　SK13　煙出し（？）断面　（西→東）



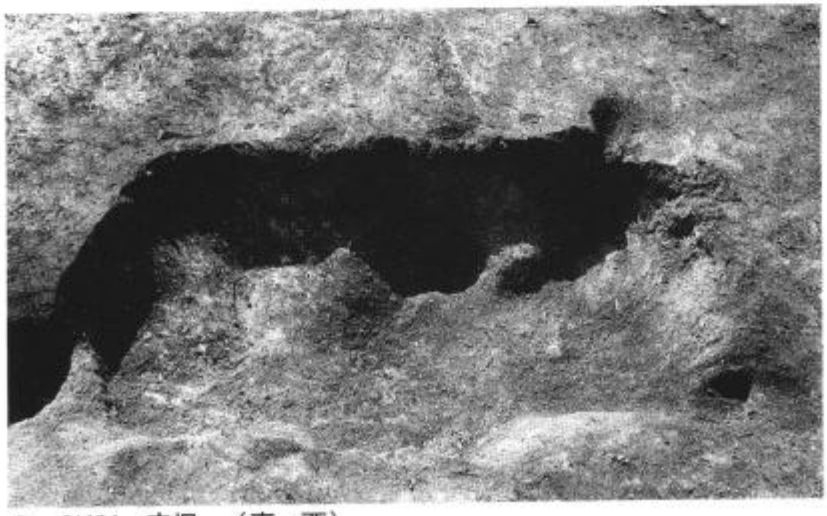
2　SK13　完掘　（西→東）

3　SK14　土層断面（東→西）

1　SK14　完掘　（西→東）

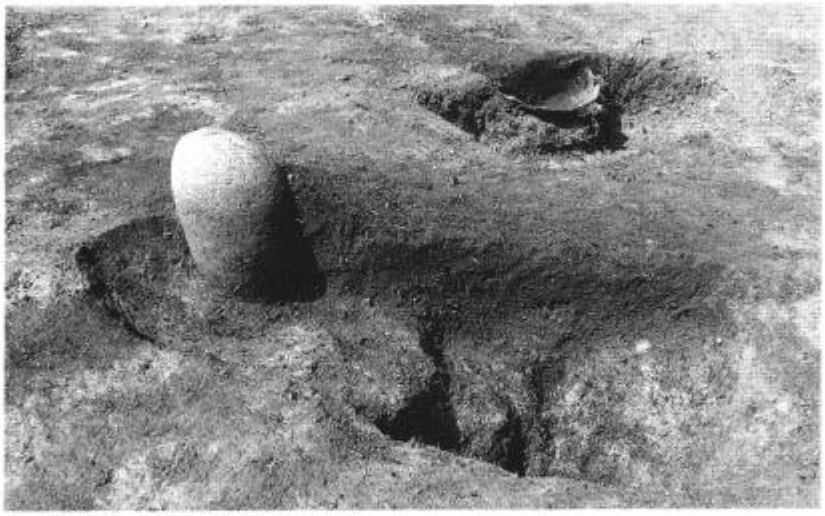


2　SK24　土層断面　（北東→南西）

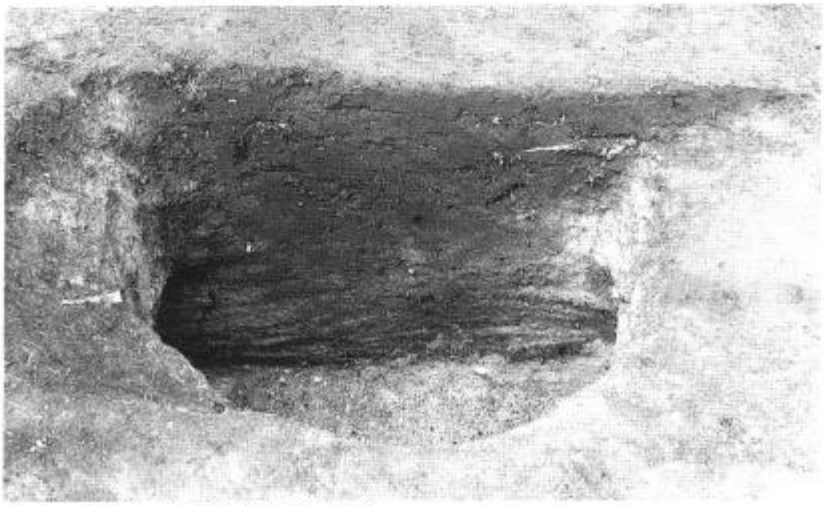


3　SK24　完掘　（東→西）

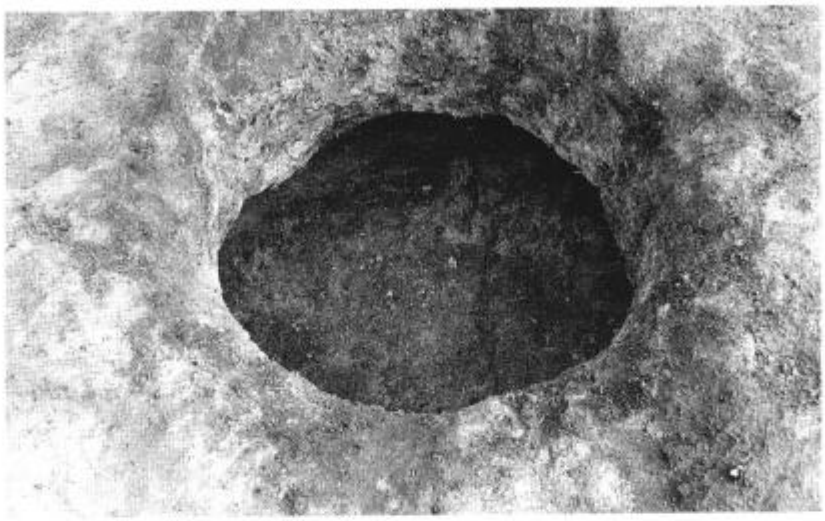
1　SK25　完掘　（北東→南西）



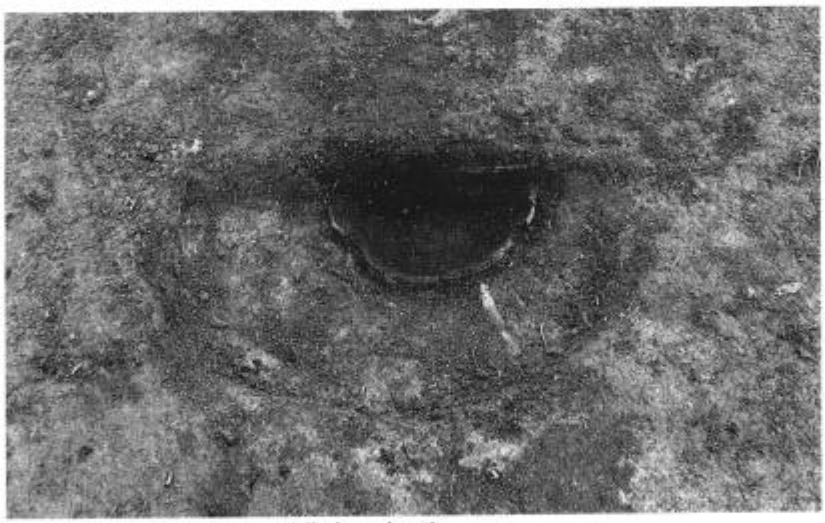
2　SK26　土層断面（東→西）



3　SKF06　土層断面（東→西）



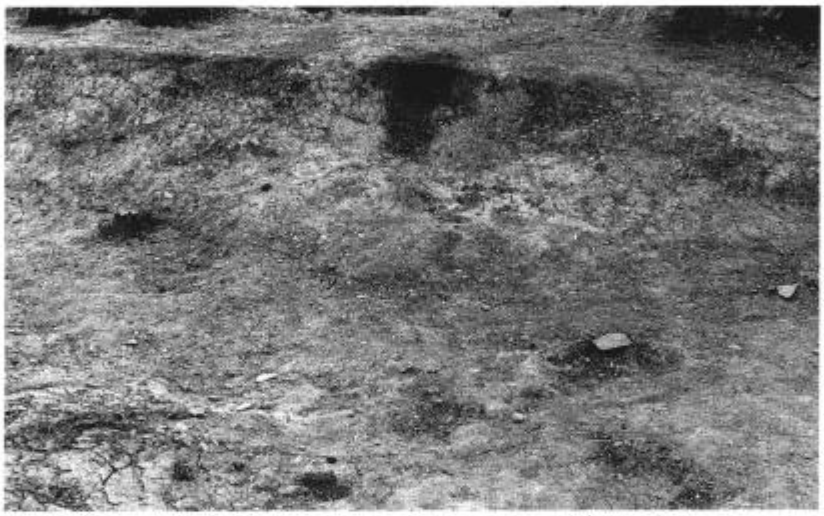
1　SKF06　完掘　（北→南）



2　SR27　確認断面　（北東→南西）

3　SR27　最終状況

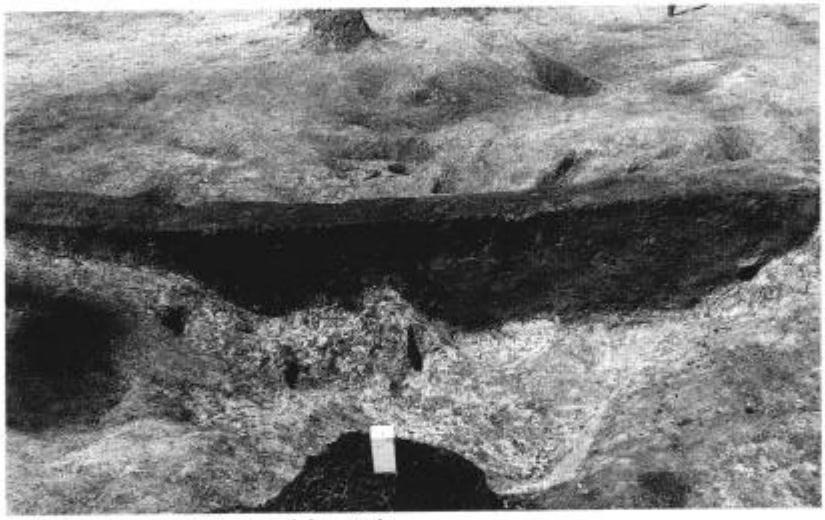
1　SD03　土層断面　SP.A～B　（北→南）



2　SD03　遺物出土状況　（RP1.RQ2～3）　（東→西）

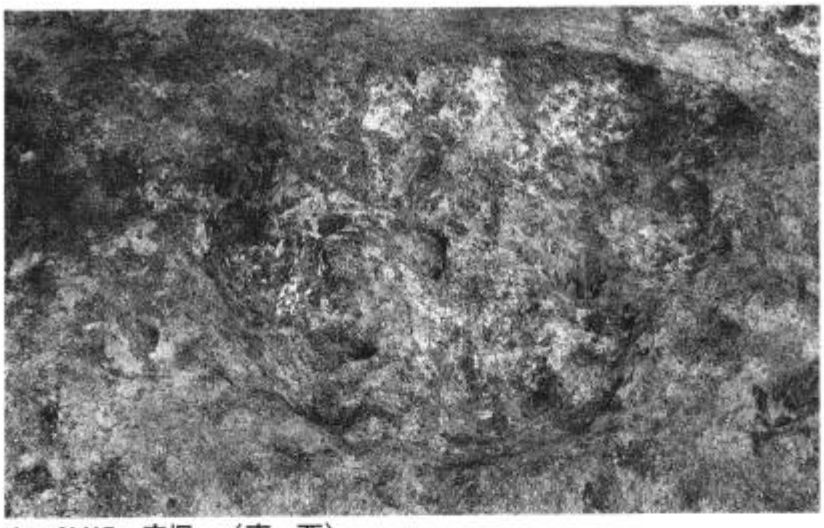
3　SD03　完掘　（南→北）

1　SD03　完掘　（北→南）

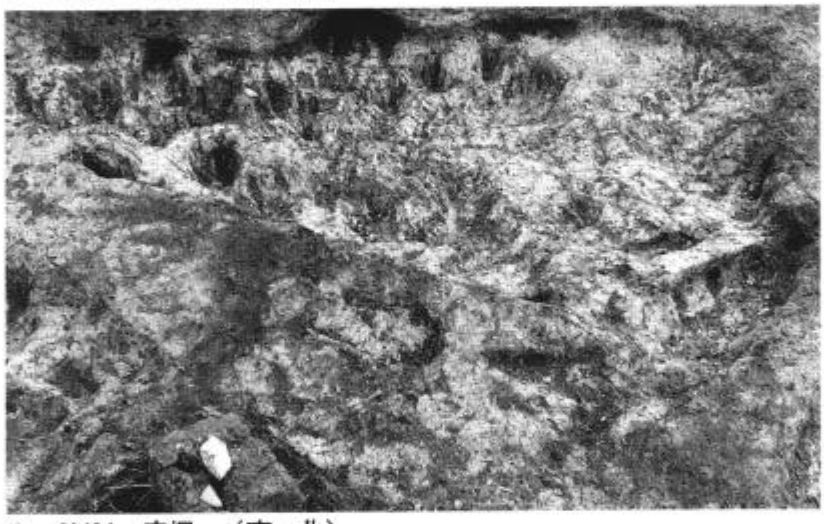


2　SX09　土層断面　（東→西）

3　SX09　完掘　（東→）

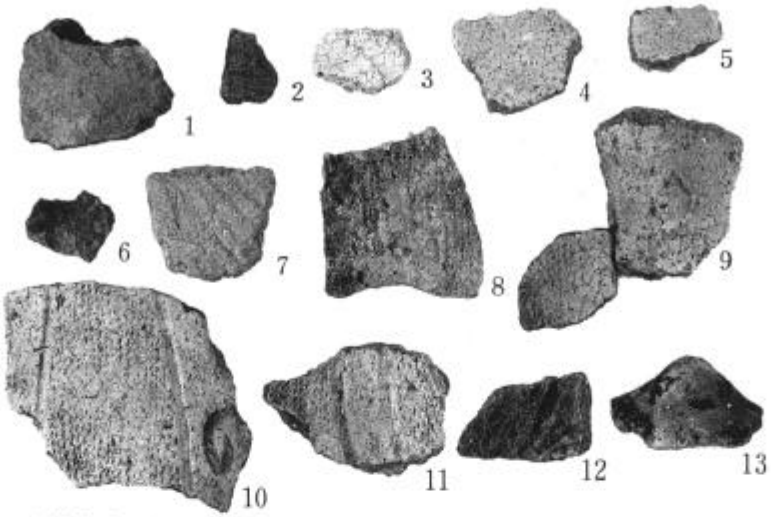


1　SX15　完掘　（東→西）

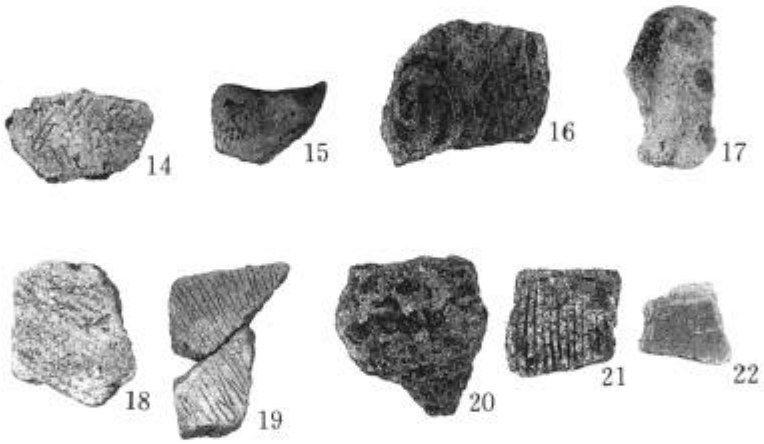


2　SX21　完掘　（南→北）

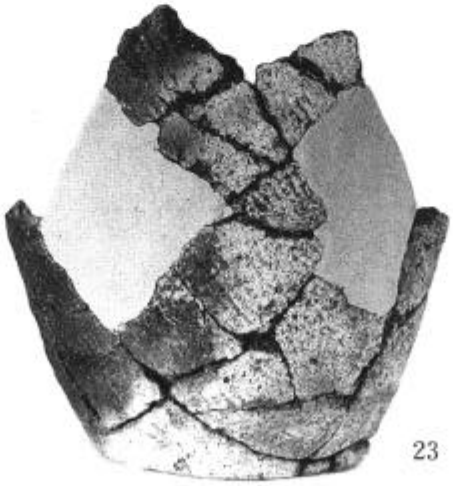
3　SX15・16・21　完掘　（東→西）



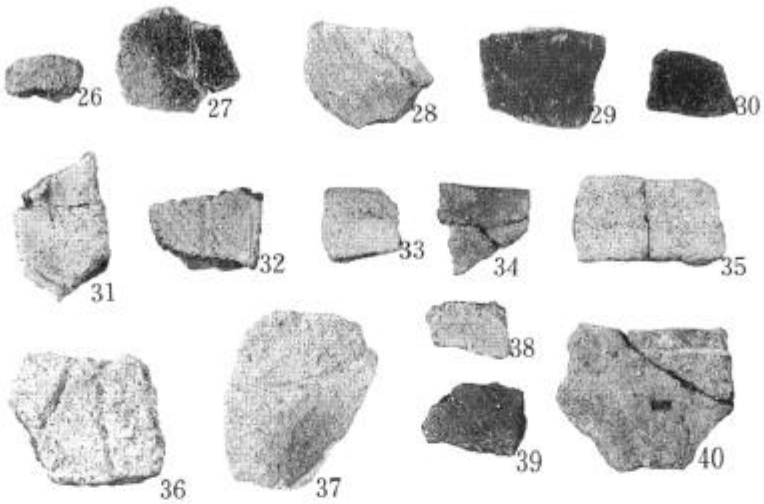
1　遺構内土器１－１　１～13



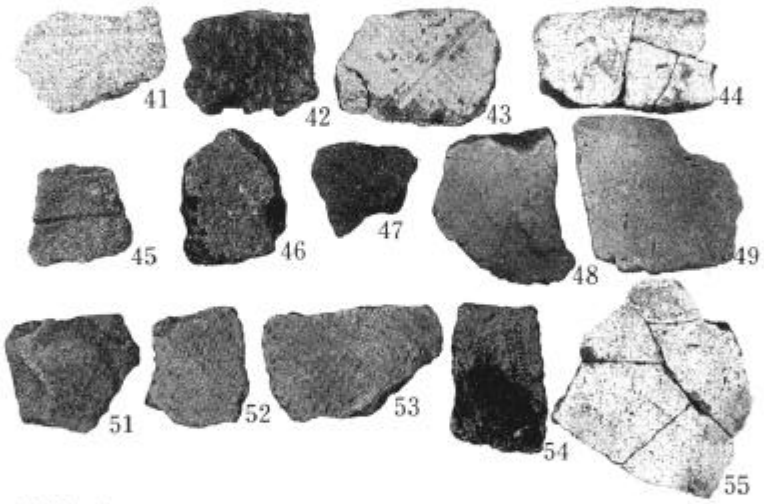
2　遺構内土器１－２　14～22



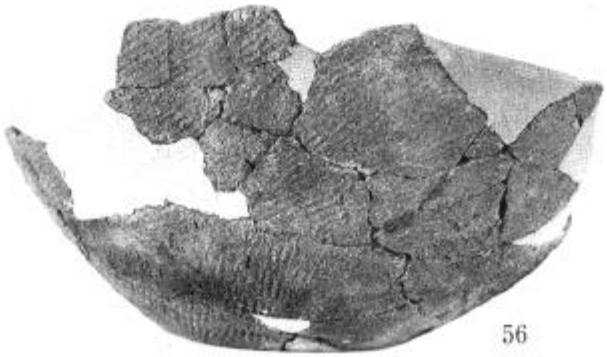
3　遺構内土器１－３　23



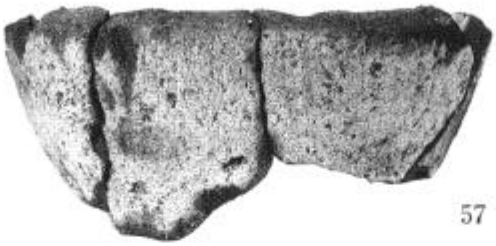
1　遺構内土器２－１　26～40



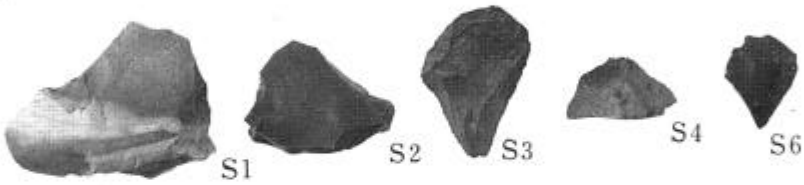
2　遺構内土器２－２　41～55

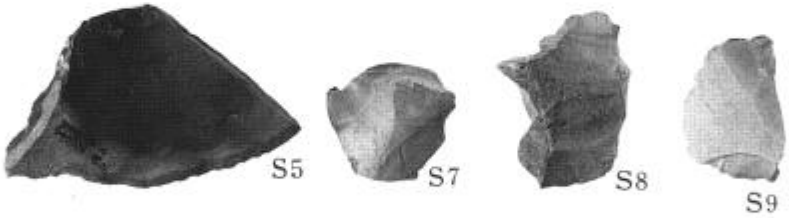


3　遺構内土器２－３　56

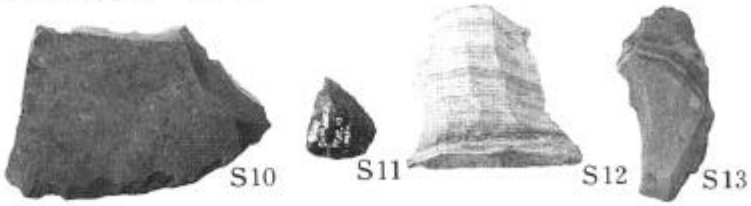


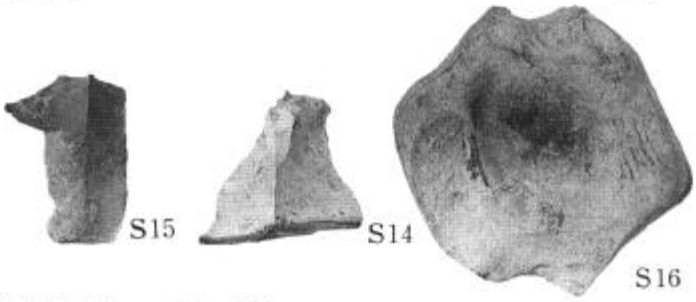
1　遺構内土器２－４　57



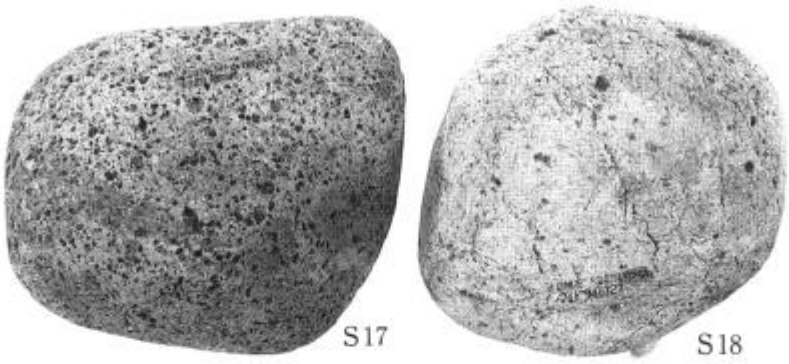


2　遺構内石器１　S1～S9

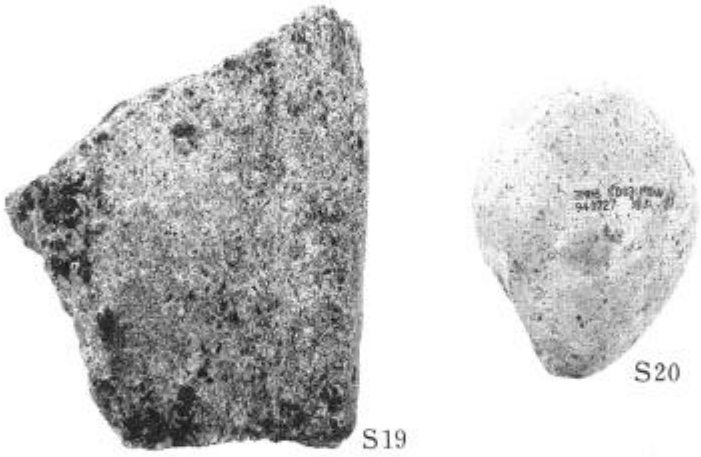




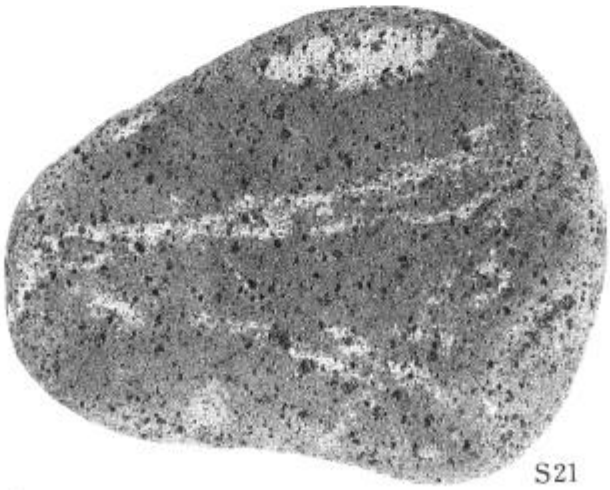
3　遺構内石器２　S10～S16



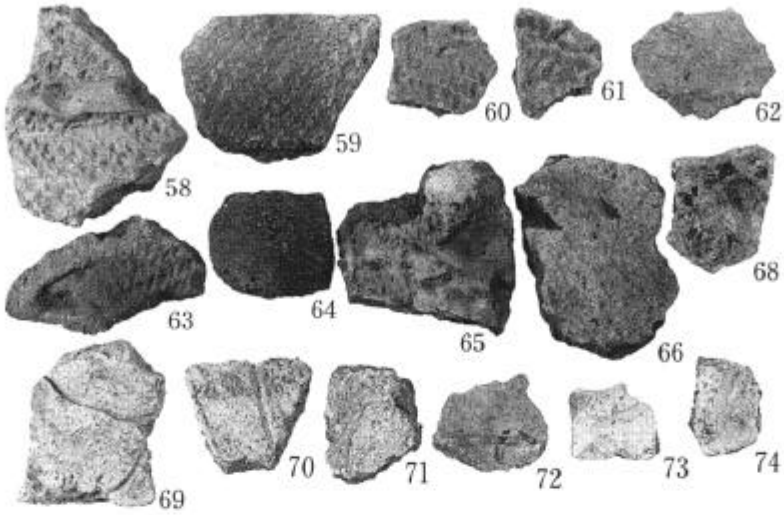
1　遺構内石器 3　S17.S18



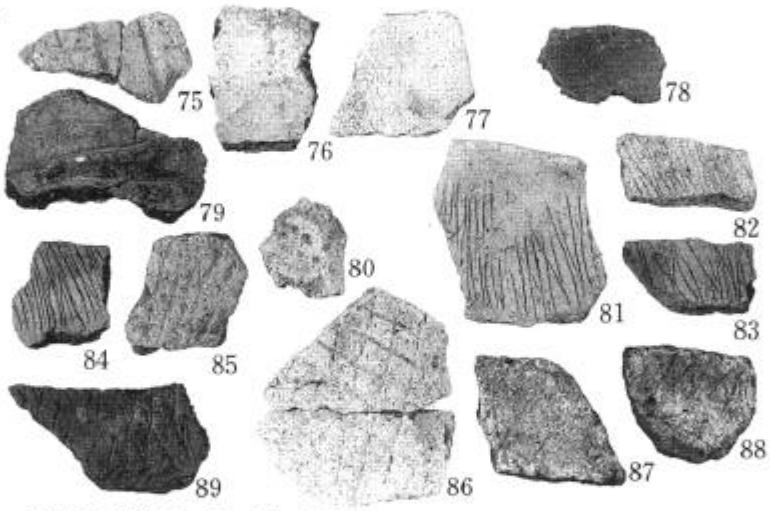
2　遺構内石器 4　S19.S20



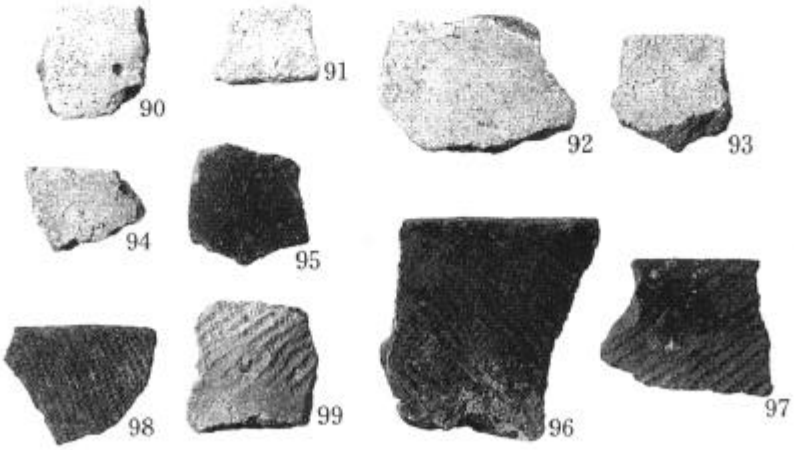
3　遺構内石器 5　S21



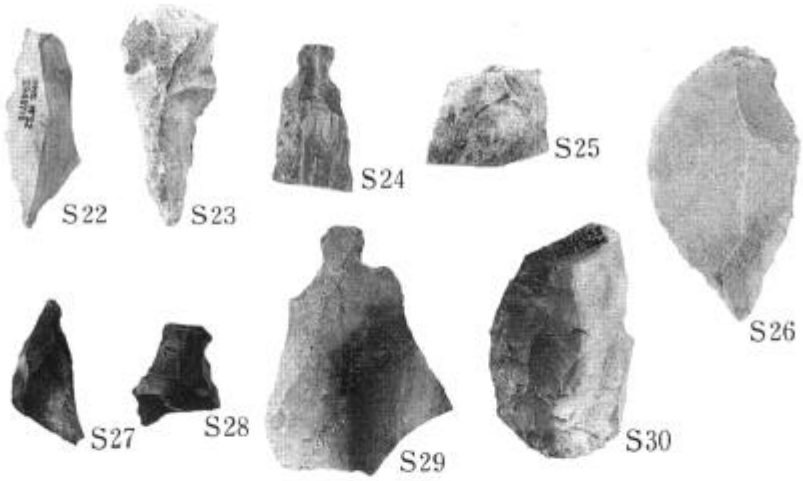
1　遺構外土器１－１　58～66　68～74



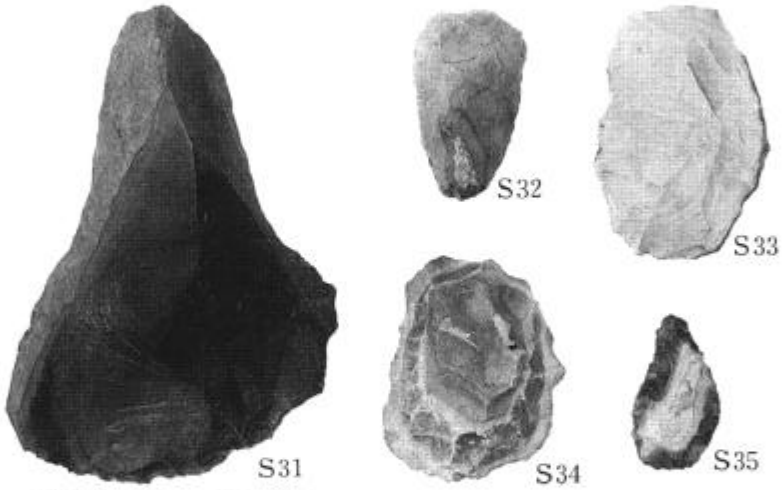
2　遺構外土器２－２　75～89



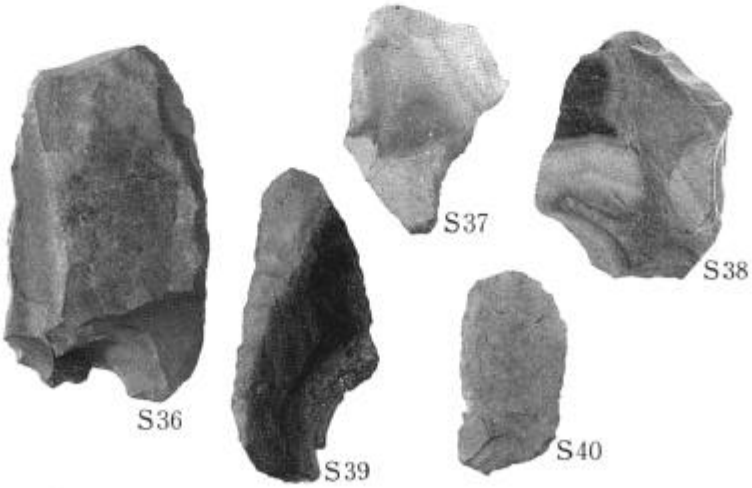
3　遺構外土器３　90～99



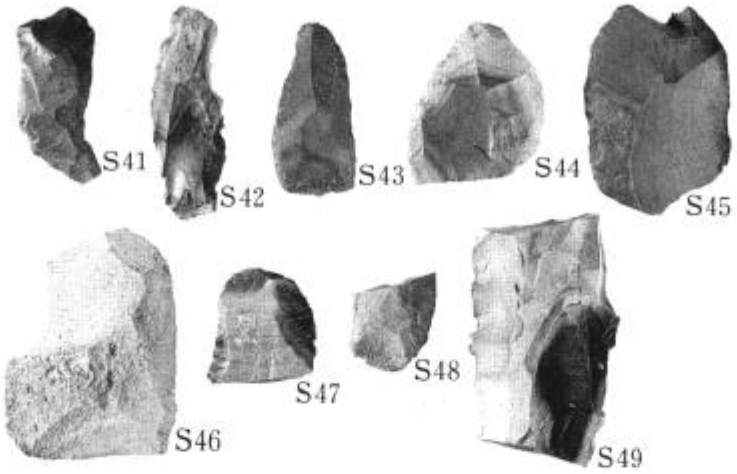
1　遺構外石器 1　S22～S30



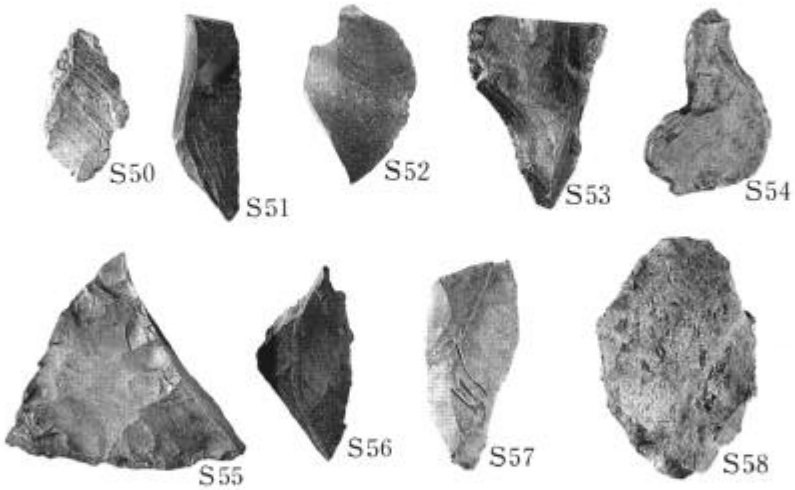
2　遺構外石器 2　S31～S35



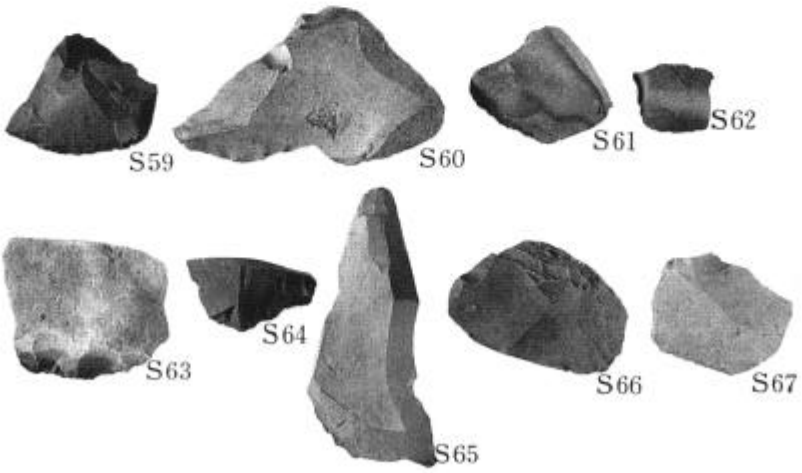
3　遺構外石器 3　S36～S40



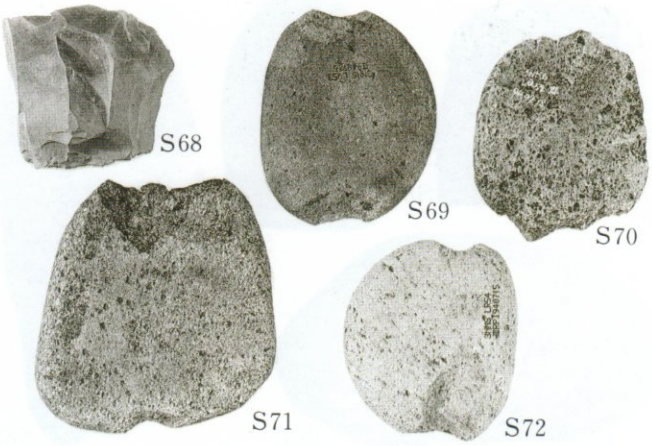
1　遺構外石器 4　S41～S49



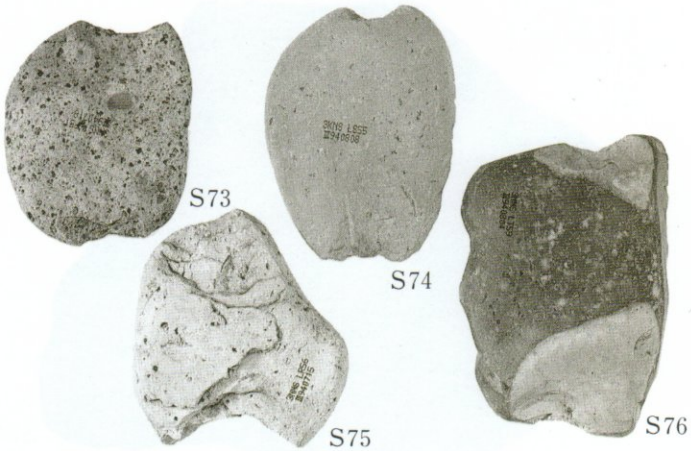
2　遺構外石器 5　S50～S58



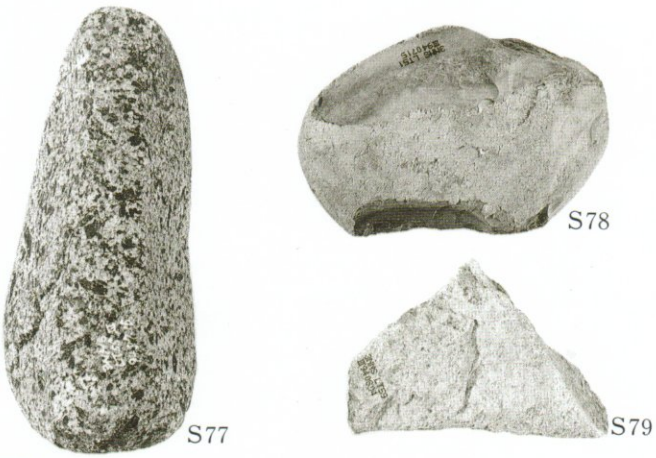
3　遺構外石器 6　S59～S67



1　遺構外石器７　S68～S72



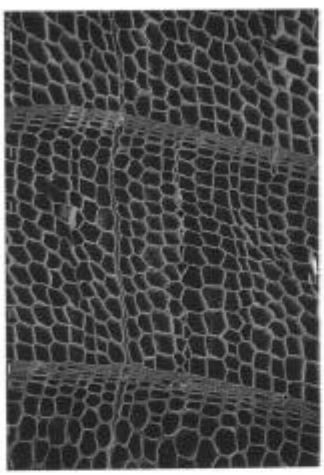
2　遺構外石器８－１　S73～S76



3　遺構外石器８－２・９　S77～S79

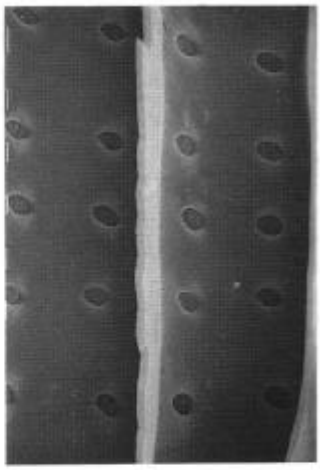
1　遺構外石器 9 ・10　S80～S83

2　遺構外石器10　S84

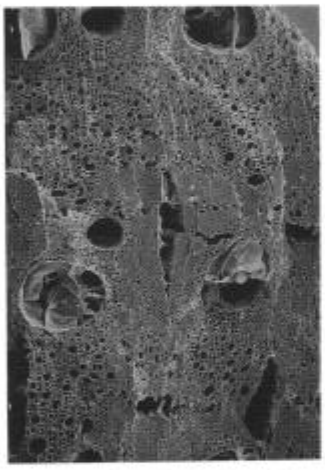


1 a.スギ（横断面）Sk13　bar：0.1mm

1 b.同（接線断面）　bar：0.1mm



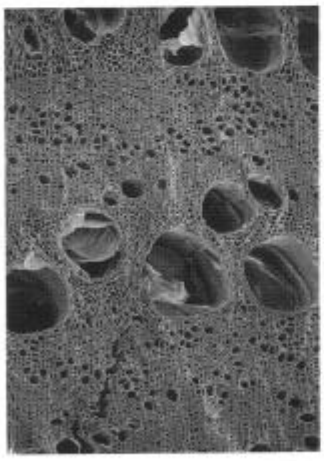
1 c.同（放射断面）　bar：0.01mm



2 a.コナラ節（横断面）SKF06 bar：0.5mm

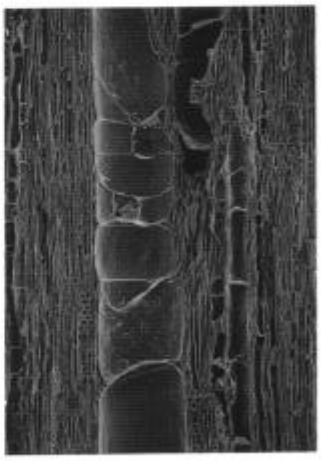
2 b.同（接線断面）　bar：0.5mm

2 c.同（放射断面）　bar：0.5mm



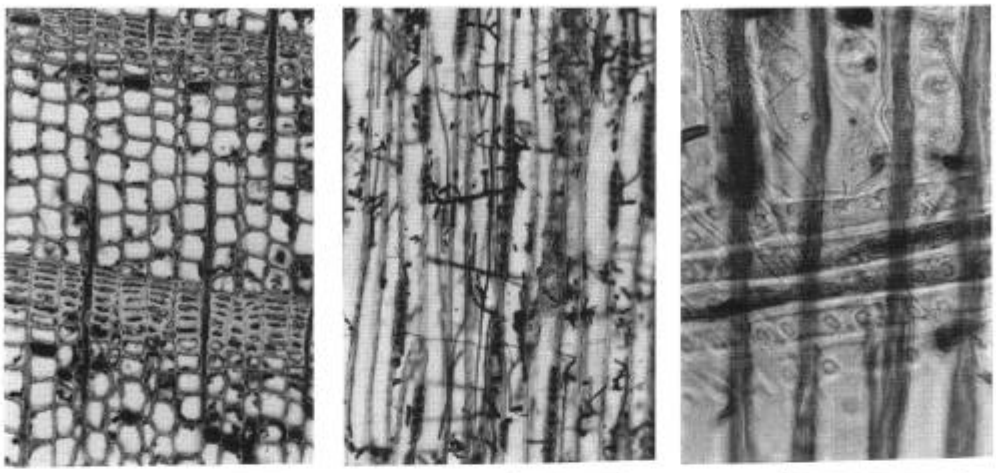
3 a.クリ（横断面）SKF06　bar：0.5mm

3 b.同（接線断面）　bar：0.1mm



3 c.同（放射断面）　bar：0.5mm

中の沢遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



1 a.スギ（横断面）Sk08　bar：0.2mm　　1 b.同（接線断面）　bar：0.2mm　　1 c.同（放射断面）　bar：0.1mm

中の沢遺跡出土材の樹種顕微鏡写真

あ と が き

平成６年の夏は少雨と暑さのため全国的に水不足で、１ヶ月ほどの調査期間中に雨が降った２日間を除けば、いづれも真夏日でした。氷水の入った水筒は必需品で、この夏ほど水の美味しさと大切さを実感した年はなかったように思います。

そんな中、〝アイスノン〟や〝草〟を背負いながら暑さをしのぎ、「ハクラン」もなんのその、工事用車両の出す砂ぼこりと騒音をものともせず、発掘調査に従事した方々に敬服しました。また、遺物整理作業に従事した方々も、残暑厳しい頃から始まった石器の実測、冬場の土器や石器のトレース・挿図作成などの作業をてきぱきと手際よくこなしてくれ、無事、報告書を刊行することができました。

末筆ながら、ここに氏名を記して感謝の意を表します。

［発掘作業従事者］

阿部　清子	阿部リツヨ	石川　信一	伊藤　キヨ	大山　ヤエ
金子　セツ	鎌田　央保	川村テツエ	北嶋　久	北嶋美枝子
工藤　悦子	工藤チエ子	国塚　テツ	児玉　梅弥	児玉　トシ
児玉　洋子	児玉　秀信	斎藤　エミ	斎藤　キサ	佐々木栄子
佐藤トシエ	進藤　三郎	進藤　ツヤ	関　登美子	高橋トミエ
田村多右衛門	田村　チエ	田森　金蔵	田森ツルノ	田森　ミエ
三浦　チサ				

［整理作業従事者］

草彌　美香	佐藤　節子	畑本　早百合	藤原　堅晃

（敬称略・50音順）

報告書抄録

ふりがな	なかのさわいせき
書名	中の沢遺跡
副書名	県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第255集
編著者名	柴田陽一郎
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　TEL 0187－69－3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010　秋田市山王四丁目1番2号　TEL 0188－60－3193
発行年月日	西暦　1995年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
中の沢（なかのさわ）	秋田県山本郡琴丘町鹿渡字中の沢（あきたけんやまもとぐんことおかまちかどあざなかのさわ）	53341	——	40度 4分 20秒	140度 5分 8秒	19940711～ 19940808	3,300	ほ場整備（県営ほ場整備事業琴丘地区）に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
中の沢	集落の一部	縄文時代	土坑　4基 フラスコ状土坑　1基 焼土遺構　7基 炉跡　1基 溝跡　3条 その他の遺跡　2基	土器 石器（石鏃、石錐、石匙、石篦、打製石斧、不定形石器、微小剥離痕ある石器、石核、石錘、凹石、敲石、砥石、石皿 （大コンテナで6箱）	坑底面付近や埋土上位付近で火を焚いた、火熱利用の施設と推定される土坑2基を確認。 立石と焼土を伴う土坑を確認。 隣接している調査区外の平坦部に竪穴住居跡の存在も予想されることから、集落の一部と推定。
		時期不明	土坑　6基 溝跡　1条 その他の遺構　2基		